

西ノ辻遺跡

—第5次発掘調査概要報告書—

2000. 3

財団法人 東大阪市文化財協会

西ノ辻遺跡第5次発掘調査概要報告書

例　　言

1、本書は、1981年に㈱百光社の貸しビル建設工事に伴って実施した西ノ辻遺跡第5次発掘調査の概要報告書である。

2、現地調査は、東大阪遺跡保護調査会が東大阪市教育委員会の委託をうけて実施した。

調査は1981年8月25～10月28日まで上野利明氏（現在東大阪市教育委員会青少年教育課勤務）によって行われた。

遺物整理と報告書の作成は、新たに1982年に設立された財団法人東大阪市文化財協会が行った。

3、調査補助に次の方の協力を得た。

現場の発掘調査 落合信生・高石俊也・山口靖弘

遺物の整理作業 戎麻里子・木下美佐・佐々木志保・鈴木智子・武智あゆみ・中西久実・

沼田貴美・浜 祐子・藤崎博子・船橋則子・堀智美・本田けい子・宮崎啓子・山木万里

4、本書は曾我恭子が執筆、編集をした。

なお遺構図では一部、上野氏の業務報告を参考にした。遺構の名称は図面・遺物の注記をそのまま生かして保管するため、調査時のものを使っている。

5、図版に納めた遺構写真は上野氏が撮影し、遺物写真はスタジオG.F.プロに委託した。

遺物の鑑定には奈良国立文化財研究所の村上隆氏、植物遺体の同定を大阪市立自然史博物館の那須孝悌氏、動物遺体の同定を樺野博幸氏、石材の鑑定を川端清司氏にしていただいた。

6、遺物は断面図を次のようにあらわして区別している。

無地△繩文・弥生土器・土師器、

細かい点△須恵器

疎らな点△磁器

黒色にちかい密な点△瓦器

本文目次

I 調査と調査報告にいたる経過	1
II 西ノ辻遺跡の位置と環境	1
III 調査の概要	
1. 調査地の基準ライン	3
2. 層序	3
3. 縄文時代～弥生時代	
3.1) 遺構	4
3.2) 遺物	5
4. 古墳時代以降	
4.1) 遺構	76
4.2) 遺物	79
5. 自然遺物	92
IV 「埴堀」の分析結果	95
V 埋没谷内出土の弥生土器について	96
VI まとめ	105

挿図目次

第1図 西ノ辻遺跡と周辺の遺跡分布図	2
第2図 第5次発掘調査地点と調査基準ライン設定図	3
第3図 調査地東壁の七層断面図	3
第4図 埋没谷平面図・断面図	4
第5図 縄文時代晚期土器・土偶・石ヒ寒測図	5
第6図 埋没谷-第11層内出土 弥生時代中期土器実測図	7
第7図 埋没谷-第10層内出土 弥生時代中期土器実測図	8
第8図 埋没谷-第9層内出土 弥生時代中期土器実測図	9
第9図 埋没谷-第8層内出土 弥生時代中期土器実測図-1	11
第10図 埋没谷-第8層内出土 弥生時代中期土器実測図-2	12
第11図 埋没谷-第7層内出土 弥生時代中期土器実測図-1	14
/	
第14図 埋没谷-第7層内出土 弥生時代中期土器実測図-4	17
第15図 埋没谷-第7層内出土 弥生時代後期土器実測図	18
第16図 埋没谷-第6(炭)層内出土 弥生時代中期土器実測図-1	20
/	
第21図 埋没谷-第6(炭)層内出土 弥生時代中期土器実測図-6	25
第22図 埋没谷-第6層内出土 弥生時代中期土器実測図-1	28
/	
第31図 埋没谷-第6層内出土 弥生時代中期土器実測図-10	37
第32図 埋没谷-第6層内出土 弥生時代後期土器実測図-1	39
第33図 埋没谷-第6層内出土 弥生時代中期～後期土器実測図-1	40
/	

第35図	埋没谷-第6層内出土	弥生時代中期～後期土器実測図-3	42
第36図	埋没谷-第6層内出土	弥生時代後期土器実測図-2	43
第37図	埋没谷-第5層内出土	弥生時代中期土器実測図	44
第38図	埋没谷-第5層内出土	弥生時代後期土器実測図-1	45
1			
第40図	埋没谷-第5層内出土	弥生時代後期土器実測図-3	47
第41図	埋没谷-第4層内出土	弥生時代後期土器実測図	49
第42図	埋没谷-第3層内出土	弥生時代中期土器実測図-1	51
第43図	埋没谷-第3層内出土	弥生時代中期土器実測図-2	52
第44図	埋没谷-第3層内出土	弥生時代後期土器実測図-1	53
第45図	埋没谷-第3層内出土	弥生時代後期土器実測図-2	54
第46図	埋没谷-第2層内出土	弥生時代後期土器実測図	55
第47図	埋没谷-第2層内出土	弥生時代後期土器実測図	56
第48図	埋没谷-第1層内出土	弥生時代中期土器実測図	58
第49図	埋没谷-第1層内出土	弥生時代後期土器実測図	59
第50図	埋没谷-上層内出土	弥生時代中期土器実測図-1	60
1			
第52図	埋没谷-上層内出土	弥生時代中期土器実測図-3	62
第53図	埋没谷-上層内出土	弥生時代後期土器実測図-1	63
第54図	埋没谷-上層内出土	弥生時代後期土器実測図-2	64
第55図	弥生時代磨製石器実測図		66
第56図	弥生時代打製石器実測図-1		67
第57図	弥生時代打製石器実測図-2		69
第58図	弥生時代打製石器実測図-3		70
第59図	弥生時代打製石器実測図-4		71
第60図	弥生時代土製鋤車・円板、砥石実測図		75
第61図	室町時代の遺構平面図-1（溝1・2井戸・土坑2）と溝2の（南北）断面図		77
第62図	室町時代の遺構平面図-2（土坑1、ピット群）		78
第63図	室町時代～近世の遺構平面図-3（杭列・落ち込み・柱穴）		78
第64図	溝1内出土中世土器実測図		80
第65図	溝2内出土古墳時代～中世土器実測図		81
第66図	埋没谷内出土古墳時代～中世土器実測図		83
第67図	埋没谷内出土古墳時代～奈良時代土器実測図-1		84
第68図	埋没谷内出土古墳時代～奈良時代土器実測図-2		85
第69図	落ち込み第1層内出土上中世土器		87
第70図	落ち込み第2・3・疊層内出土上中世土器実測図		88
第71図	土坑2内出土中世土器実測		89
第72図	包含層内出土古墳時代土器実測図-1		90
第73図	包含層内出土古墳時代土器実測図-2		91
第74図	錢貨・土鍤実測図		91
第75図	埋没谷-第2層内出土 増塙の分析部位		95

表目次

表1 大和型壺と河内型壺の調整と形態	38
表2 埋没谷(溝3)内出土石器一覧表-1	72
埋没谷(溝3)内出土石器一覧表-2	73
表3 埋没谷(溝3)内出土土製品一覧表	74
表4 埋没谷(溝3)内出土種子一覧表	92
表5 埋没谷(溝3)内出土動物遺体-1	93
表6 各遺構内出土動物遺体-2	93
表7 埋没谷(溝3)・井戸3内出土動物遺体-3	94
表8 「培塿」の螢光X線による定性分析結果	95

図版目次

図版1) 右 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期の彩色土器：第3層内-713～715、第1層内-821、上層内-910、 左 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期：第2層内「培塿」790	
図版2) 1. 調査終了面(南から)	2. 調査地北側断面
図版3) 1. 埋没谷(溝3)完掘状況(北から)	2. 埋没谷(溝3)断面(北から)
図版4) 1. 埋没谷(溝3)内の後期土器出土状況 2. 埋没谷(溝3)内底部の木器出土状況	
図版5) 1. 埋没谷(溝3)内の弥生後期の土器出土状況	2. 埋没谷(溝3)の発掘調査風景
図版6) 1. 溝2と井戸3検出状況(東から)	2. 溝2と杭の検出状況(北から)
図版7) 1. 井堰用の材木、杭検出状況	2. 井戸と杭の検出状況
図版8) 1. 遺構実測風景(南から)	2. 錫倉～室町時代の土器出土状況
図版9) 1. 室町時代の土師皿出土状況	2. ウマの歯の出土状況
図版10) 1. 室町時代の柱穴・落ち込み検出状況(西南から)、 2. 室町時代の土坑1・柱穴・落ち込み検出状況(西南から)	
図版11) 埋没谷(溝3)内出土 繩文時代晚期土偶1・石ヒ2	
図版12) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代前期土器：(上段)、弥生時代中期土器：第9層内 45・47第7層内-132	
図版13) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器：第7層内-160・161・182	
図版14) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器：第6(炭層)層内-219・221～223・226・227	
図版15) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器：第6(炭層)層内-230・231・233・234	
図版16) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器：第6(炭層)層内-232・235・240・244・245	
図版17) 1. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器：第6(炭層)層内-(鉢・脚部) 2. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器：第6(炭層)層内(甕)	
図版18) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器：第6(炭層)層内-253・254・256・261	
図版19) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器：第6(炭層)層内-258・259・263・269	
図版20) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器：第6(炭層)層内-243・249～251・262、第5層内-645	
図版21) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器：第6層内-316・347・377・382・385・529・538	

- 図版22) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器：第11層内-22、第7層内-391、第6層内-393・394、第5層内-596、第3層内-677・702、第1層内-795、高熱により変形した土器-右上から2段目の土器
- 図版23) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期の各種の土器文様片
- 図版24) 1. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期の外面がヘラ削り調整されている土器
2. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期の外面が剥離している土器
- 図版25) 1. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器：第6層内-壺
2. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期の各層内-紀州系壺
- 図版26) 1. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期：直口壺口縁部 第11層内10、第4層内658、第3層内679
2. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期：各層内(土器)、第6層内-463
- 図版27) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：第7層内-159・201・212、第6層内-493・527・537
- 図版28) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：第6層内-551・569・570・573・574
- 図版29) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：第6層内-521・、第5層内-600・601・604～606・654
- 図版30) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：第5層内-602・611・615・616・617・620
- 図版31) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：第5層内-607・626・629・630・631・636
- 図版32) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：第5層内-644・647～649・652
- 図版33) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：第5層内-603、第4層内-657・659～661
- 図版34) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：第5層内-601、第4層内-656・665～667・669、第3層内-720
- 図版35) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：第3層内-726・739・756・758、第2層内-768・773
- 図版36) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：第1層内-798・818・823～825、上層内-921
- 図版37) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：第2層内-784～786・788、上層内875
- 図版38) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：上層内-873・874・908・915・922・923
- 図版39) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：上層内-904・905・907・925
- 図版40) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：上層内-870・877・924・928・930・934
- 図版41) 1. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中～後期土器：各層内(底部裏面)
2. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期の木葉痕をもつ土器 第3層内-711
- 図版42) 1. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代の炭化物
2. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期の炭化物が付着した土器
- 図版43) 1. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代の打製石器(表面)947～954・957～959
2. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代の打製石器(裏面)947'～954'・957'～959'
- 図版44) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代の磨製石器(表面)938～946、弥生時代中期紡錘車(表面)：第6層内-992、第3層内-993
- 図版45) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代の磨製石器(裏面)938'～946'、弥生時代中期紡錘車(裏面)：第6層内-992'、第3層内993'
- 図版46) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代の打製石器(表面)955・956・960～963・967・968・972・975～978・981
- 図版47) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代の打製石器(裏面)955'・956'・960'～963'・967'・968'・972'・975'～978'・981'
- 図版48) 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代の打製石器(表面)964～966・969～971・973・974・979・980・

- 図版49) 墓没谷(溝3)内出土 弥生時代の打製石器(裏面)964'~966'・969'~971'・973'・974'・979'・980'・982'~984'
- 図版50) 1. 中世遺構内出土 弥生時代の打製石器(表面)985~989
2. 中世遺構内出土 弥生時代の打製石器(裏面)985'~989'
- 図版51) 1. 墓没谷(溝3)内出土 弥生時代の土製円板(表面)996~1001
2. 墓没谷(溝3)内出土 弥生時代の土製円板(裏面)996'~1001'
- 図版52) 1. 墓没谷(溝3)内出土 弥生時代の「埴塙」 第3層内-790
2. 墓没谷(溝3)内出土 弥生時代の砥石 第5層内-990、第3層内-991
- 図版53) 墓没谷(溝3)・包含層内出土 古墳時代以降の土器類: 1188・1189、須恵器: 1076・1083・1092・1173・1181・1183
- 図版54) 各遺構、包含層内出土 古墳時代以降須恵器: 溝2内-1041、落ち込み内・1132、包含層内-1170・1187、土師器・墓没谷(溝3)内-1052・1084
- 図版55) 各遺構、包含層内出土 中世遺物 土陶器: 落ち込み内-1038・1144、溝1内-1003・1010、溝2内-1122、墓没谷(溝3)内-1069、瓦器: 土坑2内-1155、硯: 墓没谷(溝3)内-1197、土鍾: 第5層内-1195・1196 銭貨: 第5層内-1194、第3層内-1193
- 図版56) 1. 各溝内出土 中世瓦器: 溝1内-1018~1021、溝2内-1042~1045
2. 各溝内出土 中世瓦器: 溝2内-1145~1148、墓没谷(溝3)内-1150・1152
- 図版57) 1. 落ち込み内出土 中世瓦器: 1126~1128
2. 包含層内出土 中世磁器: 落ち込み内-1136
- 図版58) 1. 墓没谷(溝3)内出土種子 第5層内-S11~15、第6(炭層)層内-S21、第7層内-S22、第8層内-S23、第9層内-S24、第10層内-S25、第11層内-S26・27
2. 墓没谷(溝3)内出土種子 上層内-S1、第3層内-S2~6、第4層内-S7~10
- 図版59) 墓没谷(溝3)内出土 第6層内-S16~20
- 図版60) 1. 墓没谷(溝3)内出土動物遺体シカ: 第9層内-B1~4、第6層内-B5、貝: 第9層内-B11、テン: 第6層内-B16、焼痕をもつ不明遺体-B20~23、その他の不明遺体B12・17~19・24・25
2. 墓没谷(溝3)内出土動物遺体イノシシ: 第9層内-B-6、第8層内-B7~9、第7層内-B10、第6層内-B13
- 図版61) 1. 墓没谷(溝3)内出土動物遺体イノシシ: 第7層内-B26
2. 各遺構・包含層内出土動物遺体ウシ: 溝2内-B-101・102、墓没谷(溝3)第1層内-B103~105、第3層内-B-106、第5層内-B-107、排水溝内-108
- 図版62) 1. 井戸3内出土動物遺体ウマ: B301~308
2. 各遺構内出土動物遺体ウマ: 溝1内-B201~204、溝2内-B205・206、墓没谷(溝3)第1層内-B207~209、第5層内-B210・211、第3層内-B212、疊層内-B213・214

I 調査と調査報告にいたる経過

西ノ辻遺跡の発掘調査は2000年3月現在、41次を数える。1941年に現在の近鉄バス枚岡営業所の地点で土器が散布しているのが発見されてから¹、1970年代に下水官渠築造工事に伴う調査が3件、住宅建設に伴う調査が1件行われた。今回報告するのは第5次にあたる。

1981年に東大阪市東山町63~65において、㈱百光社の貸ビル建設工事が計画され、当協会の前身である東大阪市保護遺跡調査会が受託し発掘調査が行われた。調査面積は270m²である。その結果、縄文時代晩期から古墳時代後期の埋没谷と室町時代の井戸、土坑、柱穴、溝が検出された。埋没谷内からは、特に弥生時代中期から後期の遺物が多量に出土した。

1882年に当協会が設立され、遺物整理の作業などをそのまま引き継ぐことになった。その後、発掘担当者の異動などのため報告書作成は中断してしまったが、18年を経てようやく出土遺物の資料紹介を中心とした概要報告書の出版の運びとなった。

なお、第5次発掘調査の後には1982~1993年にかけて、第5次調査地の北側にあたる近鉄東大阪線の建設^{*}、さらに第2阪奈有料道路建設^{**}に伴う西ノ辻遺跡、東側の神並遺跡、西側の鬼虎川遺跡・水走遺跡などの大規模な発掘調査が大阪府教育委員会・当協会により行われた³。その結果、西ノ辻遺跡が縄文時代から室町時代までつづく大複合遺跡であることが明らかになつた。これらの成果は各次毎に随時、報告書が刊行されてきている。今回の報告書がこれらの成果の一端として役に立てば幸いである。

* 近鉄東大阪線建設に伴う西ノ辻遺跡発掘調査

1982~4年 財団法人東大阪市文化財協会；第6~10・16・17・21~23次-12,944.7m²

1983~4年 大阪府教育委員会；第11~15・18~20次-6,435m²

** 第2阪奈道路建設に伴う西ノ辻遺跡発掘調査

1988~93年 財団法人東大阪市文化財協会；第27~32・33・35次-1,507m²

II 西ノ辻遺跡の位置と環境

西ノ辻遺跡は東大阪市西石切町1・3丁目、東山町、弥生町、宝町、南莊町にかけて位置する。西ノ辻遺跡は生駒山地の西麓の低位段丘上の西端部にあり、標高約10~20mに立地する³。北側に植付遺跡、北西側に神並遺跡、西側に鬼虎川遺跡、南側に鬼塚遺跡が隣接し、周辺には縄文時代から室町時代の遺跡が数多くみられる。次におもな遺跡名をあげてみる。

縄文時代 早期の神並遺跡があり、前期の鬼虎川遺跡では縄文海進時の海食崖が発見されて段丘の地形の形成が明らかになった。山麓には後期~晩期の日下遺跡・芝ヶ丘遺跡・善根寺遺跡(中期~)、中期~晩期の鬼塚遺跡、中期~後期の縄手遺跡-南東2.5km、後期末~晩期の馬場川遺跡-南東3.5kmなどがある。

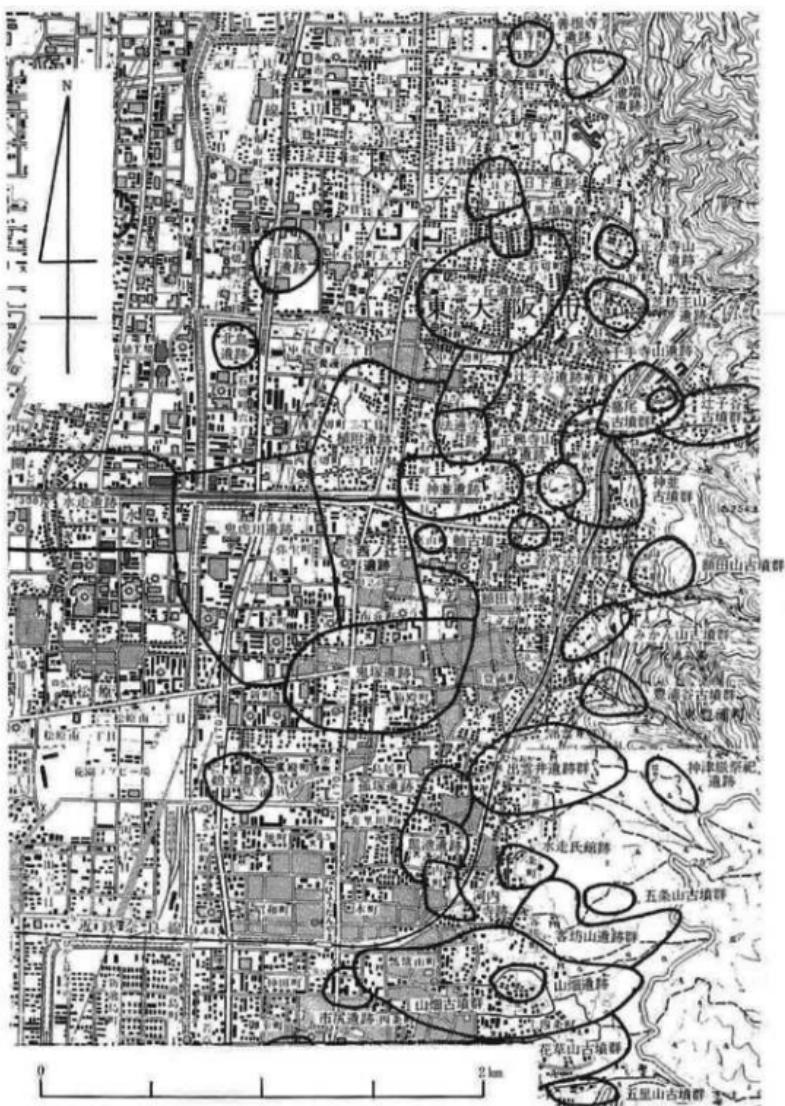
弥生時代 前期~後期の西ノ辻遺跡・鬼塚遺跡、前期~中期の鬼虎川・水走遺跡・植付遺跡、中~後期の神並遺跡・皿池遺跡、中期末の山畠遺跡、後期の馬場川遺跡・上六万寺遺跡-南東2.5km、岩滝山遺跡-南東3.5kmなどがある。

古墳時代 神並遺跡・鬼虎川遺跡・植付遺跡・鬼塚遺跡・芝ヶ丘遺跡などから集落跡が検出されており、中期のえのき塚古墳(前期~)、塚山古墳・段上遺跡-南2.5km、後期の山畠古墳群・五里山古墳群・花草山古墳群・芝山古墳・坊主山古墳・神並古墳群・五条古墳・イノラムキ古墳・墓尾古墳群がある。

歴史時代 飛鳥~奈良時代の石凝寺・法通寺・河内寺、奈良時代の集落跡がみられる神並遺跡・鬼塚遺跡・船山遺跡があり、水走遺跡からは祭祀用の遺物、西ノ辻遺跡からは小型海獸籠

菊鏡が出土している。

平安～室町時代の集落跡が西ノ辻遺跡をはじめ神並遺跡・鬼塚遺跡・水走遺跡・上六万寺遺跡などから検出されている。

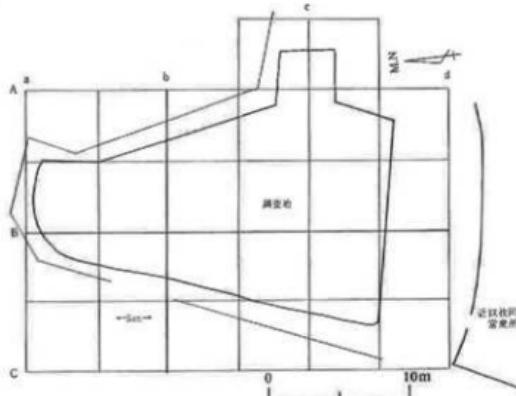
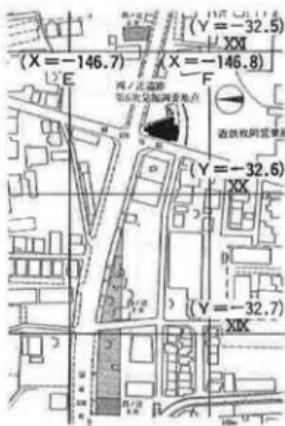


第1図 西ノ辻遺跡と周辺の遺跡分布図

III 調査の概要

1. 調査地の基準ライン

調査地は旧170号線と308号線が交差する南東側にあたり、現在の地表面の標高がT.P.約13mである。調査地の中心に基準ラインを南北(Bライン)・東西(bライン)に設定し、このラインを基準にして調査を実施した。



第2図 西ノ辻遺跡第5次(6~8次)*調査地と基準ライン設定図

2. 層序

調査地には70~100cmの盛土層が認められた。基本層序は第①~⑤層がみられる。調査地の北側の第③・④層にあたる箇所には中~近世の落ち込みがある。第⑤層の下部に溝1・2の砂礫層・埋没谷(溝3=後の調査で谷4と呼称⁶⁾)の上層に砂礫層・シルト層が堆積している。

層序

盛土層

第①層 耕土 黒褐色(2.5Y4/1)砂質シルト極細粒砂に細礫混じる。

第②-1層 黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト中~極粗粒砂が多く含む。細礫少量

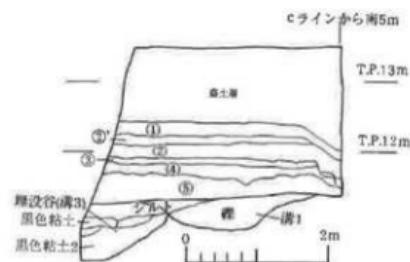
第②-2層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト
中~極粗粒砂を多く含む。細~
中礫少量

第③層 オリーブ黒色(5Y 3/1)砂質シ
ルト極細粒砂混じる。

第④層 オリーブ黒色(5Y 3/1)砂質シ
ルト細粒砂に細礫混じる。

第⑤層 オリーブ黒色(7.5Y 3/1)シル
ト質粘土細~中礫混じり

下層 室町時代の溝1・溝2
弥生~古墳時代の埋没谷(溝3)



第3図 東壁断面図

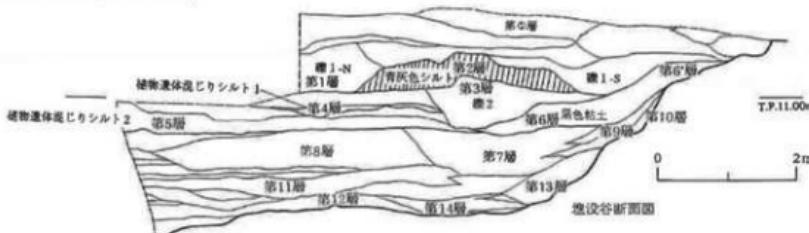
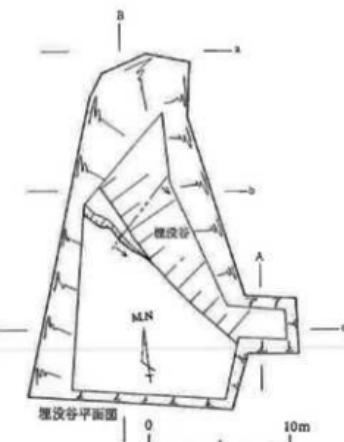
3. 越文時代～弥生時代

3.1) 遺構

3.1.1) 埋没谷(灘3)

南東から北西に流下する縄文時代晚期に形成された埋没谷を検出した。埋没谷は、左岸の一部が検出され、幅8m以上、深さが3.8m以上の規模となる。一部に黒色粘土が岸側から投棄されたような状態で層部分に認められる。

最下層では加工痕のある丸太材が出土したが、時期は不明である。中層以上では、黒色粘土層内から弥生時代中期の遺物、上層のシルト・砂礫層内から弥生時代後期の遺物が多量に出土し、最上層内から古墳時代後期～中世の土器が出土した。(古墳時代以降の出土遺物は次の節に掲載している。)弥生時代中期の遺物を多量に含む黒色粘土は、もとは周辺に堆積していたと考えられるが、遺構とともに室町時代に削平されたため、検出することはできなかった。



第4図 捨沿管(溝3)平面図・断面図

- | | |
|------|---|
| 第1層 | <埋1-N>褐色土 (10Y R 4/1) 粗粒砂、細纖維多量 6~7cmの埴造器・土器器を含む。下部では弥生後期の土器多量
<埋2-N>褐色土 (10Y R 4/1) 植物根跡、纖維-中埋多量 6~7cmの埴造器・土器器を含む。下部では弥生後期の土器多量 |
| 第2層 | <青灰色シルト>暗緑色土 (10G Y 4/1) 植物根跡、シルト、植物遺体ウミナリ有り 上部から弥生後期土器多量 |
| 第3層 | <埋2>暗緑色土 (10G 3/1) 植粗粒砂。纖維-中埋多量 |
| 第4層 | <植物遺体混じりシルト1>暗緑色土 (5G 4/1) シルト、黒褐色 (10Y R 3/2) 植物遺体、植粗粒砂少量、灰片多量。上面で自然石。木製品。弥生後期土器一括 |
| 第5層 | <植物遺体混じりシルト2>黒褐色土 (10Y R 3/1) 黏土質シルト、木片多量、弥生後期土器多量 |
| 第6層 | <黒色粘土>黒色 (N 2/0) シルト混じり粘土、粗-中埋粗粒砂多量、細埋少量、弥生中期土器多量 |
| 第6層* | <黒色粘土>炭化土 塵片多量、弥生中期土器一括 |
| 第7層 | <埋3>暗緑色土 (5G Y 4/1) 植粗粒砂。細纖維-中埋多量、植粗粒砂のブロック混入 |
| 第8層 | <埋4>暗緑色土 (10G 4/1) 植物根跡混じり植粗粒砂 |
| 第9層 | <黑色粘土2>黒色 (7.5Y 2/1) 粘土に青灰色シルトのブロック混じり |
| 第10層 | <青灰色シルト2> |
| 第11層 | <埋5>暗青色土 (10B G 3/1) 細纖維混じり粗粒砂 |
| 第12層 | <植物遺体4>黒褐色土 (10Y R 3/2) 植物遺体混じりシルト |
| 第13層 | <暗緑色土 (10G Y 4/1) 粗-中埋粗粒砂混じり粘土 |
| 第14層 | <埋6>青灰色土 (5B G 5/1) 植粗粒砂-繊維 |

3.2) 遺物

第5次発掘調査で検出した埋没谷(溝3)内から縄文時代～中世の遺物が出土している。遺物には土器、土製品、炭化物、石器、獸骨、種子などがみられた。なかでも弥生時代中期から後期の遺物の出土量が多い。古墳時代以降の遺物は次の4.2)に、自然遺物は5.1～3)の項に記している。

3.2.1) 土器

縄文時代の遺物

縄文時代の遺物の出土量は少ない。縄文時代晩期の土器が埋没谷(溝3)内の第6層内から数点と土偶、石ヒが出土している。土器は帯文が施されたもので胎土には角閃石が含まれている。また同じ時期のものと考えられる土偶は座位の形に造られ頭部と片方の腕が欠けている。胸部の中心には胸線が、その両側に乳房がつけられ上体部はやや後ろに反り返らせており、下部は前後左右に拡がり台状を呈している。胸と胸部の間にはヘラ状工具で削りとられたような円孔が認められる。胎土には粗い角閃石が含まれる。現存の高さは5.1cmである。類例には市内の宮ノ下遺跡から縄文晩期の土器と共に伴したもの⁵⁾や、大阪市長原遺跡出土のもの⁶⁾があげられる。石ヒは背面の身部、腹面の全面に大剥離面が残され、背部の刃部は細部調整で仕上げられている。長軸の長さは2.8cm、幅は5.2cm、厚みは0.8cmを測る。石材はホルンフェルスである。

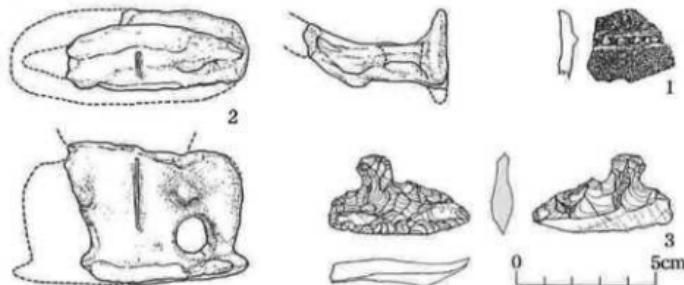


図5 縄文時代晩期土器・土偶・石ヒ実測図

弥生時代の遺物

土器は前期の土器数点と中期から後期の時期に属する土器(コンテナに約120箱分)が出土した。ほとんど埋没谷(溝3)内から出土している。遺物の整理は『弥生式土器集成』⁷⁾にもとづいておこなった。また土器の胎土の観察には芋本隆裕・奥田尚氏の識別法を参考にした¹⁰⁾。

前期(図版12)

土器はいずれも小片である。壺は口縁部にヘラ刻目文をもつもの、文様のないもの、頸部に沈線文をもつもの、体部に爪圧痕文と刺突文が施されたものがある。他には甕の体部に沈線文をもつものがみられる。これらの土器の胎土は生駒西龍産といわれる(a)類に、(c)類が混じる。

中期～後期

土器は中期初頭から後期前半の時期のものまで出土している。埋没谷(溝3)内から出土した遺物は多く、各層位毎の出土状況は次頁のとおりである。「<」「>」は出土量の多少を表している。第6*(炭)・8・9・10・11層内からは中期の土器が出土している。第6*(炭)層内から出土した土器は完形に復原できるものが多く、一括性が高いことを窺わせる資料である。

第8～11層内出土の土器は破片が多い。第6層より上層内には後期の土器が多量に入ってくる。第4層内から出土した土器は後期の一時期の一括性の高い資料である。

埋没谷 第11層内（植物遺体粘土）	弥生時代中期前半～中頃
第10層内（青灰シルト）	弥生時代中期前半～中頃
第9層内（黒色粘土2）	弥生時代中期前半～中頃
第8層内（礫4）	弥生時代中期中頃
第7層内（礫3）	弥生時代中期中頃～後半>弥生時代後期
第6*層内（炭）	弥生時代中期後半のみ
第6層内（黒色粘土）	弥生時代中期後半>弥生時代後期
第5層内（シルト2）	弥生時代中期<弥生時代後期
第4層内（植物遺体シルト）	弥生時代後期
第3層内（礫2）	弥生時代後期
第2層内（青灰色シルト）	弥生時代中期末<弥生時代後期
第1層内（礫1）	弥生時代中期<弥生時代後期

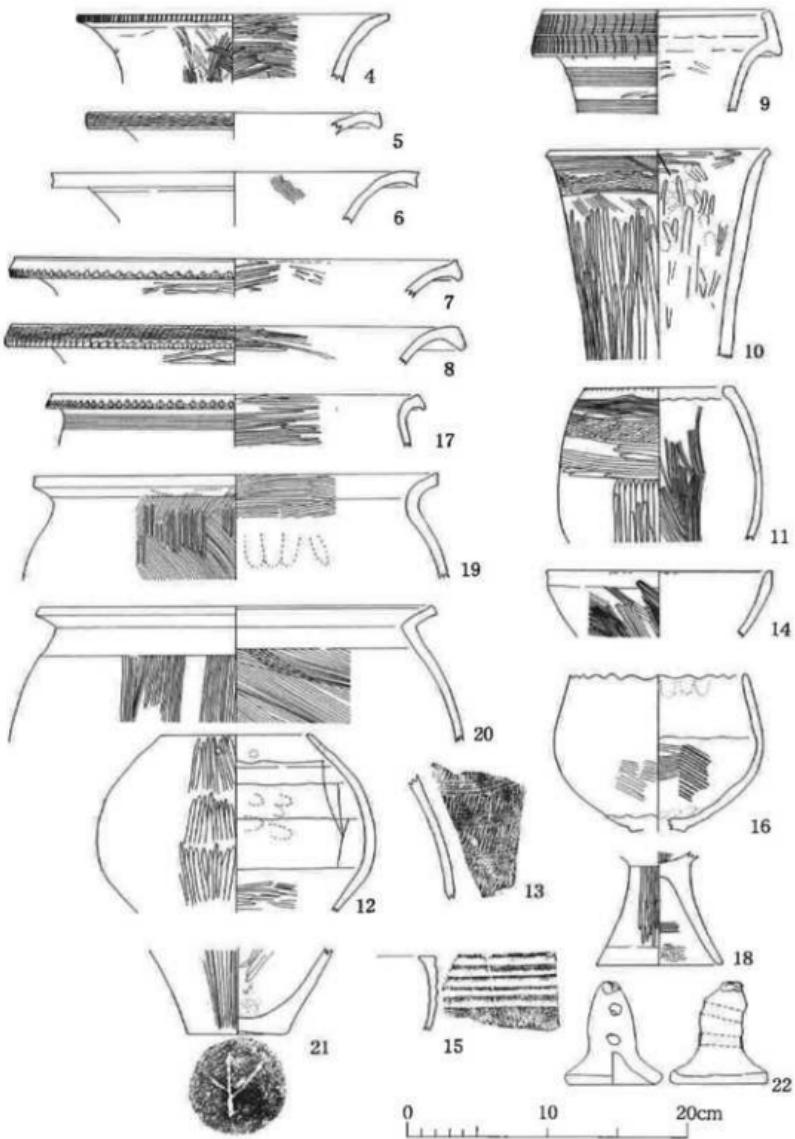
埋没谷内出土土器

第11層内出土土器(4～22)：中期土器

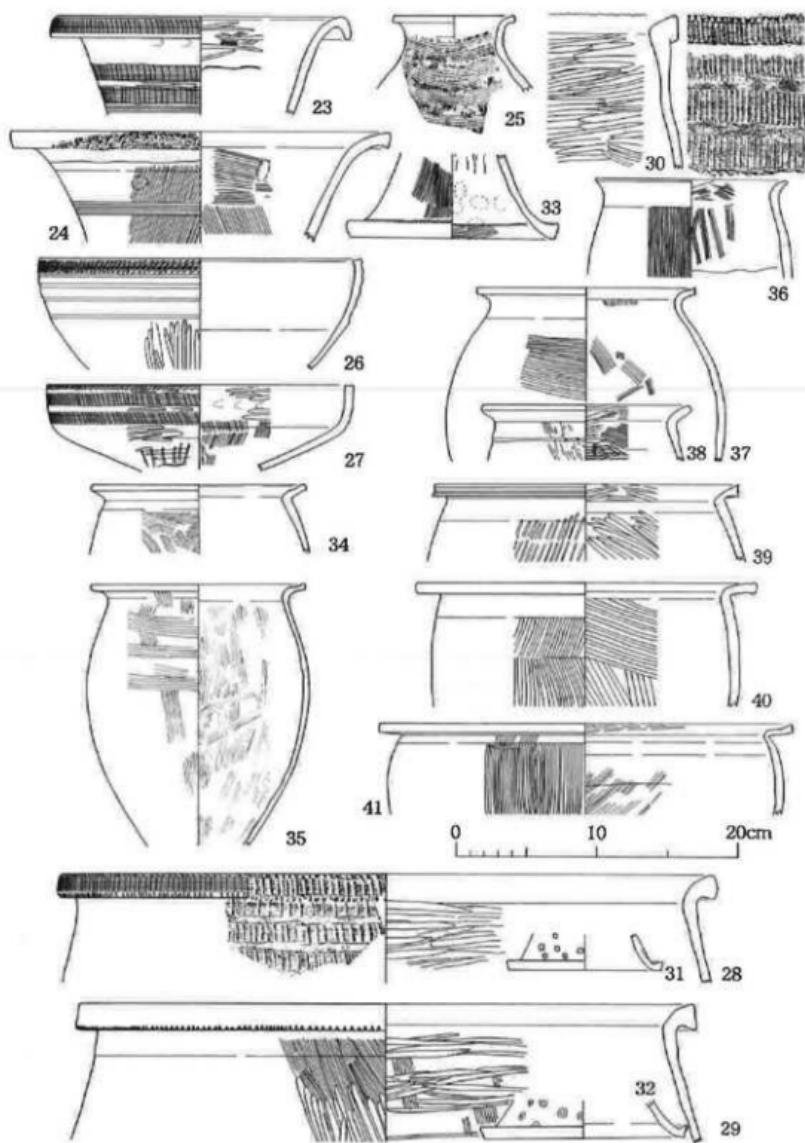
壺Aには口縁部が開いてそのまま丸みを帯びた端部に造られている4と、上・下方に肥厚させている5～8がある。口縁部の文様は、7には刻み目文、8には横搔き波状文と刻み目文がみられる。受け口壺9は壺Aの口縁部の上部に粘土を継ぎ足して造られ、端面には簾状文、頸部には直線文が施されている。直口壺10は長い頸部から口縁部が少し開くもので、直線文と波状文がみられる。器壁がやや厚い。細頸壺B11は内湾している口頸部にやや稚拙な直線文と波状文が施されている。無頸壺A12は球形に近い体部に口縁部が尖り気味に納められている。全面に3段の縱方向のヘラ磨き調整がみられる。鉢Aには文様がみられず、ヘラ磨きで仕上げられている14、多条の凹線文がみられる鉢15がある。鉢16の口縁端部は擬口縁状を呈している。脚部が付くものと考えられる。鉢B17は口縁部にヘラ刻み目文、体部に直線文が施されている。脚部18は「ハ」の字形に開き、端部は丸く造られている。甕には体部内外面と口縁部内面に横方向の粗いハケ目調整が施された大和型の甕Bが多くみられる。甕19～20は口径が28cm内外の中型の大きさのものである。甕19はくびれ部の内面に、短い立ち上がり部が造られている。ミニチュアの脚部の形をした22は中実の柱状部から裾部がそのまま抜がり、柱状部に2個の貫通孔がみられる。柱状部の上端部にはヘラで切り目が入れられており、珍しいものである。祭祀具の可能性が考えられる。

第10層内出土土器(23～41)：中期土器

土器の出土量は少ない。壺Aには口縁部が開いてから、端部に面が造られている24と、端部が下方に拡張して丸みをもつ23がある。壺C25は頸部から体部にかけて直線文が施されている。直口の鉢26は口縁部に列点文、その下に凹線文が施されている。鉢27は腰部に稜をもち、口縁部に扇形文、体部に幅が1cm弱の施文具で簾状文が施されている。大型の鉢28の口縁端部は大型の甕29などと同じ形に造られており断面三角形を呈している。壺・鉢に使われている文様の施文具の幅は1cm内外である。鉢B30には他の土器のものより長い施文具で幅の狭い簾状文が施されている。甕には口径が20cm内外の小型品、28cm以上の中型品、40cm以上の大型の大きさのものがみられる。これらの甕は口縁部内面の屈曲部の形の違いで3形態



第6図 第11層内出土 猿生時代中期土器実測図

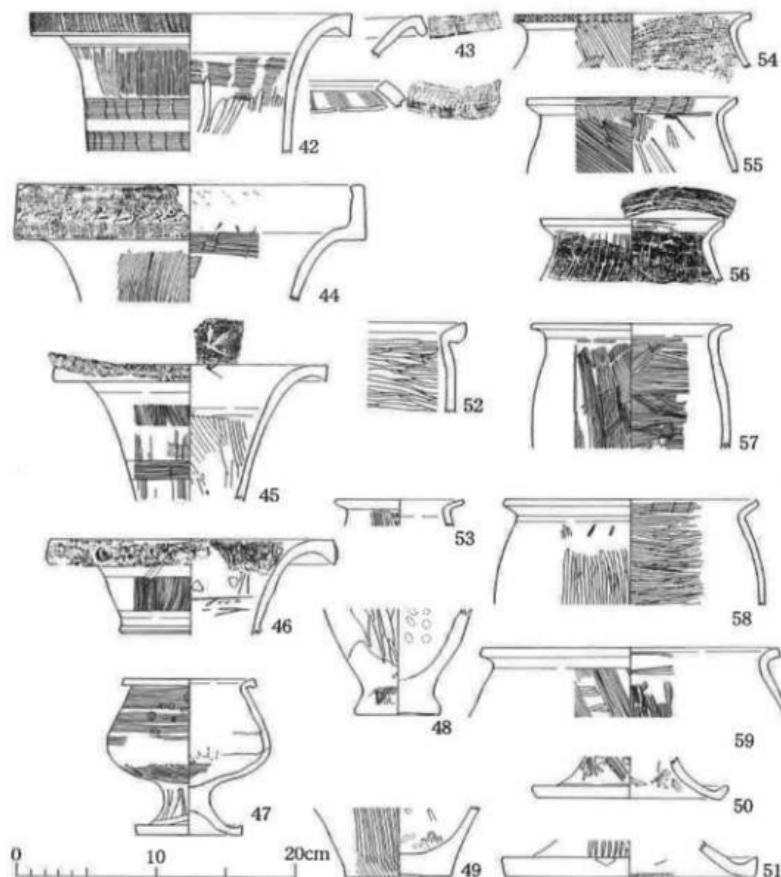


第7図 第10層内出土 弥生時代中期土器実測図

に分けられ、口縁部がゆるやかに外反する34~38、内面に稜をもつ39・29、口縁部が水平に外反する40・41がある。調整はハケ目が施されたものが多くみられる。甕34・35・37の外面には横方向のハケ目調整、29の体部には内外面にハケ目と磨きの調整がみられる。脚部のみが残存する31・32には竹管文、33には裾上端部に刻み目文がみられる。鉢27・28・30、甕29の口縁端部と脚部33の裾端部には細かい刻み目文が施されている。

第9層内出土土器(42~59)：中期土器

土器の出土量は少ない。完形品の台付無頸壺47以外は破片である。壺A42は口頸部のみが残存しているもので口縁端部が尖っており、端面には列点文風の簾状文、頸部にはハケ目の



第8図 第9層内出土 弥生時代中期土器実測図

上に横幅の1単位の広い簾状文が施されている。壺A43の口縁端部は丸く納められている。受口壺44は「和泉型」とよばれているもの。壺A45は口縁内面に焼成後に「矢」印型の記号文がつけられている。壺A46は口縁部が水平に外反し、端部が下方に垂下している。口縁端面にはとびとびの波状文が施され、その上にやや大型の円形浮文、頸部には断面三角形の突帯がそれぞれ貼り付けられている。台付無頸壺47は「ハ」の字形に拡がる低い脚部の上に、丸みを持たせた腰部をもつ体部に短く外反している口縁部が造られている。壺は10層内出土の土器でみられたように口縁部が緩やかに外反しているものが多く、内外面ともにハケ目調整が施されている大和型に属する壺B54~57・59と、外面はヘラ磨きで仕上げられている河内型に属する壺A58がみられる。壺54には口縁端面に刻み目文が施されている。その他に器壁の厚い底部48、外面にヘラ磨きが施された底部49、脚裾部50・51がある。

第8層内出土土器(60~113)：中期土器

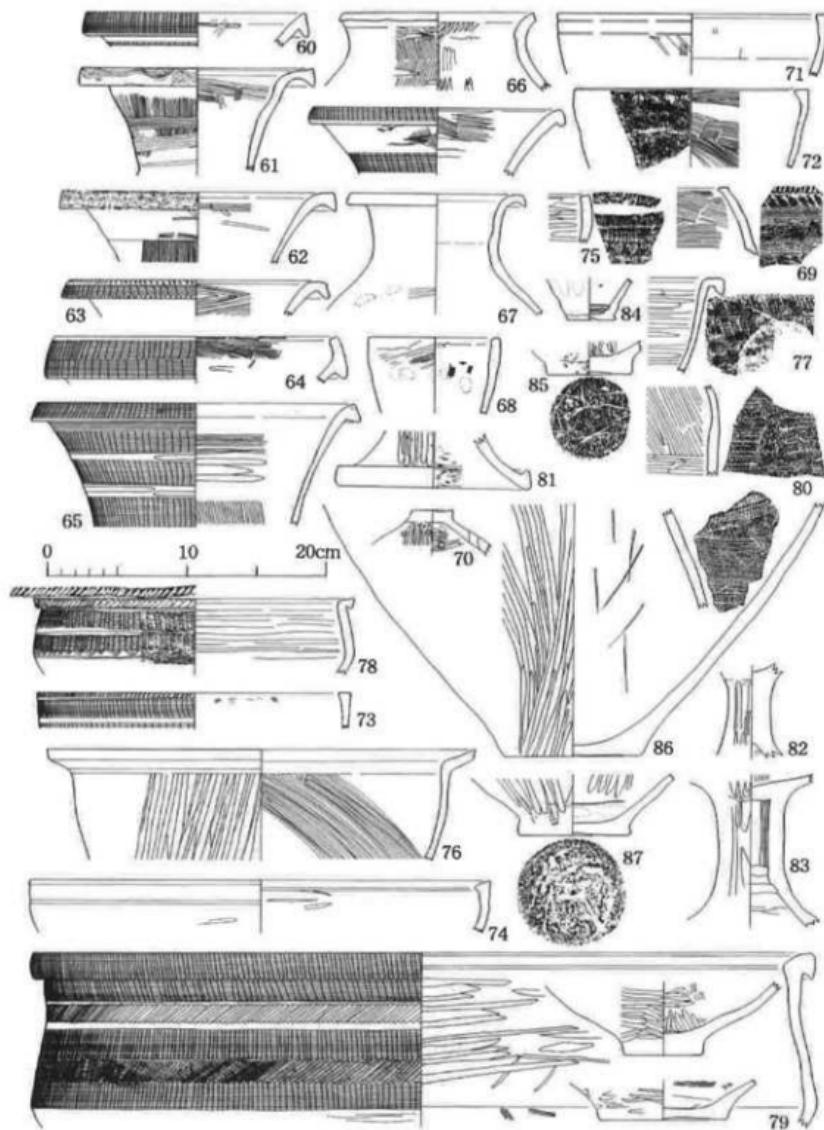
中南河内地方に多くみられる壺A60・63・65の口頸部は、8層内出土の壺A42の頸部が直立気味に立ち上がっているのに対し、頸部から口縁部までが漏斗状に開いている。壺Aの口縁端部の形態にはばらつきがみられる。壺A61・62は口縁端部の上部がわずかに肥厚している。施文には簾状文が多くみられる。壺C66の口頸部は短く外反している。壺D67の胎土はc類のものである。壺胴部80は縱位の流水文が施されている。ほかに直口の無頸壺A69、紐孔が穿たれている壺蓋B70がある。鉢Aのなかでは櫛描き文を中心とした文様が施されている73・75と、浅い溝の凹線文がみられる71・74、文様が施されていない68・72がある。鉢B77~79の口縁端部は断面三角形を呈しており、体部に櫛描き文が施されている。口縁部が短く外反している鉢C76・106は体部外面に幅広のヘラ磨き調整がみられる。脚部Aの柱状部82は中期のなかでも古い属性である中実に、83は中空にそれぞれ造られている。裾部81は厚手に造られている。底部87には植物性纖維の圧痕が見られる。8層内の土器の櫛描き文は特に簾状文に顕著にみられるが、9~11層内の土器の文様に比べると施文具幅の長いものが使われており最長は2.2cm、横方向の1単位の幅は狭ましいものがみられる。壺A63・69・73・106の口縁端部には細かい刻み目文が、78には口縁端面に刻み目文が施されている。壺は形態的には10層内のものと変わらないが、89・91~94・96・99・101・105などのように外面はヘラ磨きで調整されたものが多くみられる。95・101・103の口縁端面には刻み目文が施されている。

第7層内出土土器(114~196)：中期土器

この層内からは中期全般~後期までの時期の遺物が出土している。

- 壺Aは口頸部が残存しているもので、口縁部のつくりが次のように少しずつ異なるⁱⁱ。
- A₁ = 口縁端部はそのまま納められているもの-118、
 - A₁₋₁ = 口縁端部が下方斜めに折り曲げられたように造られているもの-116・122
 - A₁₋₂ = 口縁部の端部は真下を向くように外側に粘土が貼り付けられており、断面は矩形のものや、いびつなもの-119~121
 - A₂ = 口縁端部が上方につまみ上げられているものや、下方に肥厚させているもの115・117・123

壺A'124は頸部が長くのびるものと考えられる。口縁部は斜め下方に折り曲げられた壺A₁₋₁の122と同じ形態である。115~117・122には口縁部に波状文、刻み目文、波状文+刻み目文、頸部に直線文、波状文がそれぞれみられ、119~122・124には口縁部に簾状文、簾状文+刻み目文と頸部に簾状文が施されている。120・124の口縁部内面には円形浮文がみられ



第9図 第8層内出土 猿生時代中期土器実測図-1



第10図 第8層内出土 猿生時代中期土器実測図-2

る。ほかに壺胴部片136・137がある。壺B133・134は壺A₂の形態を小型に造られたものである。受け口壺の口縁部には次の2形態がみられる。

壺A₆の口縁部を土台に、上部が受け口状に造られているもの-125・126・128・129・130、壺A₁₃の口縁部を土台に、上部が受け口状に造られているもの-131。

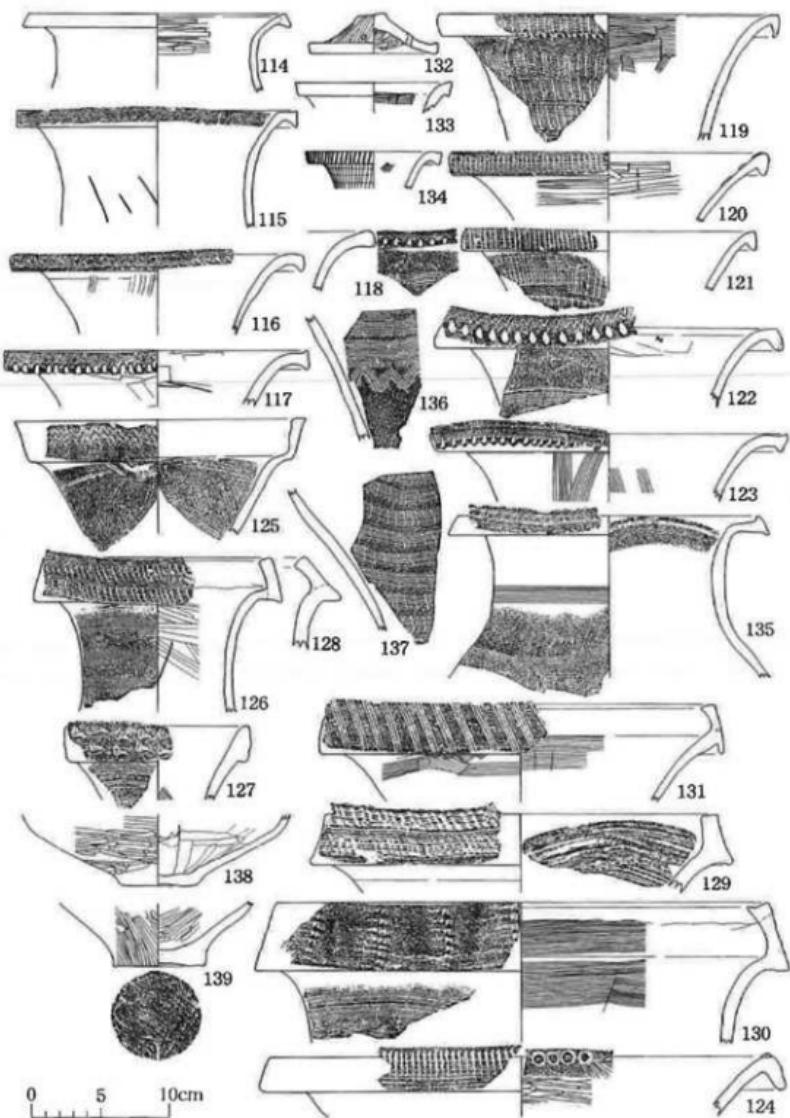
前者の壺口縁部には文様がないものと、波状文・簾状文・扇形文が組み合わされているものの、頸部に波状文がみられるものがある。後者の壺B131の口縁部には半截竹管の施文具で斜線文が施されている。127は壺B133の口縁部の上方が伸ばされ受け口状に造られたものである。口縁部には扇形文、頸部に直線文がみられる。壺C135は口縁端部が水平に長く伸ばされた内面に波状文がみられる。壺D114の口縁部内外面には煤が付着している。細頸壺140は頸部から口縁部まで直口型のものである。細頸壺B141・142は長い頸部に口縁部が内湾して造られている。140～142は口頸部全面に簾状文や列点文、円形浮文が施されている。無頸壺A144は口縁部に刻み目文、体部に直線文と簾状文がみられる。短頸壺143は頸部と胸部の境界に深い溝の刻み目文がみられる。鉢Aには口縁端部が内方に肥厚している149・150、そのままかわざかに内外に肥厚して終わっている145～148・154などがある。鉢A149には把手の跡がみられる。鉢Bには胴部の張り出し方と口縁端部の形が違うものがみられる。鉢163・164は体部の中央部が丸く造られている。鉢167は体部の下部が丸く造られ、緩やかに屈曲して底部に続いている。鉢162の体部はほぼ真っ直ぐに内傾して立ちあがり、体部と底部の境界部に鋭い稜が造られている。鉢163の口縁部は小さく外湾しながら下方に垂下させている。鉢166は口縁部を真下に折り曲げて、断面が三角形に造られている。162・168～173の口縁部は断面が方形を呈する段状に仕上げられている。171は底部を欠くが、体部と底部との境界部に鋭い稜が造られているものと考えられる。鉢Cには口縁部が斜め上方もしくは水平に伸びてそのまま終わらせている151～153がある。鉢Aには文様のないものと、口縁上端面に刺突文・波状文、口縁端部に刻み目文・波状文が施されているものがある。鉢Bには簾状文、口縁部から体部に簾状文・列点文・直線文・波状文・扇形文などの櫛描き文とヘラ描き斜格子文、凹線文などの文様がそれぞれ施されている。櫛描き文の施文具をみると鉢B162・171の簾状文は他の鉢の文様に比べると施文具が長く2.8cm、押捺幅の単位も狭い。高杯A155～157は浅い体部の鉢Aに脚部がつくもので、高杯157は腰部に稜が造られ、口縁部には凹線文が施されている。脚部の形態にも4種類みられる。脚部159は「ハ」の字形に短く開いているもの、160は柱状部が中実、161は中空に造られ、脚部158の柱状部は空洞のものがつくと考えられる。いずれも外面はヘラで磨かれている。堀は大・中・小型の大きさのものがある。また、くびれ部にゆるやかな稜をもち口縁部が短く外反しているもの-1形態とはっきりした稜をもつもの-2形態のものがある。堀174・181・182は小型ではかの堀に比べると、厚手である。内外面にハケ目調整が施されている堀のなかには、口縁端部が上方につまみあげられている189～192がある。この形態の堀は8層内出土の土器にはみられなかった。175・177・184・185・188は外面に細かいヘラ磨きがみられる。台形状土器196は円筒形の柱状部に大きく抜がる台部が付くものである。台上面部の中央は少し内湾している。

中期末土器

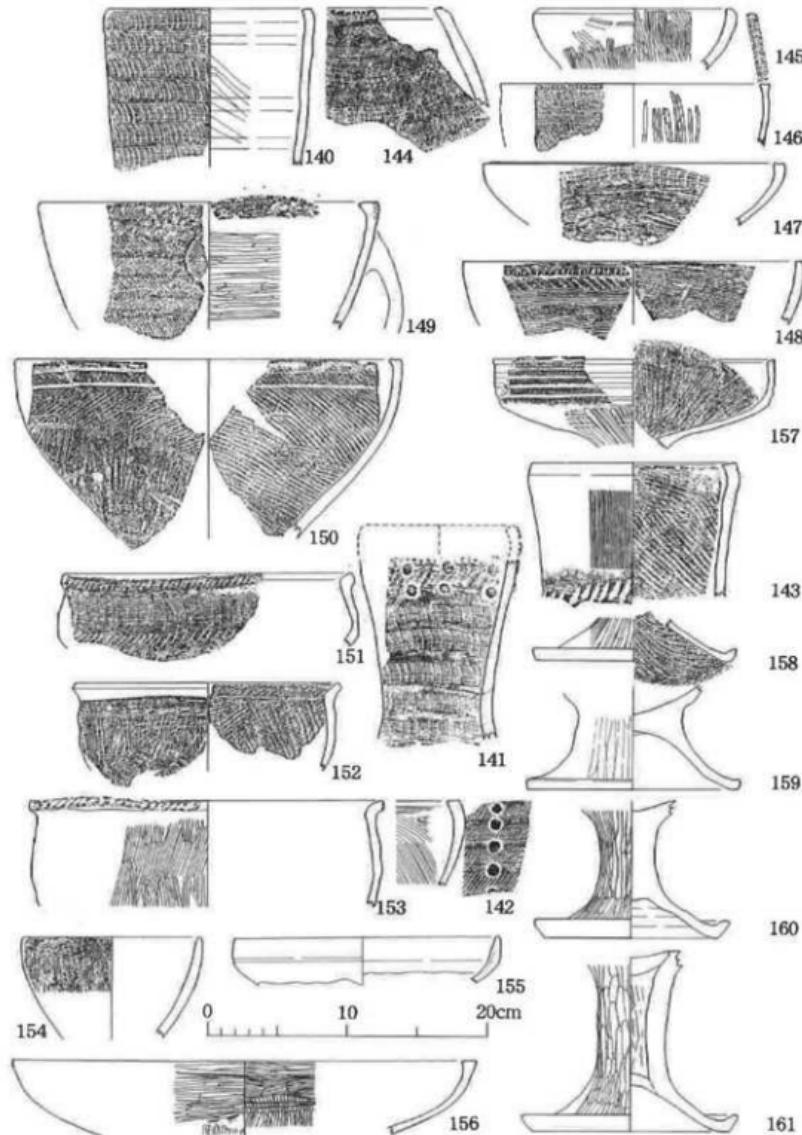
壺A197、受け口壺198があり口縁部に堅固に施された凹線文がみられる。

第7層内出土土器(199～217)：後期土器

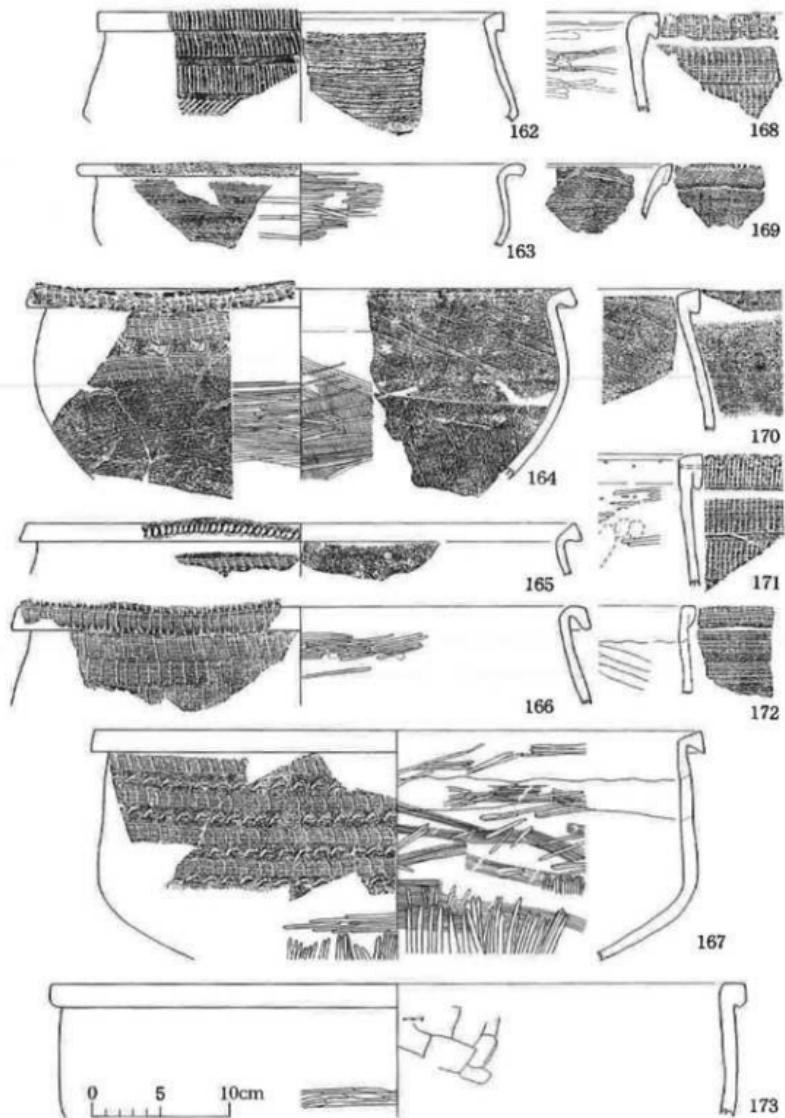
後期の壺Aは中期に比べると器壁が厚くなり、199は竹管文が押捺された円形浮文が口縁端面に、200は凹線文が施されている上にそれぞれ貼り付けられている。壺D201は全面にヘ



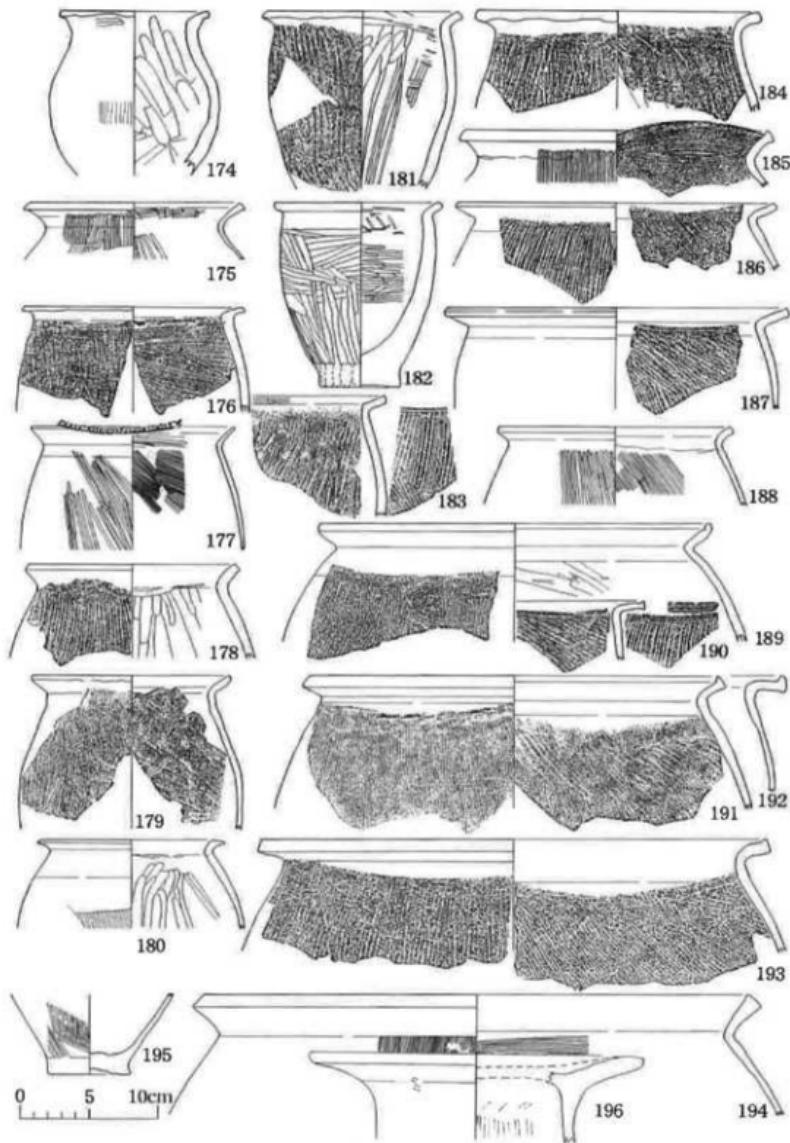
第11図 第7層内出土 弥生時代中期土器実測図-1



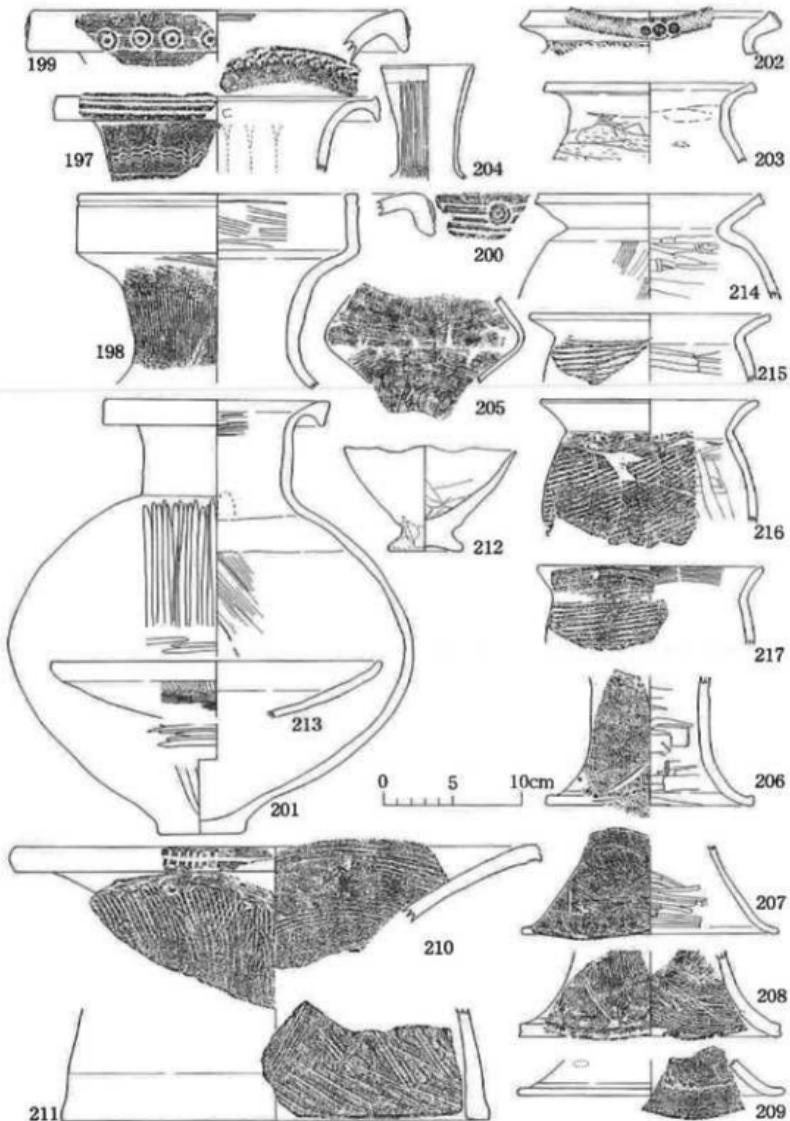
第12図 第7層内出土 弥生時代中期土器実測図-2



第13図 第7層内出土 弥生時代中期土器実測図-3



第14図 第7層内出土 満生時代中期土器実測図-4

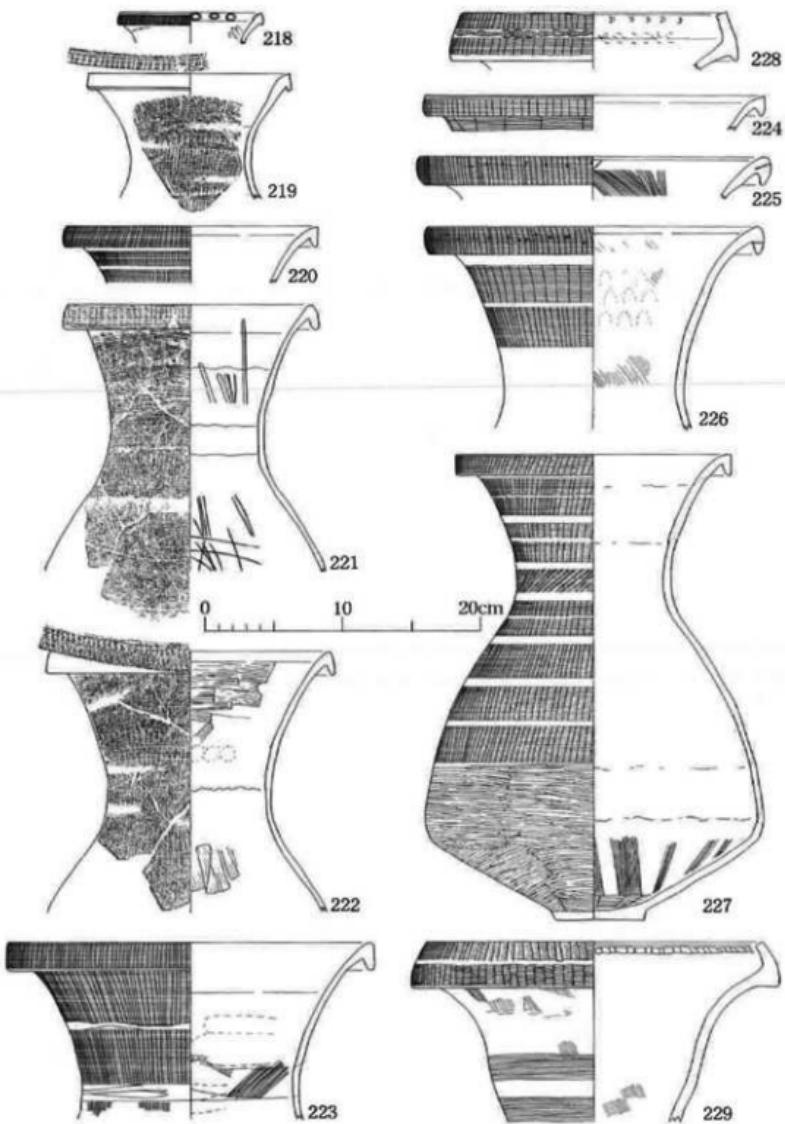


第15図 第7層内出土 猿生時代後期土器実測図

ラ磨き調整がみられる。壺C202は口縁端面にヘラ状工具による斜格子文と円形浮文、頸部に半截竹管工具による押捺文がみられる。壺C203は外面にヘラ削りが残されている。細頸壺204はヘラ磨き調整、胴部205には波状文と重弧文が施されている。器台には小型と大型の大きさのものがある。210の口縁端面には太い沈線文+刻み目文がみられる。内外面ともハケ目調整が施されている。高杯213は皿状の形を呈している。壺は胴部が大きく張り出している214とそうでない215~217がある。214の外面にはヘラ磨き、他の甕には叩き目調整がみられる。217の口縁部は胴部から斜め上方に叩き出し手法で造られている。

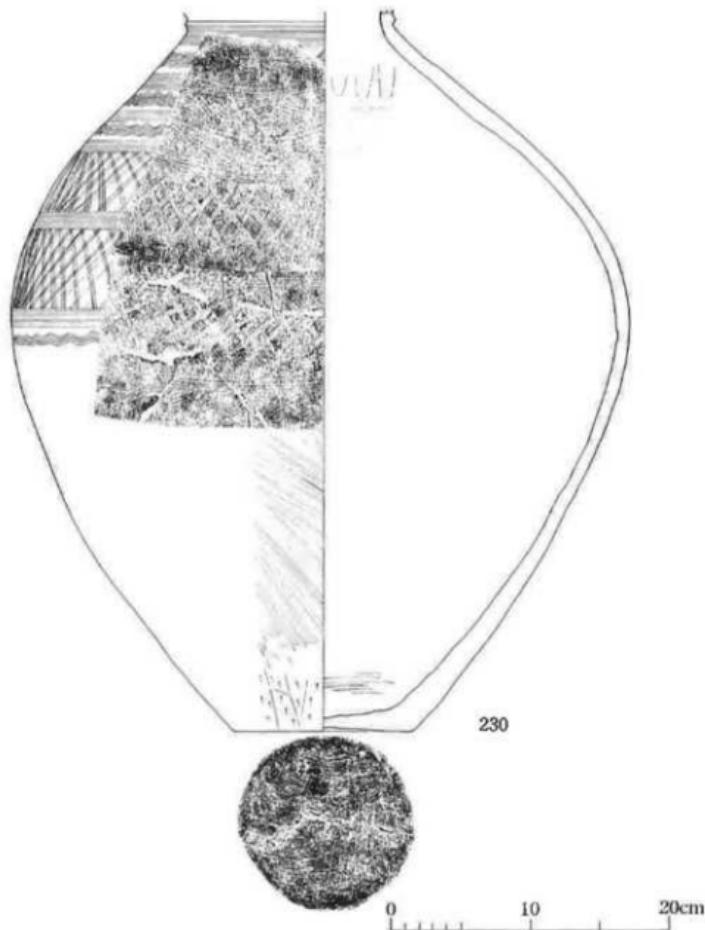
第6(炭層)層内出土土器(218~271):中期土器

土器の大部分は二次焼成を受けている。器種ごとに完形に復原できるものがみられる。壺A227は完形に復原できるもので腰部が低い位置に造られ、肩部から頸部が弓状に外反している。他の壺A220~226も227とはほぼ同様の形態である。先に7層内出土の壺Aを口頸部で分類したが、224は口縁端部が断面三角形につくられているA₁₋₂に属し、頸部の簾状文の一単位の横幅は他のものと比べると非常に広い。他の壺はA₁₋₂に属するもので先端部は丸味をもっている。簾状文の施文具の幅は7層内でみたものより長いものが使われ(最長4cm)、文様の一単位をなす横幅は狭いピッチ(4mm)で施されている。施文具は板状のものと考えられる。簾状文が主体に施されている文様の間にはヘラ磨きを何度も繰り足しながら一周巡らしているものがある。221の頸部の上位には直線文が、222の口縁端面には波状文が、227の頸部下には列点文が施されている。225・226の口縁端面には簾状文の上に刺突文がみられる。大型の壺230は口頸部が欠けているが、先の壺Aの分類ではA₂の口縁部がつくと考えられる。頸部下位に断面三角形の貼り付け突帯文、胴部に柳描き波状文と直線文、半截竹管工具による斜格子文が施されている。壺Aのなかでは口縁部ばかりでなく胴部の形態の違い、また施文の違いがみられる。壺B218・219・231の口縁部の形・施文などは壺Aが小型化されたものである。231は外面に二次焼成を強くうけており、器表面の剥離が著しい。受け口壺228は壺A224、229の口縁部の上面に粘土が繰り足されたもので口縁端面の簾状文の横幅の1単位は広くやや不揃いに施されている。228は簾状文の間に扇形文、229の頸部には直線文がみられる。壺Cはやや小型のもので頸部には粗いヘラ磨きがみられる。細頸壺232・233は内湾する口縁部がらきよ形を呈している。施文では大型の232・233と小型の234のものに違いがみられる。232・233の口頸部には上部に列点文と円形浮文、下位には簾状文が、233の体部には簾状文と円形浮文、列点文、流水文がみられる。これらが柳描き文を主体としているのに対し、小型の細頸壺234の口頸部には半截竹管による直線文、肩部には柳描き列点文、胴部には半截竹管による流水文が施され、広く間をあけて縦位に暗文が3本ずつ加飾されている。233は文様をよく観察すると、列点文・簾状文の1段毎の繰り目が食い違っている箇所や、文様間のヘラ磨きが文様の上に被っている箇所が認められる。233の文様帶の最下位には簾状文、234の最下位には列点文がみられる。232の器歟は233・234が薄く仕上げられているのに比べると厚手である。短頸壺240はヘラ磨き調整で仕上げられている。瓜生堂遺跡でも類例がみられる¹²⁾。241は口頸部を欠いた部分を二次口縁にして使用されたものかもしれない。内外面ともに黒色を呈する。水差し型土器235の口縁部には列点文が右上から左下へ6段とも同じ方向に施され胴底部はヘラ磨きで仕上げられている。壺類の胴部236~238がある。238にはこの層内の出土土器の中で唯一の焼成後の小円孔がみられる。壺243・244は無頸壺用のものである。台付無頸壺B245も全面にヘラ磨き調整がみられる。鉢B246~248は破片であるが、口縁部は段状に造られ断面が四角形のものと三角形のものがみられる。248は刻

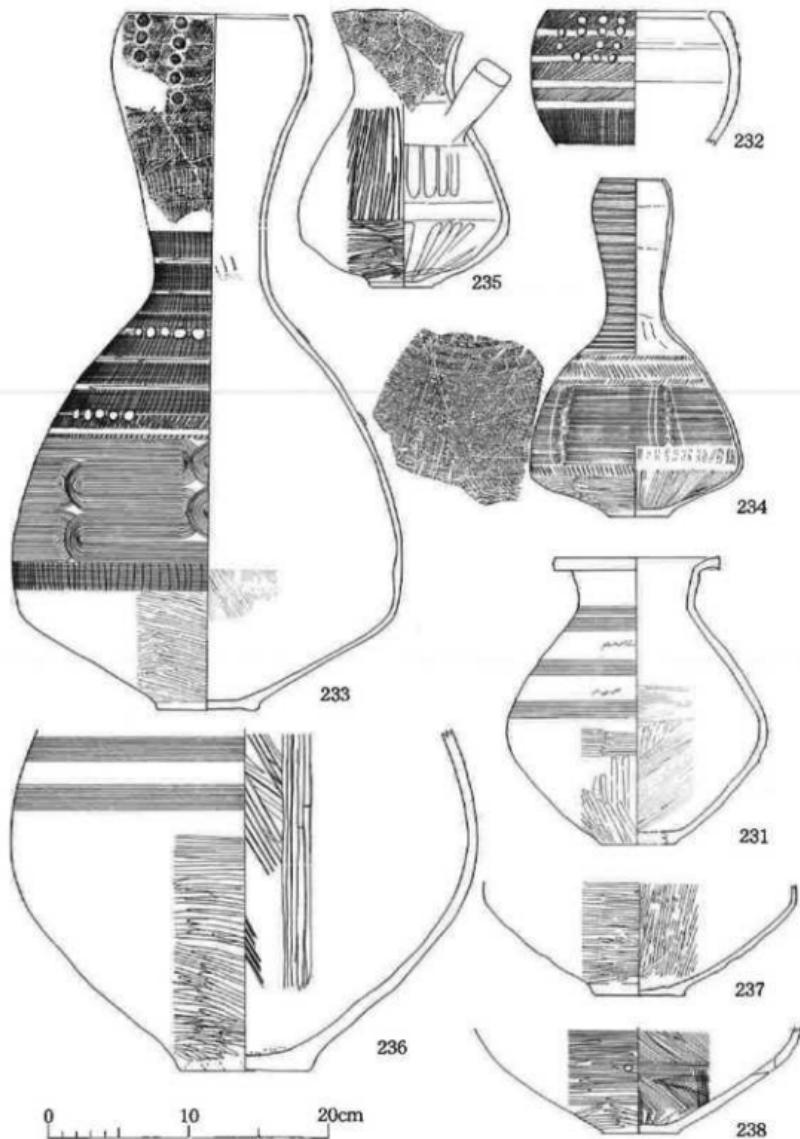


第16図 第6(炭)層内出土 弥生時代中期土器実測図-1

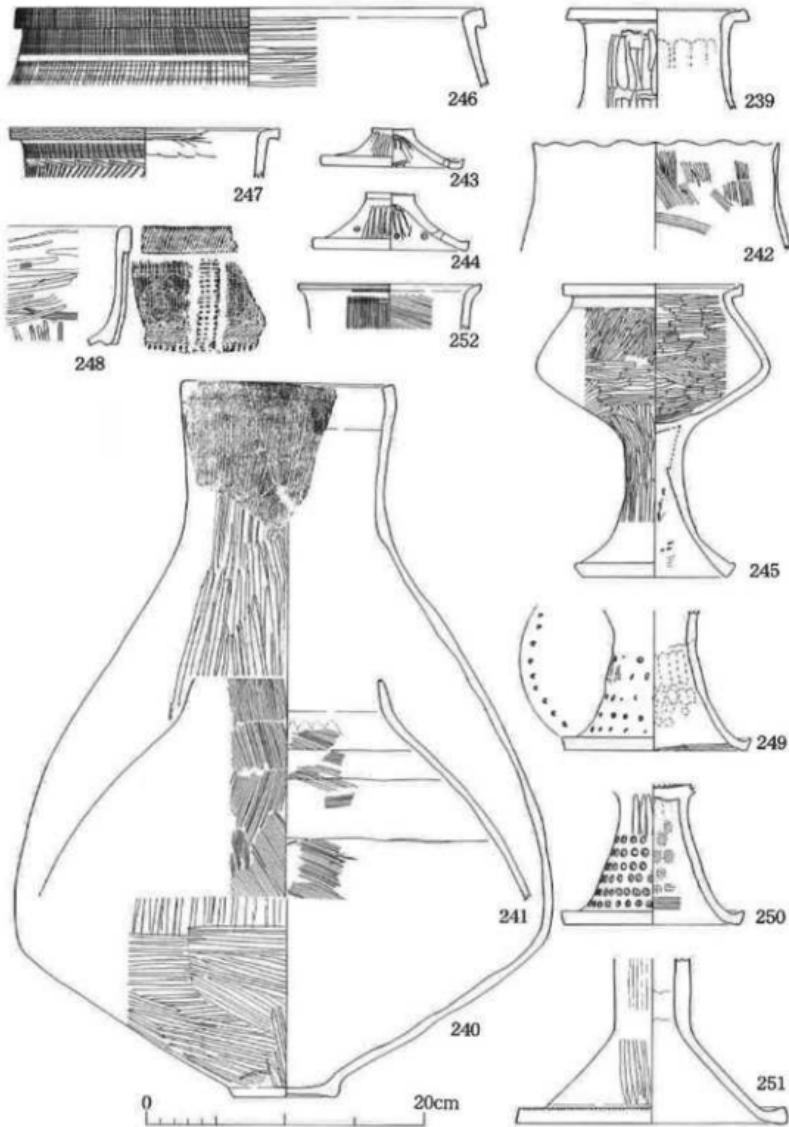
み目文を付けた棒状浮文が貼り付けられている。脚部251は柱状部に逆漏斗状に拡がる裾部が付けられ、端部には刻み目文が施されている。脚部249・250にみられる竹管文は前者は粗雑で、後者は丁寧に施されている。ほかに全形は不明であるが二次口縁風の242、短く口縁部が外反する252がある。甕は大・中・小型の大きさのものがみられる。口縁部内面の屈曲部に短い立ち上がり造られている253・255・257・258・261・263～266・269・271・272、口縁の屈曲部が「く」の字形になっている254・256・259・262・267がある。大型の甕254・256の口縁端部は断面三角形を呈している。調整は殆どの甕の外面に縦方向のヘラ磨きがみ



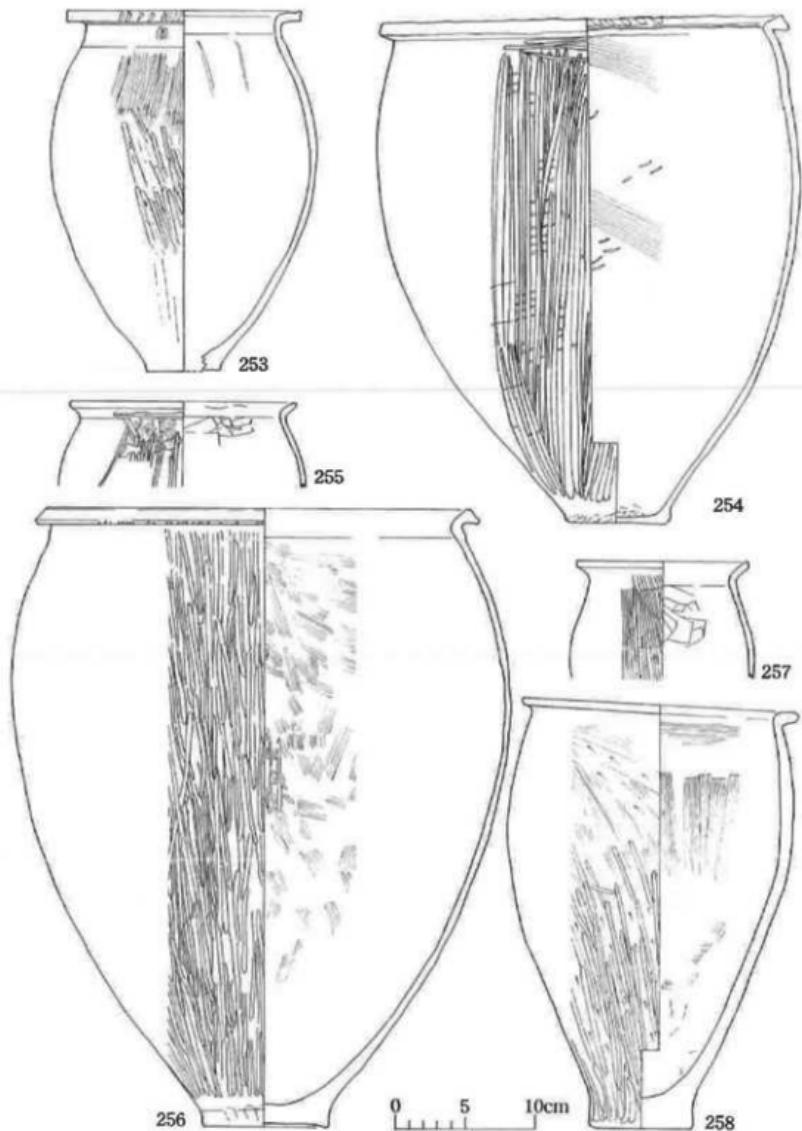
第17図 第6(炭)層内出土 弥生時代中期土器実測図-2



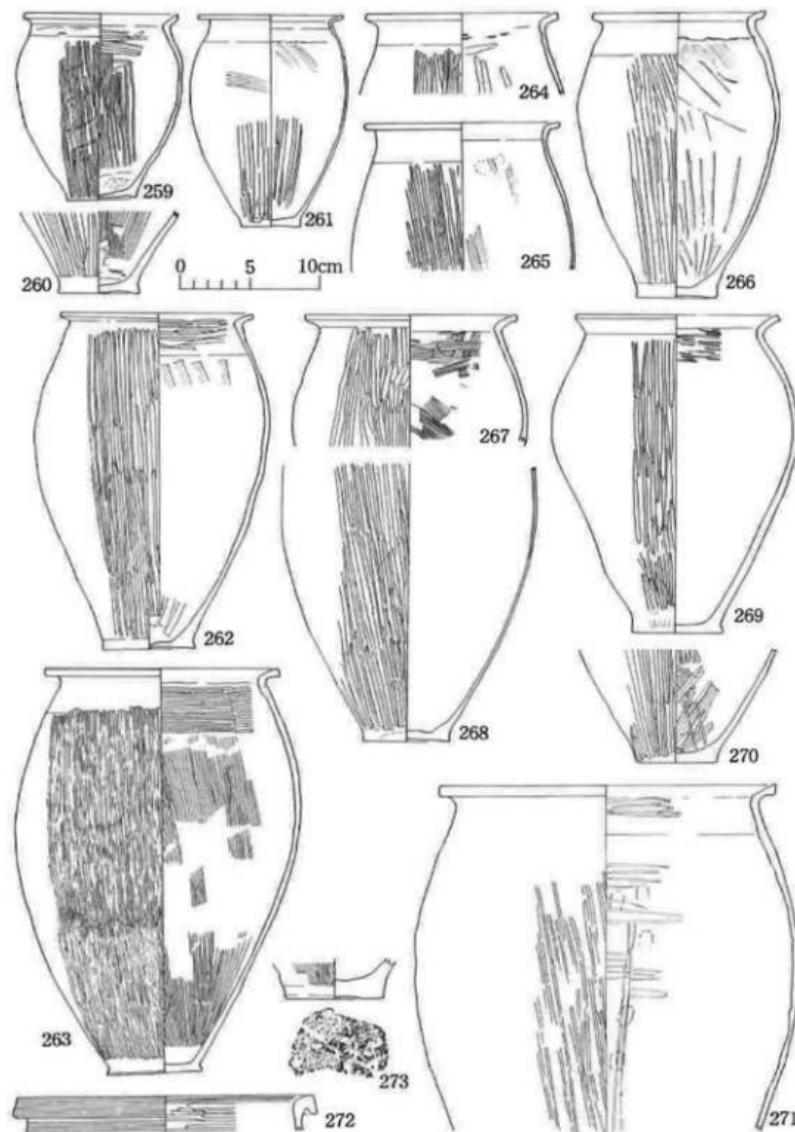
第18図 第6(炭)層内出土 猿生時代中期土器実測図-3



第19図 第6(炭)層内出土 青銅時代中期土器実測図-4



第20図 第6（炭）層内出土 弥生時代中期土器実測図-5



第21図 第6(炭)層内出土 弥生時代中期土器実測図-6

られるが、内面の肩部にも横方向のヘラ磨きが施されている259・262・263・269・271がある。253の外面には上部にハケ目、下部にヘラ削り調整がみられる。254の外面にはヘラ磨きの下に叩き目、口縁部内面には一周する指圧痕がみられる。253の口縁端面と256の口縁端部には刻み目文が施されている。

これらの炭層内出土土器については先に拙文で資料紹介し、若干の考察を記している¹⁰。壺A227、細頸壺233・234、水差し形土器235、短頸壺240、台付無頸壺245のそれぞれの体部は安定感があるフラスコ形を呈し、胴底部の器高と胴部の最大径の長さはほぼ等しい大きさに造られている。台付無頸壺は胴部と底部の器高の長さの比が2:1であるが、ほかの器種はほぼ4:1に造られている。7~9層内から出土している壺に比べると器壁は一様に薄く仕上げられている。簾状文の施文には板状工具が使われており、凹線文が施されているものはみられない。また壺の肩部の内面調整にはヘラ磨きが施されたものが多く認められる。この層内から出土した胎土は壺230・231だけが生駒西麓産のものではない。これらの土器には共伴している石器とともに二次焼成の痕跡がみられ、なんらかの祭祀の後に焼却、廃棄されたものと考えられる。穿孔の痕跡は238の壺底部のみに焼成後的小孔が認められたが、他の土器類の残存している部位には確認することができなかった。

第6層内出土土器(281~491):中期土器

この層内からは土器の出土量が非常に多く、そのうち中期の土器が大半を占める。これらの土器のなかでは若干の時期差がみられる。壺Aは7層内から出土した土器と同じもの以外に、形態と共に施文にも違いがみられる。大きく簾状文が主体に施されているものと、そうでないものの2グループに分けられる。さらに簾状文が主体の土器の口縁部の形態をみると、先端部は薄く尖らせているものと、矩形か丸みを持たせて造られているものに分けられる。277・278・280の口縁端部は外向きの下方斜めに垂下しており、先端が尖っている。279・285は口縁端部が矩形に造られている(278の口縁部には波状文と刻み目文が施されている)。施文には管状のものを結わえた道具が使われている。口縁端部がほぼ真下向きに垂下している281~284・286~292には、簾状文の施文には板状工具が使われ、1単位の縦幅は長く(最長4cm)、横幅は狭く(最短4mm)施されている。壺A'274~276の口縁部には長い頸部が付くもので、275・276の内面には円形浮文がみられる。274・290の口縁上下端部と275・278・279の口縁下端部にはヘラ刻み目文が施されている。簾状文がみられない327・330~332・334の口縁端面には刻み目文や凹線文が施されており、口縁端部は水平近くに開いて、端部の肥厚が下方か、上・下方の両方にみられる。このタイプのものは数量的には少ない。壺Bにおいても壺Aと同じように口縁部の形態が外向きの下方斜めに垂下している293~295、口縁端部が真下向きに垂下している296~298に分けられる。施文の違いも壺Aと同じ傾向がみられる。受け口壺305~316は壺Aの口縁部に粘土が継ぎ足された幅広い端面に、2、3帯の櫛描き文が施されている。櫛描き文は簾状文、扇形文、刺突文、列点文が組み合わされている。頸部の上位には直線文、下部には簾状文がみられる。これらのなかで312の口縁部は水平に開く壺Aの口縁部が上方に拡張されたもので厚手である。318は口縁部が下方に長く垂下しており、端面と口縁内面の全面に櫛描き文がみられる。壺328は壺Cに、壺326・329は壺Dに形態的に分類できるだろう。細頸壺にはB319、C320がある。321は水差し形土器の口縁部になるかもしれない。水差し形土器の336は口頸部に凹線文、水差し形土器337の胴部には流文と列点文が施されている。335~346は壺の頸胴部である。347は小型のもので全面にヘラ磨きがみられる。347は形態的には縦位に把手がつけられ、口縁部は把手側が

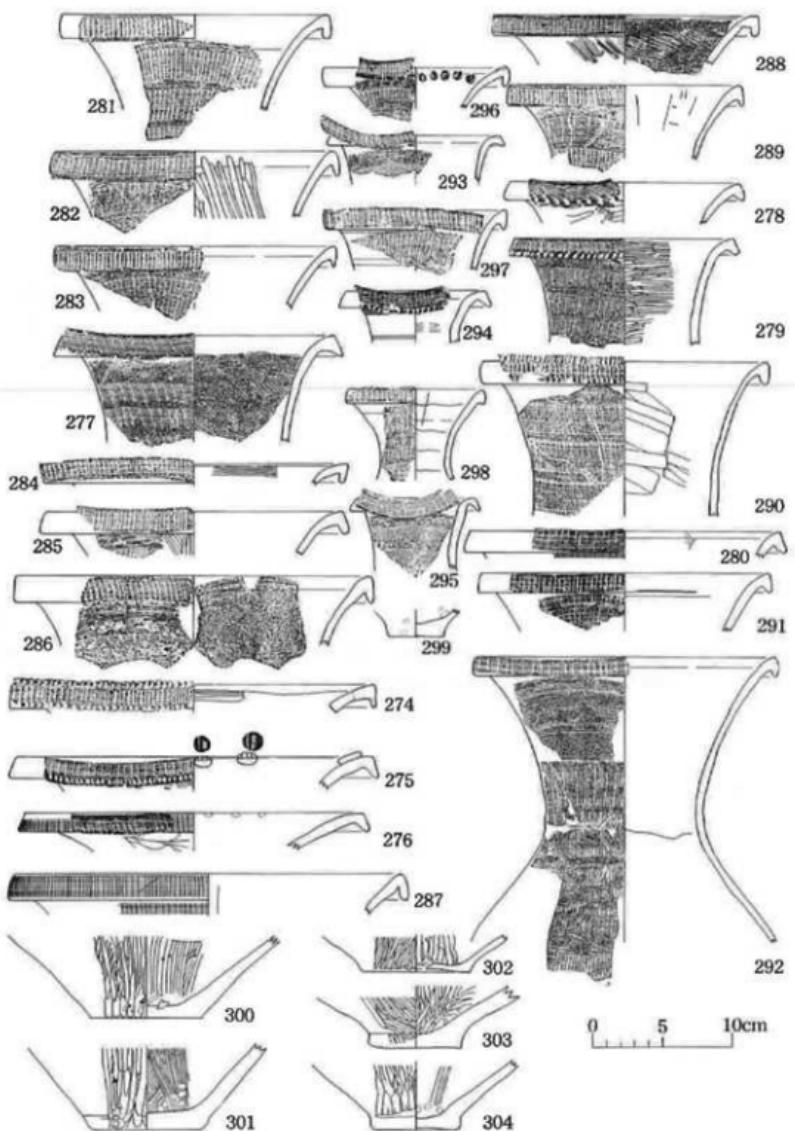
低く造られたミニチュアの水差し型土器になる。無頸壺348は口縁部が「く」の字形に外反しており、端部は矩形に造られ、体部には直線文が施されている。349・350の口縁部は段状に造られている。鉢A373～382はそれぞれ口縁部～体部に短い施文具による櫛描き文か凹線文が施されている。374・375・379の口縁部にはヘラ刻み目文がみられる。凹線文が施された鉢A382の胎土には細かい角閃石が含まれている。胎土は緻密である。鉢Bには大型と小型の大きさのものがみられる。鉢B356は体部の中央部が丸く造られている。352～355は体部の下部が丸く造られ、緩やかに屈曲して底部に継ぎ、口縁部は斜めに仕上げられている。351・357・358・364は先例と同じ体部に口縁部が外反後、断面が三角形に仕上げられている。359～363・365・383～390はほぼ真っ直ぐに内傾して立ち上がる体部と底部の境界部に鋭い稜が造られ、口縁部は段状を呈している。これらの鉢の形態と施文には相関関係がみられる。体部が緩やかに屈曲している土器の施文具には管状の櫛目のものが使われており、縦状文の縦幅が短く1単位の横幅はやや広めに施されている。それに対して鋭い稜が造られている土器には長い板状工具が使われ、1単位の施文の幅も狭い。口縁部と体部の文様の縦の長さは異なるがよく観察すると、同じ施文具であることが認められる。以上の土器はいずれも生駒西麓産の胎土である。無頸壺の出土数は少ないが、鉢Bの口縁部と同じ形態のものがみられる。文様も同じ傾向がみられる。高杯Aについては文様が施されていないものが多く、中期後半～後期土器の項に記載している。

高杯B366は口縁端部の垂下部分が短く、367は長く垂下している面に凹線文が施されている。脚部の施文には円孔と竹管文がみられる。中期から後期にかけてのミニチュア土器の鉢型の391～393、無頸壺の蓋394がある。壺395～491・552～555・560～566は分類すると大・中・小型の大きさのものがあり、さらに形態と調整から大きく2タイプの大和型、河内型に分けられる。折衷型のものもみられる。

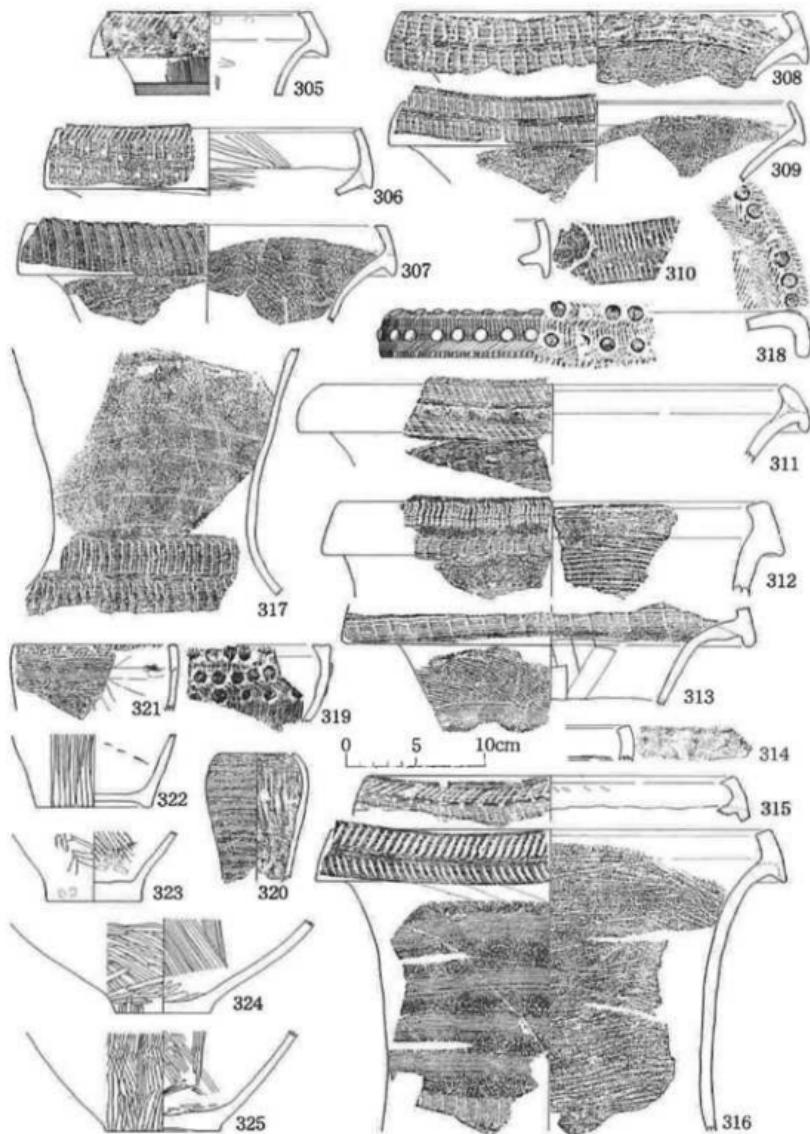
壺は口縁部を中心にみた形態から大きく次の5つに分けられる。

- 1 形態 脚部から口縁部が大きく外湾しながら外反し、そのまま端部が納められているもの。
- 2 形態 脚部から内面にわずかな立ち上がりをもち口縁部が外反し、そのまま端部が納められているもの。
- 3 形態 2形態の口縁部の端部が断面三角形に造られているもの。
- 4 形態 脚部からくびれる部位の内面が「く」の字型を呈して口縁部が外反し、そのまま端部が納められているもの。
- 5 形態 4形態の口縁部に端部が上方に立ち上がりをもつもの。

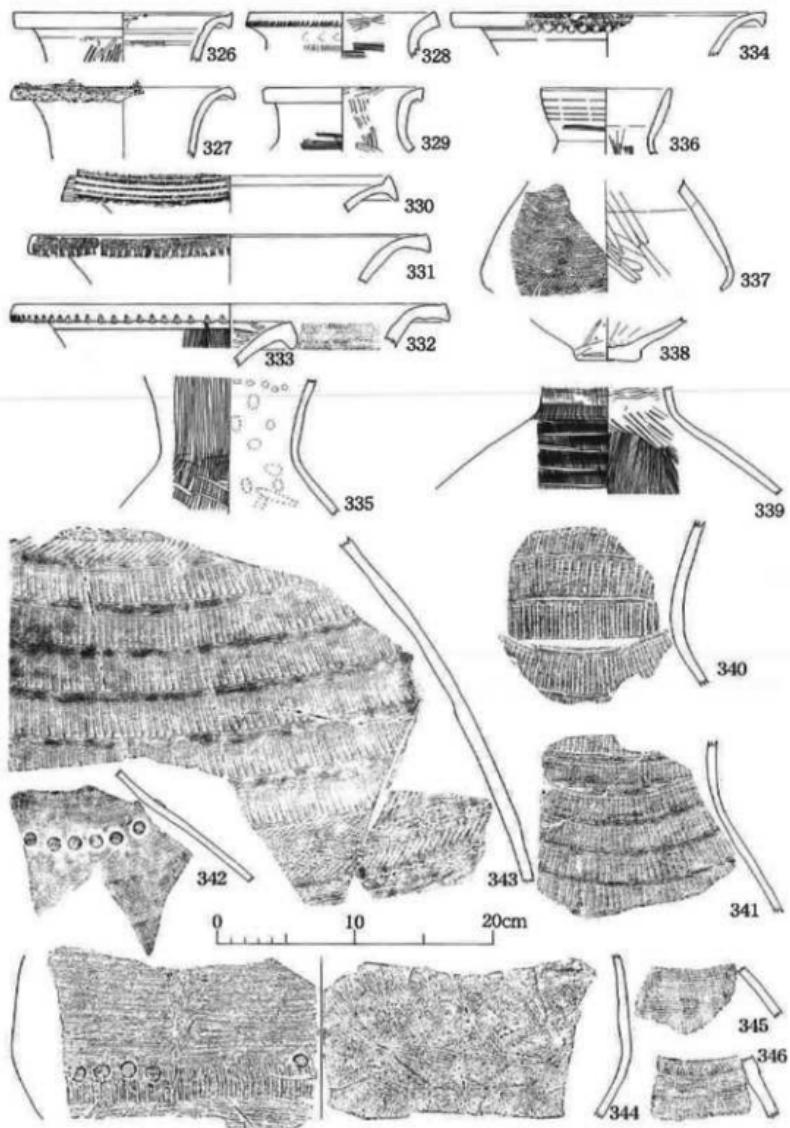
第6層内から出土した壺の調整はハケ目を中心とする大和型のものより、ヘラ磨きを中心とするものが多く見られる。395は口縁端部の内面に粗いハケ目調整が施されている大和型の畿内第Ⅱ様式の典型的なものである。この大和型の壺の調整法は畿内第Ⅱ様式の時期から次の時期まで踏襲されている。生駒西麓産の胎土のものは河内型のタイプが圧倒的におおいが、大和型の影響をうけたものもみられる。他に以上のタイプに入らないものがある。圓版26-2に出土例の少ない壺を掲載している。左下の壺はあまり脚部が拡がらずに、丸みをもつ口縁部は粘土を貼り付けて造られている。外面は光沢をもち縦方向にヘラ磨き、内面は横方向にヘラ磨き調整をしている。朝鮮の無文土器に似る。



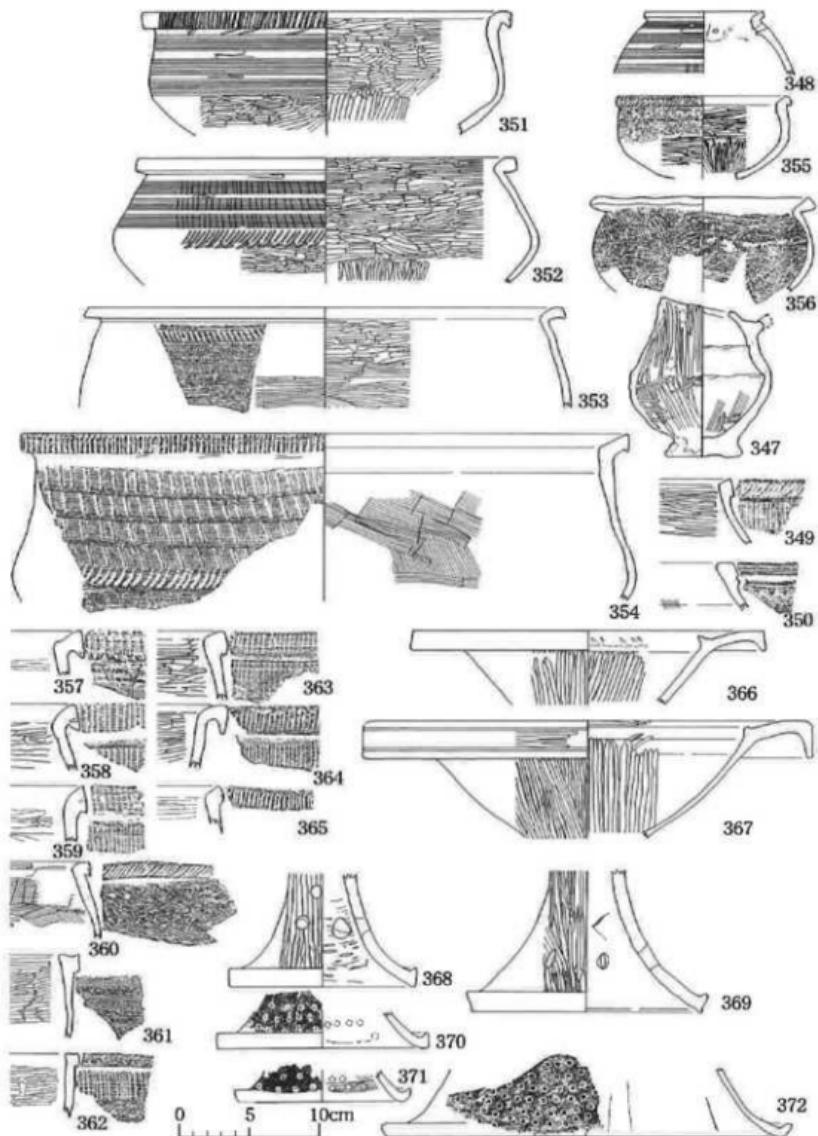
第22図 第6層内出土 弥生時代中期土器実測図-1



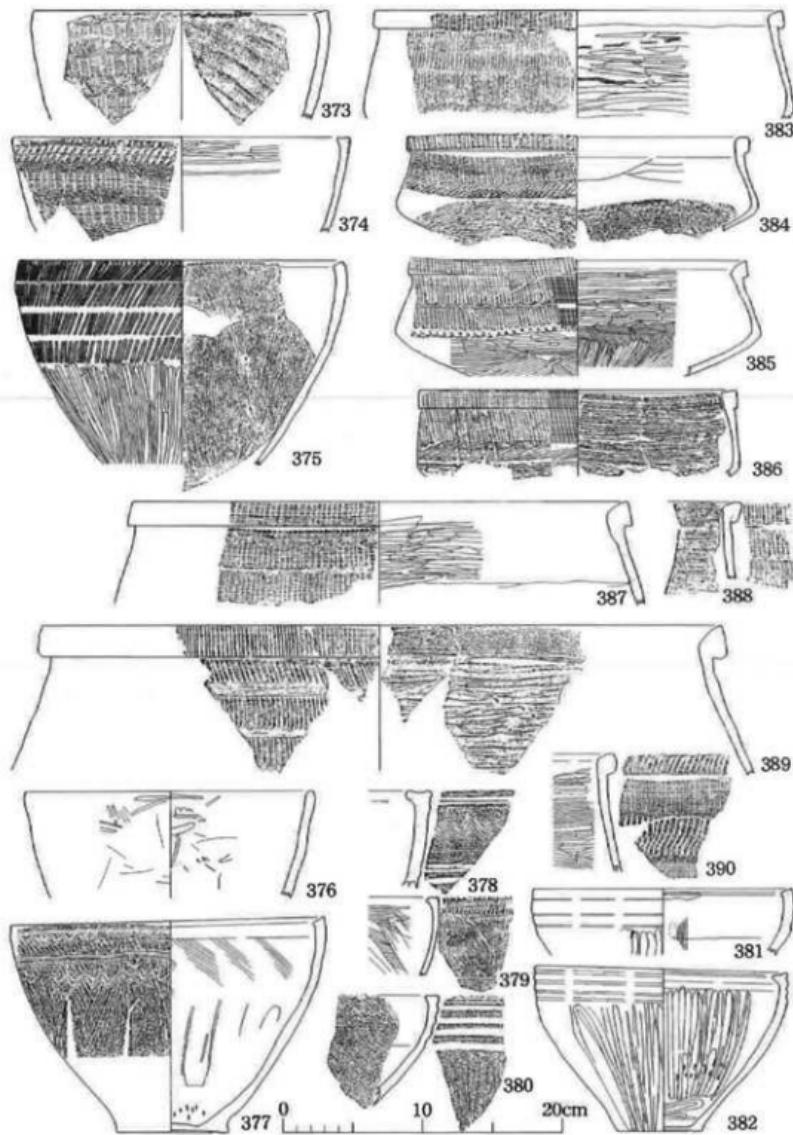
第23図 第6層内出土 弥生時代中期土器実測図-2



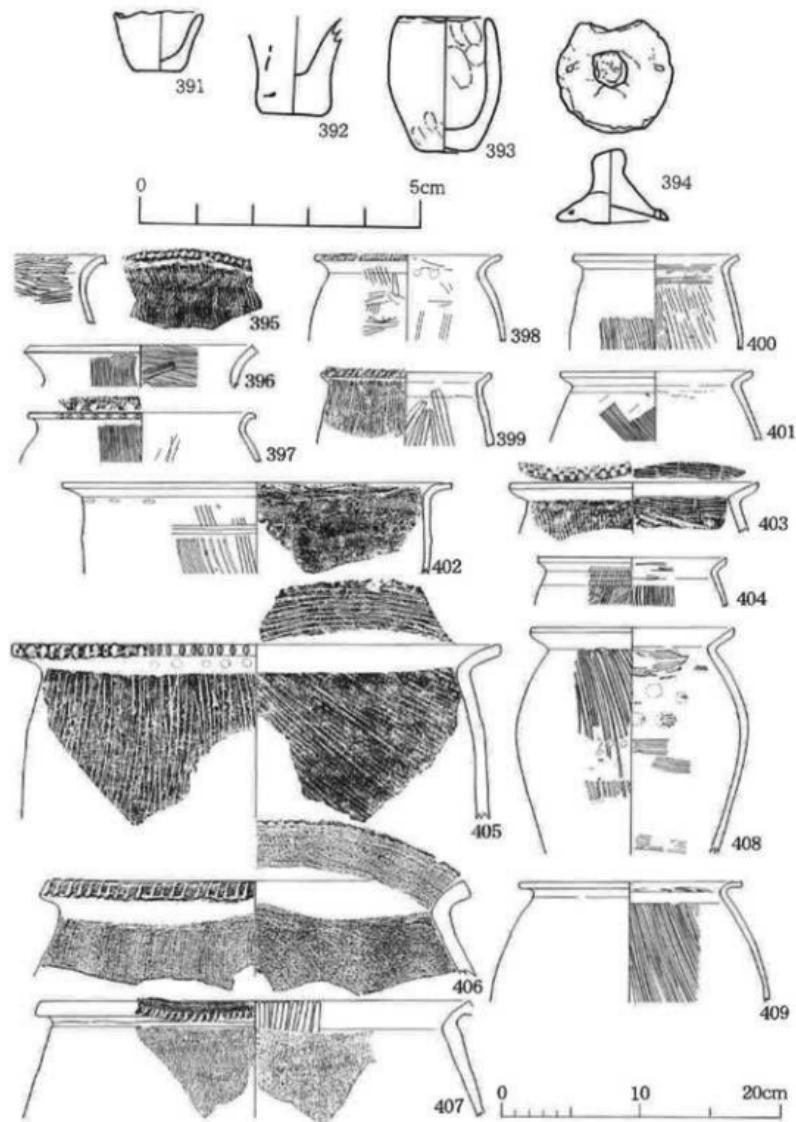
第24図 第6層内出土 新生時代中期土器実測図-3



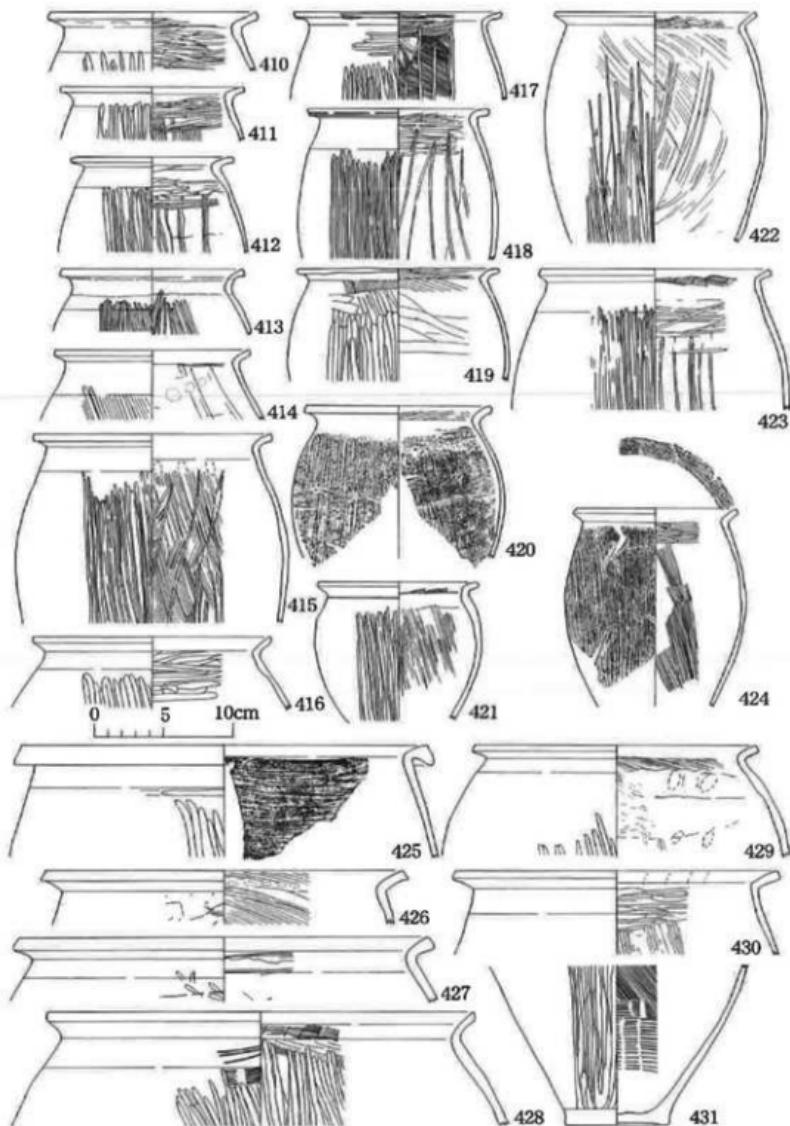
第25図 第6層内出土 弥生時代中期土器実測図-4



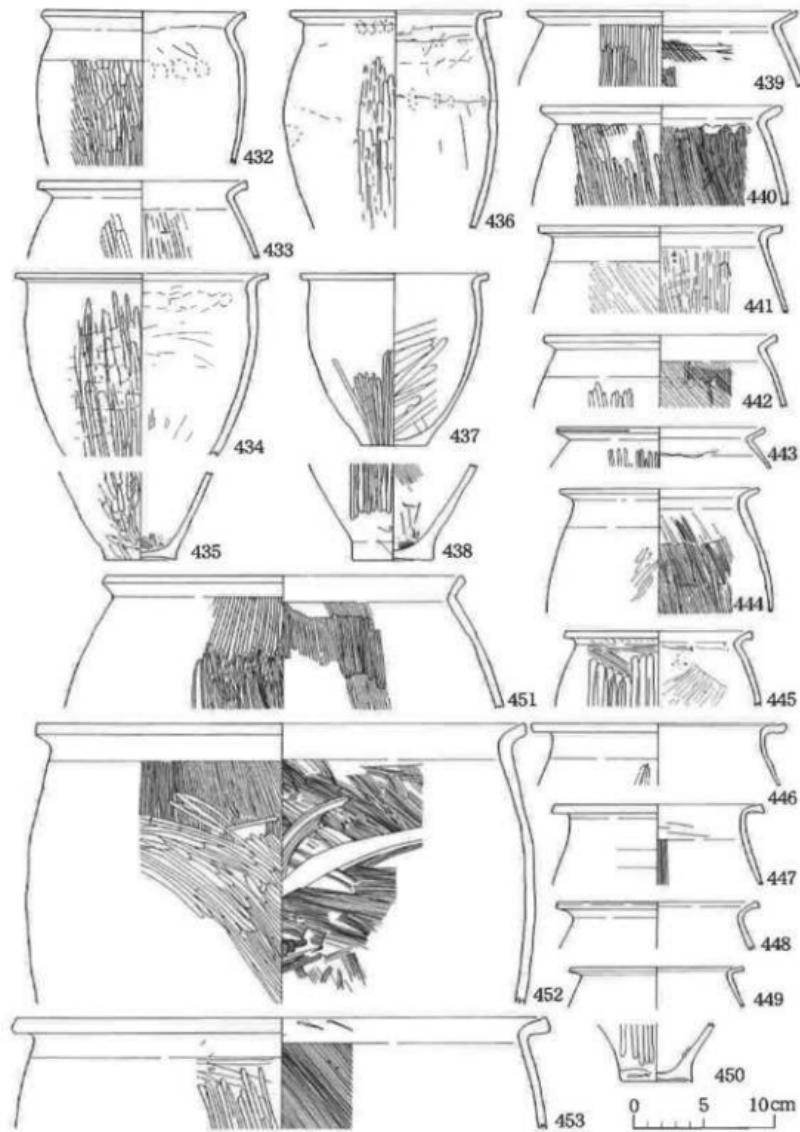
第26図 第6層内出土 弥生時代中期土器実測図-5



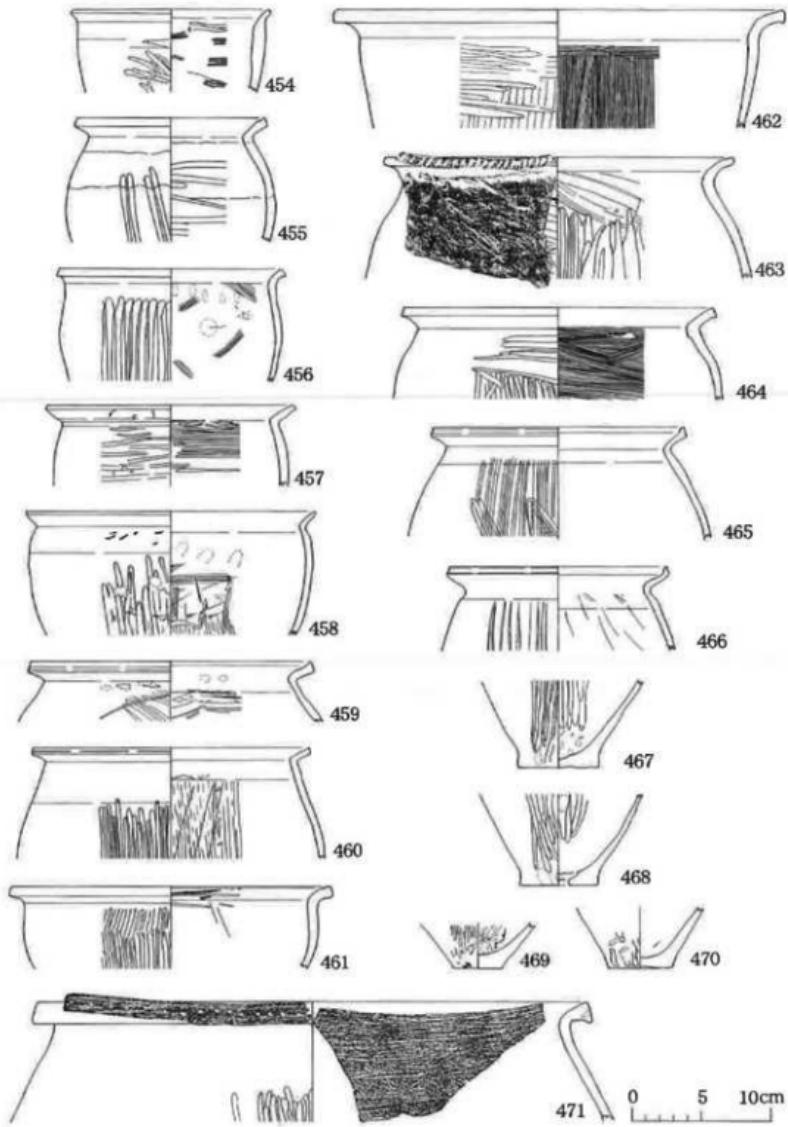
第27図 第6層内出土 新石器時代中期土器実測図-6



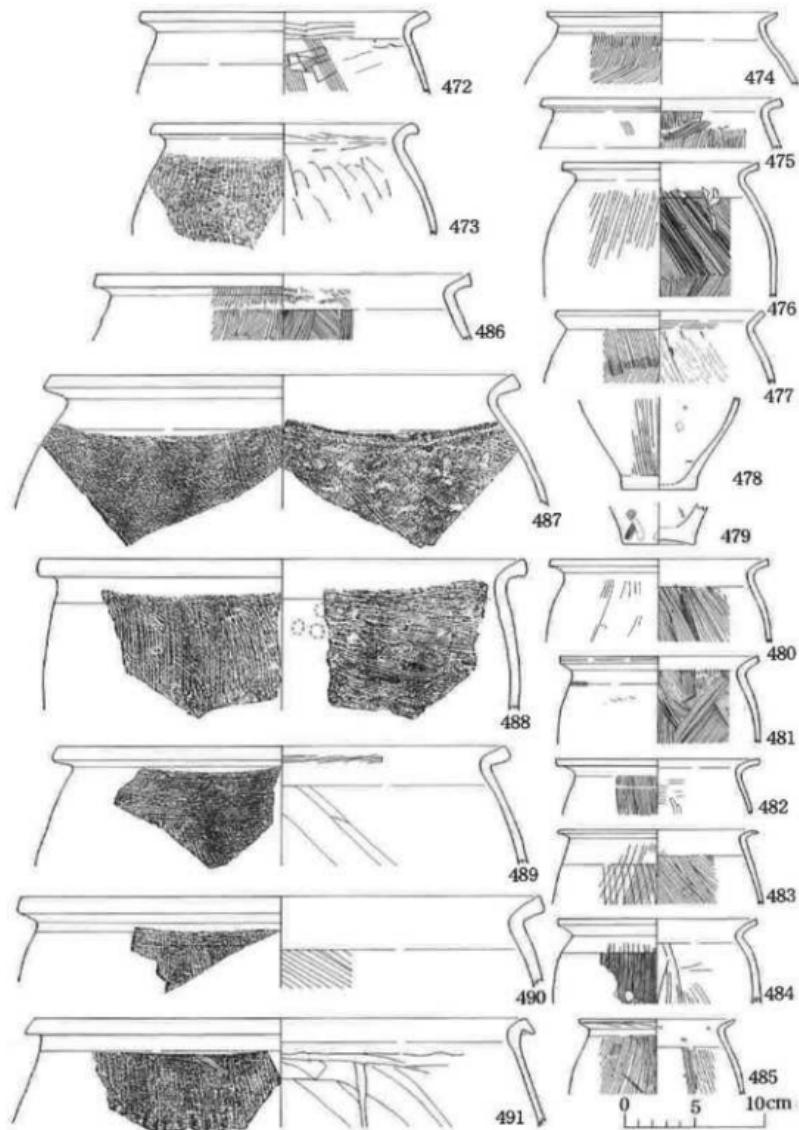
第28図 第6層内出土 弥生時代中期土器実測図-7



第29図 第6層内出土 弥生時代中期土器実測図-8



第30図 第6層内出土 弥生時代中期土器実測図-9



第31図 第6層内出土 猿生時代中期土器実測図-10

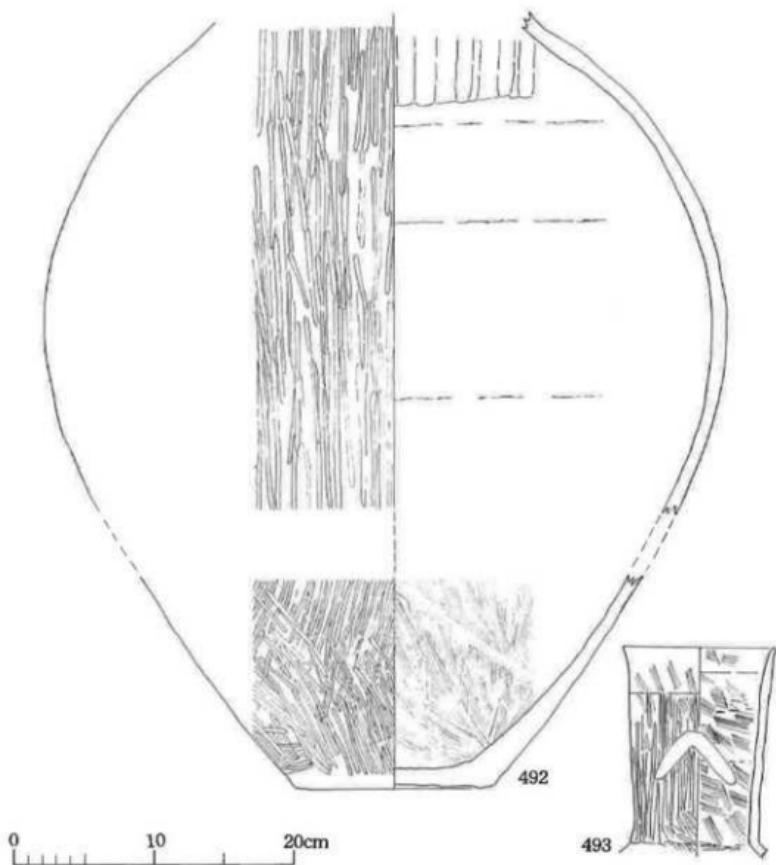
表1 大和型甕と河内型甕の調整と形態

大和型		河内型				
	あ 外面 内面	い 外面 内面	う 外面 内面	え 外面 内面	お 外面 内面	
口縁部	刻み ハケ	横なで	横なで ハケ	横なで	横なで	
肩 部	ハケ ハケ	ハケ ハケ	横なで 磨き	横なで 磨き	磨き なで	
体 部	ハケ ハケ	ハケ ハケ	ハケ+磨き	磨き ハケ+磨き	削り+磨き	
形 態	1・2・3・5	2・3・4・5	2・3・4	2・3・4	2・3	

第6層内出土土器(492~589)：後期の土器(一部中期の土器を含む)

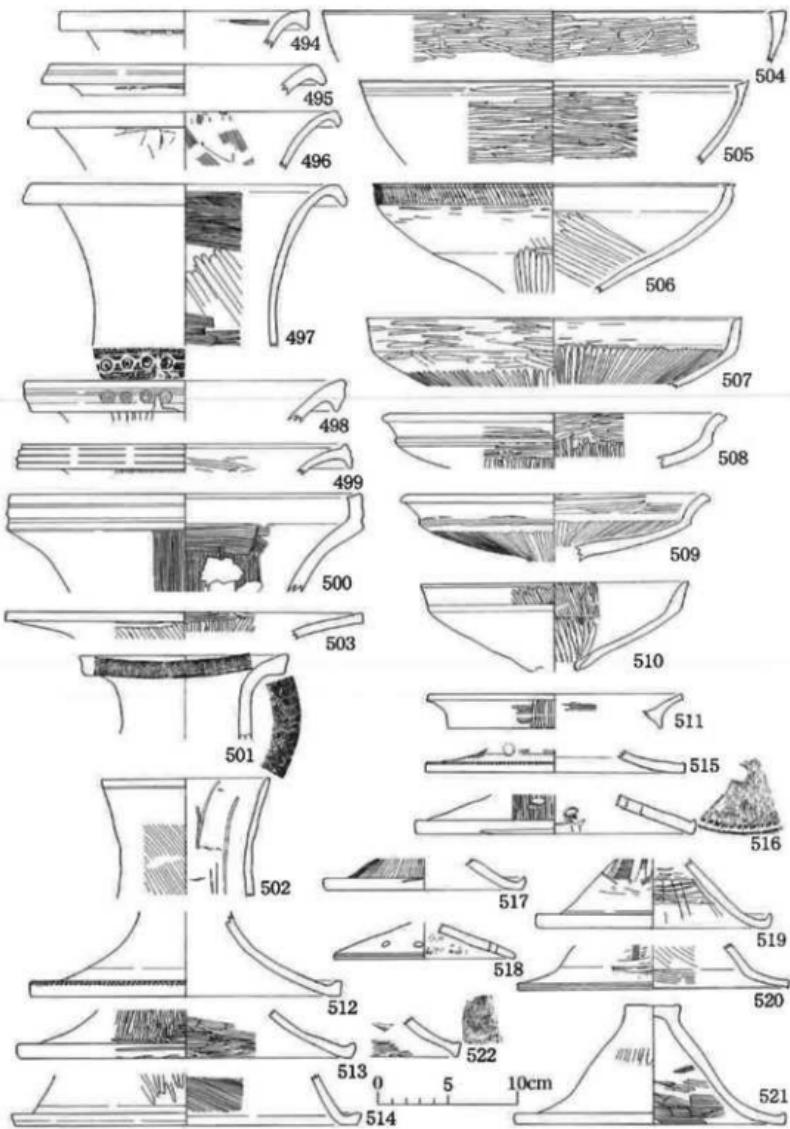
先に多量の中期の土器をみてきた。6層内には中期後半から後期の土器が混じり、そのなかでも鉢A・甕などに完形品に復原できるものもあるが、その他の器種は破片のものが多い。全般に文様が施されたものは少ない。

口縁部に文様がみられない甕A494~497と口縁部に凹線文が施されている甕A499、受け口壺500は中期後半に属する。口縁端部が厚っぽく造られ、端面に凹線文と竹管押捺文をつけた円形浮文が施された甕A498と、口縁部外外面に波状文がみられる壺A501は後期に属する。長頸壺には頸部が短い壺501と長い壺493があり、493の頸部のなかほどには逆「V」字形の記号文が朱彩で描かれている。色調は白色を呈する。大型の壺胴部492は現高値が55.6cm(復原値)で、外面全体がヘラ磨きで仕上げられている。口頸部は漏斗状に開いて口縁端部が下方に肥厚するものが付くと考えられる。高杯の杯部504~511は3形態に分けられ、体部から口縁部までそのまま開く504~506、体部の腰部に稜が造られ、口縁部が立ち上がって507~510、体部の腰部に稜が造られ、口縁部が外湾して開いている508~509・511がある。511は二重口縁になると考えられる。506の口縁部には刻み目文が施されている。脚部512~517・522は裾端部の形態が少しずつ異なる。512・515・516の裾端部には刻み目文が施されている。515~517の内外面には煤が付着している。脚部522は裾部に鋸歯文、端部に刻み目文が施されている。蓋は壺蓋518と甕蓋519~521がある。文様がなく茶碗形をしている鉢A523~538は中期初頭から引つづきみられるため時期差の判別は困難である。器壁は薄く、外面には継方向にヘラ磨き調整が施されているものが多い。529は把手がはずれた跡がみられ、外面には横方向にヘラ磨き調整が、口縁端部には刻み目文が施されている。531は口縁部に近い部分が内湾しており、内外面ともに横方向のヘラ磨き調整がみられる。527の口縁部は波状を呈し、底部には焼成前の孔が穿たれている。536~538は脚部がつくものである。脚部の形態には、「ハ」の字形に開いている536・542・544、柱状部から少し屈曲して裾部が聞く537・545~548がある。鉢B534~535・551は口縁部が斜めに外反するもので、大型の551は体部側面に逆「U」字形の把手がついている。類例は藤原宮西辺地区¹⁰と東大阪市岩滝山遺跡¹¹、恩智遺跡¹²の後期の古い土器に共伴するものがあげられる。各遺跡とともに1点ぐらいの出土である。無頸壺539は短い口縁部が外反するもので、外面はハケ目の上にヘラ磨き調整が施されている。540は受け口状の口縁部がついている。全体の形がはつきりしない壺C541は短い立ち上がりの頸部が造られている箇所があるが、無頸壺ともいえる。体部は球形になるとと考えられる。器台503は口縁部が大きく聞く薄手のもの、549・550は小振りのもの



第32図 第6層内出土 弥生時代後期土器実測図-1

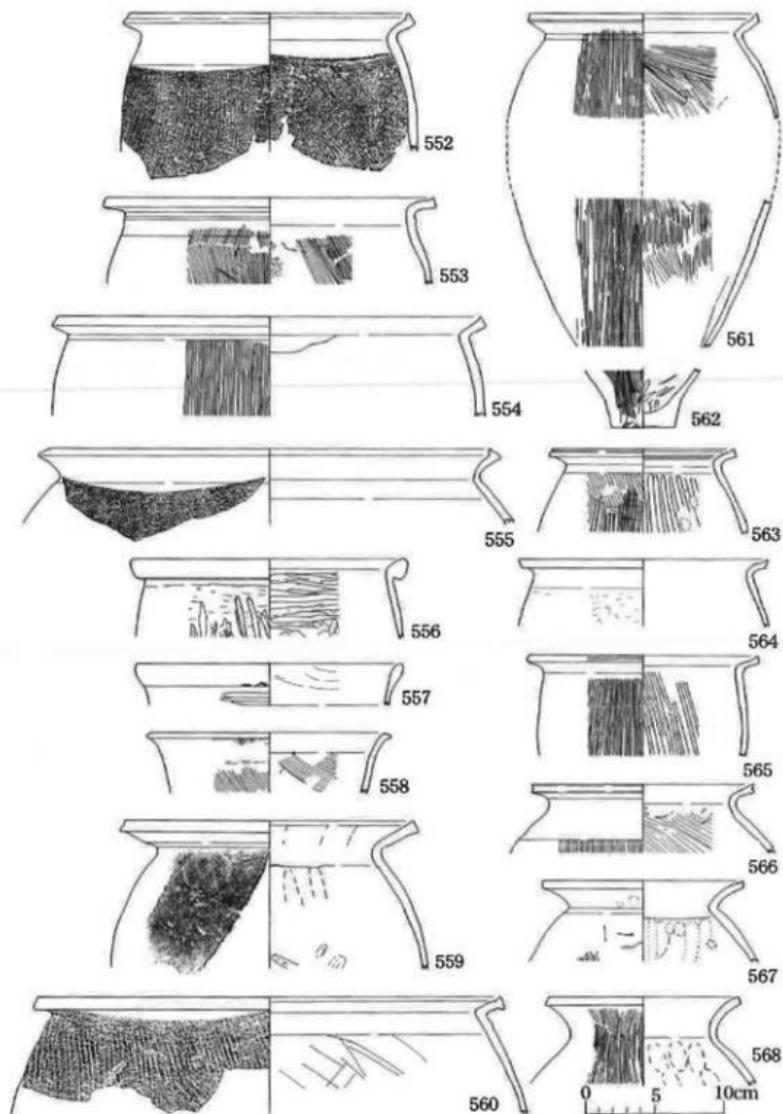
でヘラ磨き調整で仕上げられている。甕559・567・568は丈高の体部に「く」の字形に外反する長い口縁部をもち、体部がハケ目で調整されたものである。叩き目を中心とした調整にハケ目が組み合わされたものも多く見られる。内面にはヘラ削りを施したものが多い。甕は口縁部が「く」の字形に外反するものが多いが、受け口状になる574・584・585もみられる。体部の形態から3タイプに分けられ、体部は丈高で洞部の中位で口縁部より大きく張り出す573・585・587、体部の肩部が口縁部より強く張り出す569・571・572・574・583・585、胴径の大きさが口径より小さいかほほ同じ570・576・578・584などがある。573は他の土器と違い、口縁端部が厚っぽく造られており、外面全面が叩き目の上からハケ目で調整されている。底部には焼成後の穿孔がみられる。569・587は体部に3分割の叩き目調整が施され、569



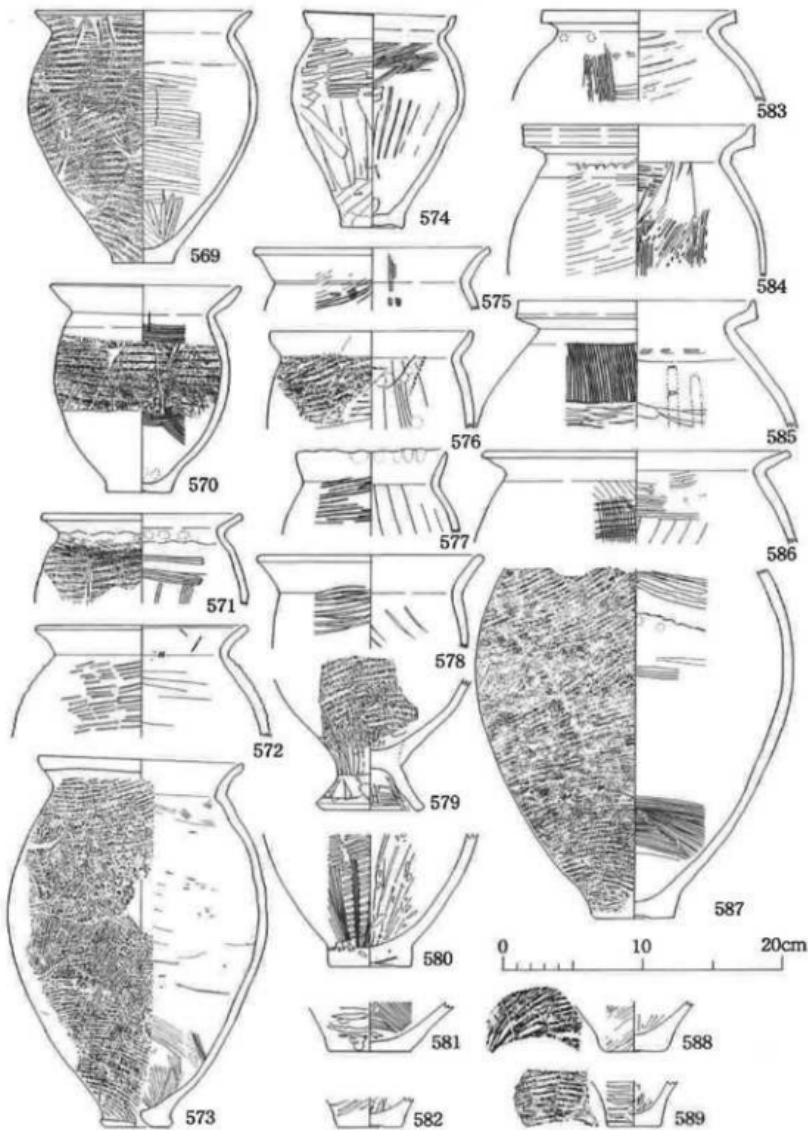
第33図 第6層内出土 弥生時代中期～後期土器実測図-1



第34図 第6層出土 弥生時代中期～後期土器実測図-2



第35図 第6層内出土 弥生時代中期～後期土器実測図-3

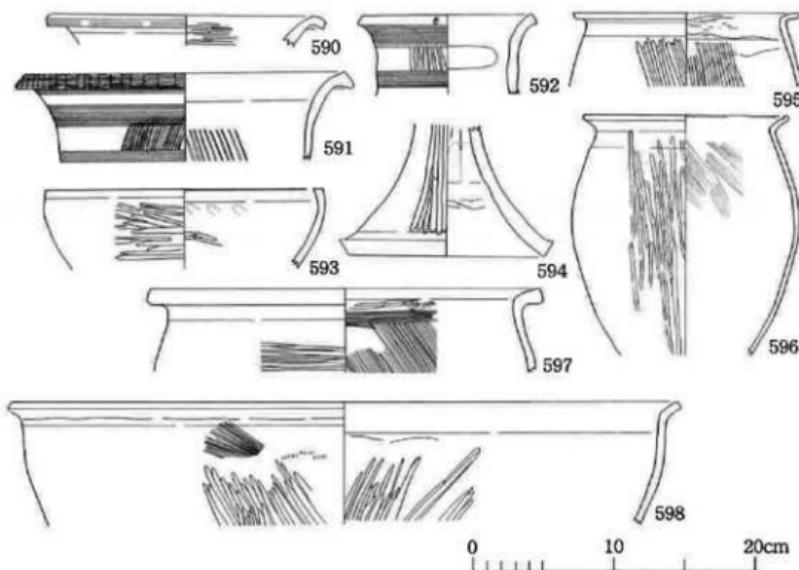


第36図 第6層内出土 弥生時代後期土器実測図-2

の口縁部は叩き出し手法で造り出されている。574の外面の上位には叩き目板の溝幅が広いもので叩かれており、下部は板なで仕上げられている。584は口縁端部に擬凹線文が施され、体部は浅い溝の叩き目で調整されている。570の体部は粗い叩き目が横方向にみられる。575～578は細い叩き目が口縁部まで施されている。577は肩部からの叩き出し手法で口縁部が造りだされているが口縁端部は波状を呈している。573・574・580・584・585の内面には削り痕がみられる。579は「ハ」の字形の脚部がついている。

第5層内出土土器(590～598)：中期の土器

土器の出土量は少ない。壺A590は口縁端部が下方へ屈曲している。壺A591の口縁端部は断面三角形を呈しており、口縁部に1単位の横幅が広い熊状文、頸部に直線文が施されている。壺B592は直立する頸部から口縁部がわずかに開いて口が造られている。頸部に直線文がみられる。これらの土器の形態、文様は古い属性で、中期前半の時期のものである。鉢A593、大型の鉢Cはともに文様が施されずにヘラ磨き調整で仕上げられている。脚部594は柱状部から裾部までなだらかに開くもので端部はほぼそのまま納められている。甕595・597は口縁部が水平近くまで外反している。甕596は口縁部が「く」の字形に外反しており、口縁端部にわずかな立ち上がりがみられる。いずれも外面はヘラ磨き調整で仕上げられている。

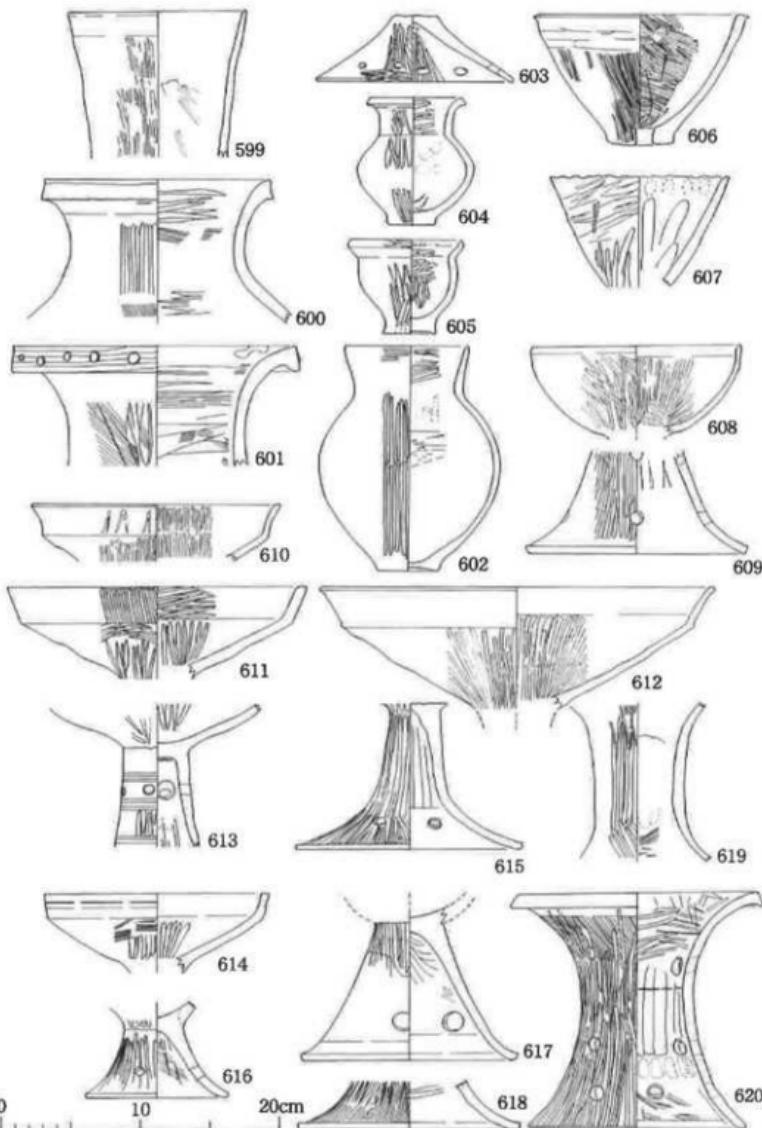


第37図 第5層内出土 幼生時代中期土器実測図

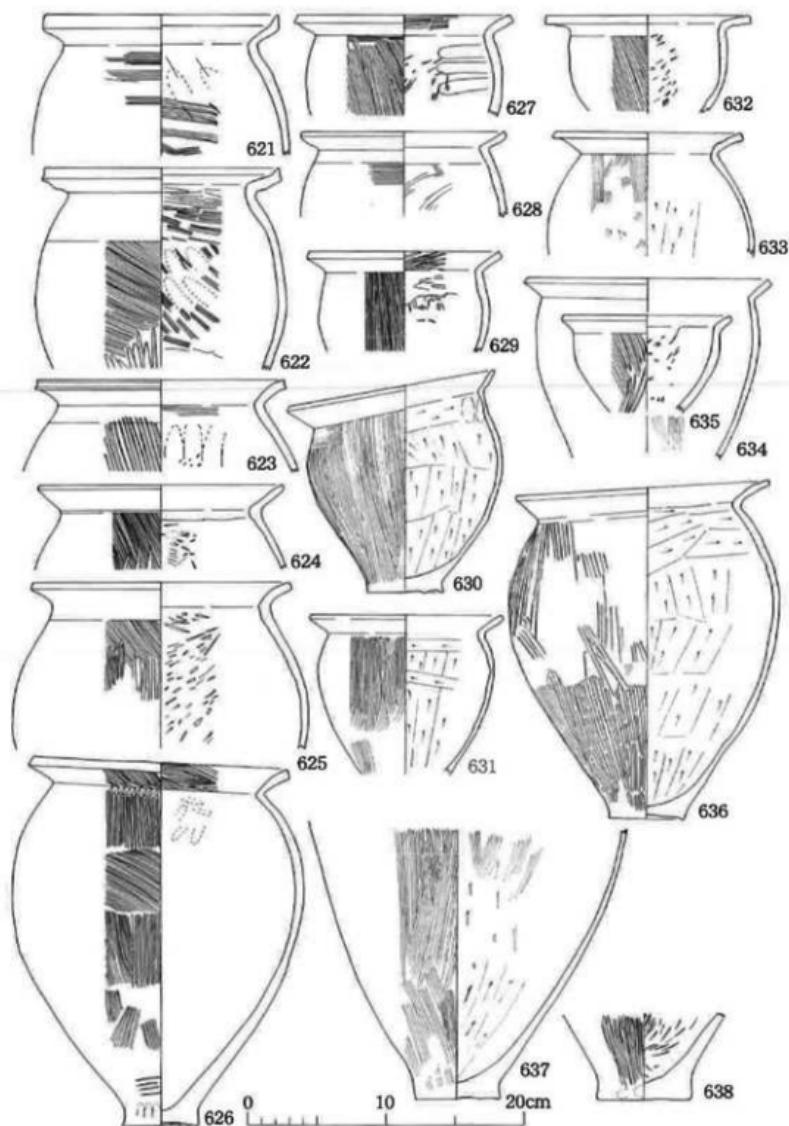
第5層内出土土器(599～652)：後期の土器

後期の土器が多量に出土しているが、そのなかでも甕の点数が多い。

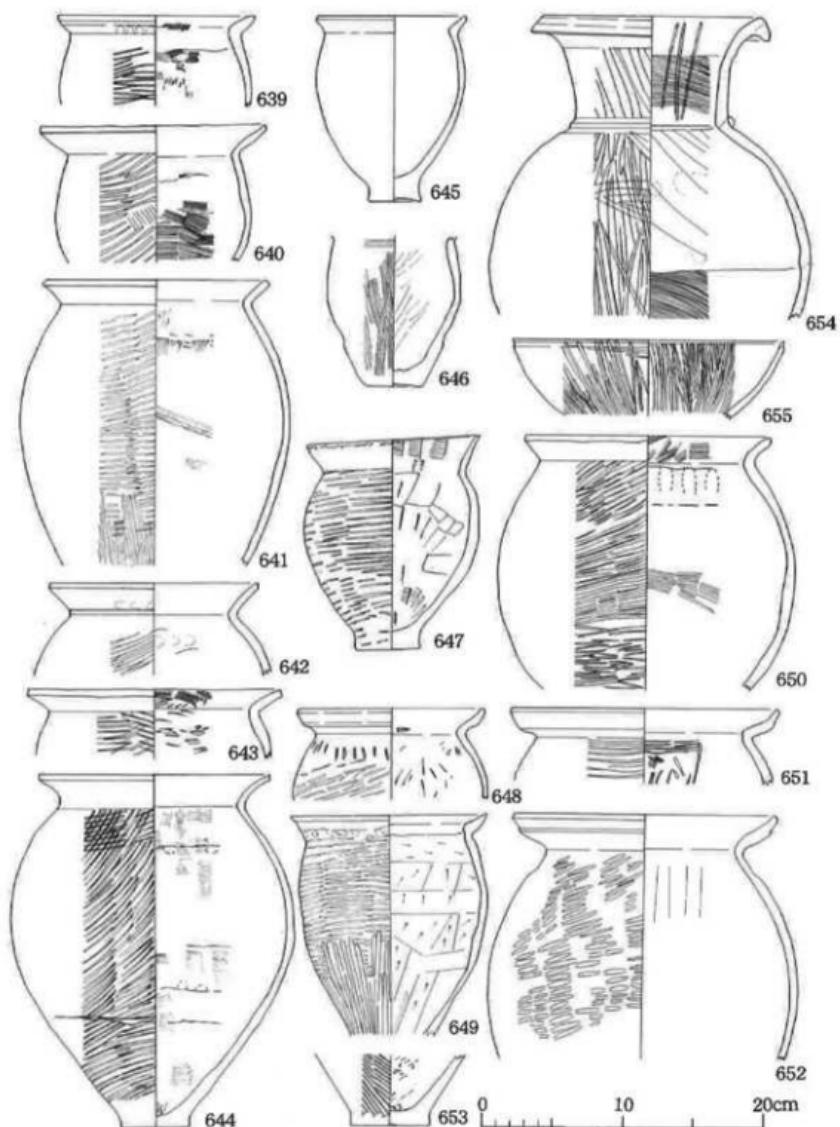
壺には長頸壺599、短頸壺602、壺A601、壺C600、ミニチュア壺604などがある。長頸壺



第38図 第5層内出土 弥生時代後期土器実測図-1



第39図 第5層内出土 弥生時代後期土器実測図-2



第40図 第5層内出土 弥生時代後期土器実測図-2 (654・655は第4層内出土)

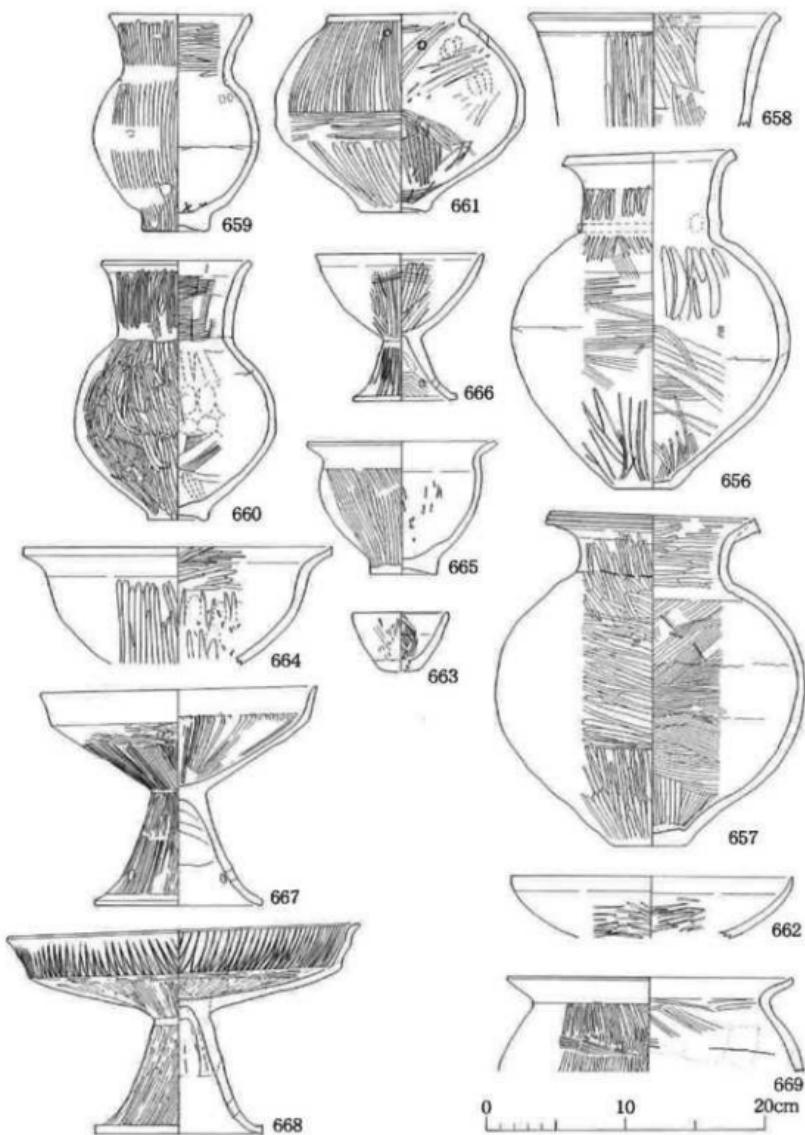
599・短頸壺602の器壁は薄く造られているが、他の壺は厚っぽい器壁である。壺601は口縁端部が断面三角形に造られており、擬凹線文が施された口縁端面に円形浮文が貼り付けられている。壺601の胴部はミニチュア壺604と同形のもので、壺600の胴部はかなり大きく張り出すものと考えられる。ミニチュアの鉢605は口縁端部がやや受け口状になる。604とともに内外面はヘラ磨きで仕上げられている。鉢606は逆台形の体部に口縁端部が外傾する面が造られている。器壁の厚い底部に焼成前の穿孔がみられる。鉢Aは口縁部が波状を呈しており、調整も粗く仕上げられている。鉢A608は半円球の形をしており、器壁が薄い体部に全面がヘラ磨き調整で仕上げられている。腰部に棱が造られている高杯Bの杯部610・612・613のなかで614は短く立ち上がる口縁部に擬凹線文が施されており、中期後半の時期のものである。611は斜め上方に立ち上がる口縁部の外面に縱方向の密なヘラ磨きがみられる。610・612は口縁部がわずかに外湾している。脚部には裾部まで徐々に開いている616-618、柱状下部で屈曲して大きく拡がる609・615があり、いずれも円孔が穿たれている。杯部・脚部ともヘラ磨き調整で仕上げられている。器台619には円孔が3段巡り、ハケ目とヘラ磨き調整で仕上げられている。壺は大きく外面の調整で次の2つに分けられる。

- a ハケ目と磨きが主体で仕上げられているもの-621~638・646、
- b 叩き目が主体で仕上げられているもの-639~644・647~652。

内面の調整にはハケ目と指オサエ、粗い削り痕がみられる。口縁部、体部は第6層内出土の壺で分類した形態と同じものがみられる。壺aは体部が球形にちかいものが多く、壺bは丈高に造られている。壺a626、636は肩部が強く張り出しており、胴部は丈高のものである。626の底部には叩き目、底面にはヘラ削りがみられる。621は受け口風の口縁部で体部には横方向のハケ目がみられる。壺bの叩き目の方向は平行か、右上がりに叩かれており、641・649のように下半部にヘラ磨きが施されているものがある。648・651・652の口縁部は受け口風に造られている。648の肩部にはヘラ刻み目文が施されている。649の口縁部は受け口風に造られていた部分の上部が剥離したものと考えられる。

第4層内出土土器(659~669)：後期土器

4層内からの土器の出土量は少ないが、各器種にみられる共通の属性などから一括性の高い後期の一時期のものと考えられる。一括性の高い土器として壺654・656・657、長・短頸壺658~660、無頸壺661、鉢A655、鉢B664・665、高杯A662・666、高杯B667・668、壺a669・ミニチュア鉢663が上げられる。壺類の胴部は球形に近い形に造られている。壺654・656は球形に近い胴部と頸部の境界に断面三角形の貼り付け凸帯がみられる。壺657の頸部は短く立ち上がっており、口縁端面に凹線文が施されている。長・短頸壺の口縁端部は丸い659と、面が造られている658・660がある。無頸壺661は口縁部が段状に造られている。656・657・661の体部は上部と下部が縱方向に、その間の部位は横方向にヘラ磨きが施されている。659・660・661の底面にはヘラ削りがみられ、上げ底風に造られている。鉢A655は口縁部が強くナデられ、器壁が薄く仕上げられている。脚部がつくかもしれない。鉢B664・665の外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りで調整されており、665は底部が上げ底風に造られている。浅い体部の高杯A662は横方向にヘラ磨き、碗型の体部に脚部がつけられた666は外面全体を縱方向にヘラ磨き調整が施されている。高杯B667は深い体部に口縁部が斜めに立ち上げられたものである。668は浅い体部から口縁部がわずかに外湾しており、内外面に暗文風にジグザグのヘラ磨きが施されている。666~668の脚部は柱状部から裾部までなだらかに広がっており、円孔が穿たれている。壺669は肩部でつよく張り出すものと思われる。ハケ目を主



第4図 第4層内出土 弥生時代後期土器実測図

体にした調整が施されている。

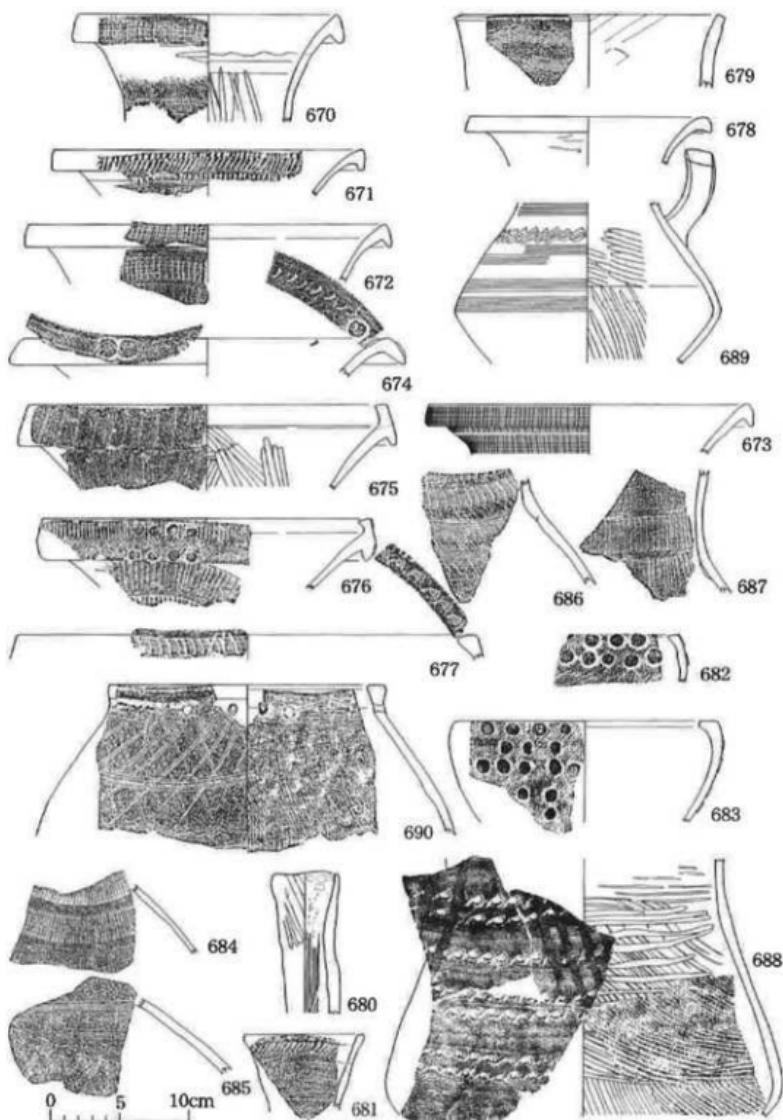
第3層内出土土器(670~712)：中期土器

壺A670~674、685~686、688、受け口壺677の櫛描き施文具には短いものが使われており、頸胴部684・687・受け口壺676には長い施文具が使われ、施文の一単位の幅が狭いピッチで施されている。受け口壺A675は半截竹管で縦位の直線文が施されている。壺677の口縁部の外面には焼成後に「矢」印形の記号文が付けられている。直口壺679は頸部に波状文が施されている。細頸壺は3形態に分けられる。頸部が長い小型の680と、口縁部が逆三角形を呈している681、口縁部が内湾して造られている682・683がある。水差型土器689は生駒西麓産の胎土ではない。鉢Aは碗型の691・692・694と逆「ハ」の字形を呈している693がある。鉢Bは口縁端部が断面三角形になる697と、矩形になる696、段状口縁に造られている698がある。699と698は文様の列点文が極似しており同一個体になると思われる。699の簾状文は697に比べると一単位の幅が狭いピッチで施されている。鉢C695は粗いハケ目調整で仕上げられている。高杯A700は口縁部に5条の凹線文が施されている。脚部701はかなり大型のもので竹管文がみられる。脚部の裾部731はヘラ磨きで仕上げられている。甕の口縁部は「く」の字型に外反する形態のものが多くみられる。705は内面に短く立つ頸部が造られており、706は口縁部がゆるやかに外反している。調整はヘラ磨きで仕上げられた702と、ヘラ磨きとヘラ削りが併用される703・704、ハケ目で仕上げられている706~709がある。702の器壁はかなり厚手で短い口縁部が外反している。707の胴部外面には横方向のハケ目調整がみられ、704・709は口縁端面に刻み目文が施されている。711の底面にははっきりした木葉文が残されている。器台729は胴部の凹線文の間に細かく刻み目文が施されている。

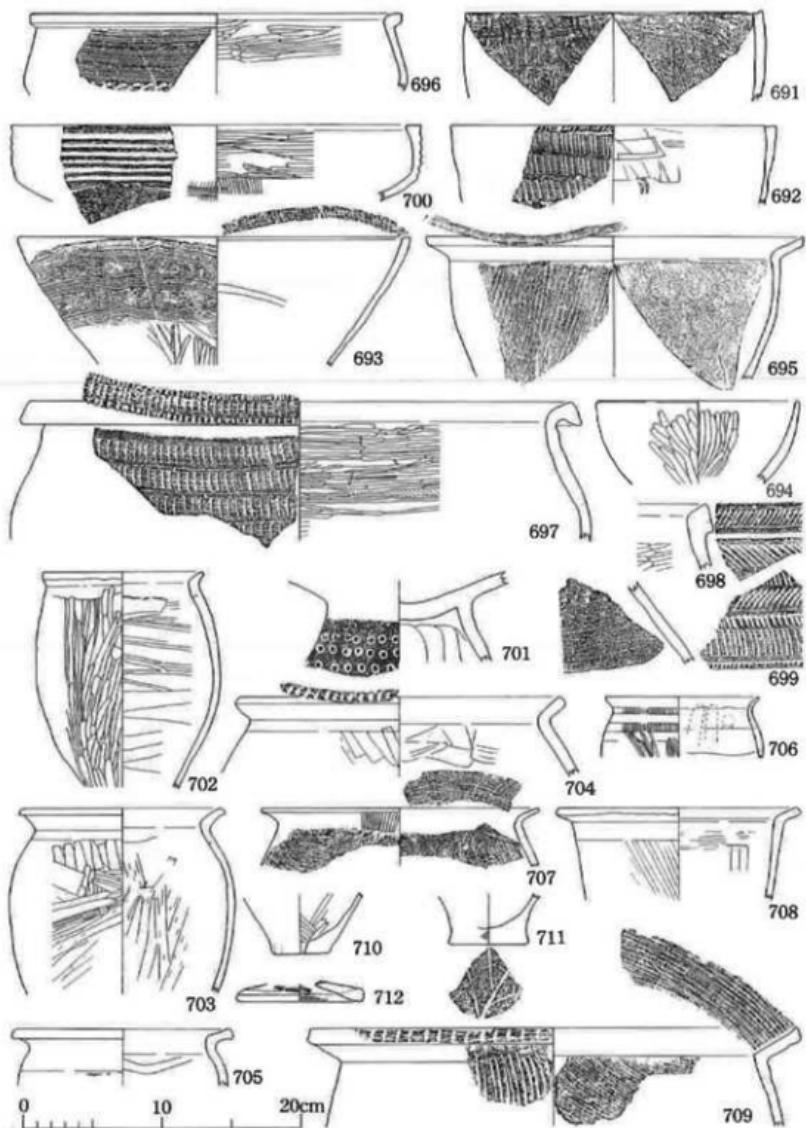
第3層内出土土器(713~766)：後期の土器

中期の壺Aの形態の系統を引くと考えられる壺A713・716・718・719・727、同じく壺B714・720などには両方とも口縁端面のみに文様が施されている。文様は円形浮文、竹管文が押捺された円形浮文、半截竹管文やヘラによる圧痕文、櫛描き波状文、ヘラ描き沈線文、凹線文、口縁部内面に竹管文、櫛描き円弧文、波状文などがみられる。なかでも竹管文が施されたものには赤色顔料が彩色されている。彩色は器台にも多くみられ、文様が施されていない壺A722にもみられる(図版1)。壺716は今回の調査地から北東へ30~40m離れた地点から同一個体とおもわれるものが出土している(西ノ辻遺第20次調査で、自然河川弥生時代中期後半~後期前半の包含層から出土したと報告されている。p 114-314¹⁷)。

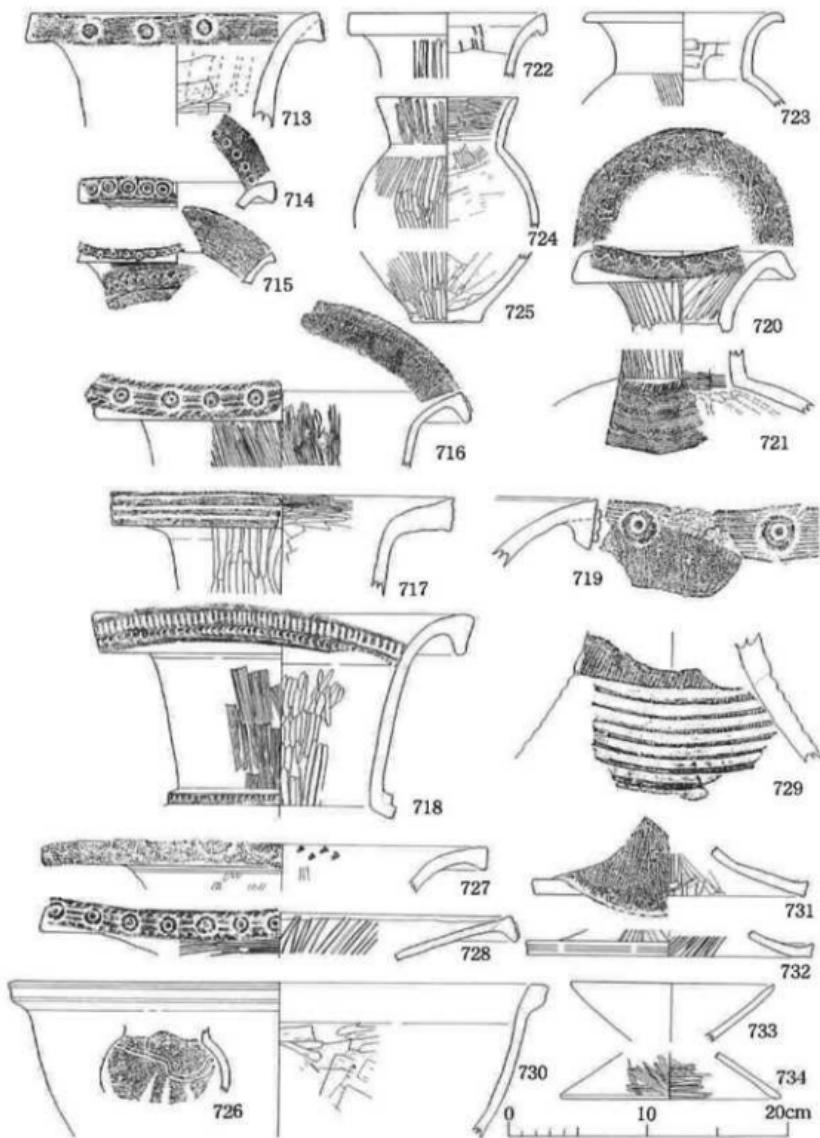
壺715は二重口縁壺になると考えられる。壺B714とともに口縁部内外面に赤色顔料がみられる。壺717は口縁端部が厚く造られ、そのまま納められており、口縁端面には凹線文が施されている。721は胴部から屈曲して頸部が立ち上がるもので胴部の刻み目文に赤色顔料が残っている。その他に短い頸部が直立する壺D723、短頸壺724・小型壺726などがある。726の胴部にはヘラ描きの絵画(蛇?)か記号文がみられる。器台728は器壁が非常に薄く造られており、壺Aの施文法に似ている。裾部732は器台728と同一個体になるかもしれない。鉢Aは体部が碗形をしている735、逆「ハ」の字形をしているもの733・736・737、縱長の形をした738に分けられる。738は叩き目で仕上げられている。鉢B739~742の調整はさまざままで、742は体部から口縁部まで叩き出し手法で造られている。739は底面に焼成前の穿孔がみられる。743・744は口縁部が受け口状になっており、外面がヘラ磨きで仕上げられている。大型の鉢B730には段状口縁部がついており、内面にはヘラ削りがみられる。高杯B745~749は腰に稜が造られているものだが、体部の形態は少しずつ異なる。745は外湾しながら直立し



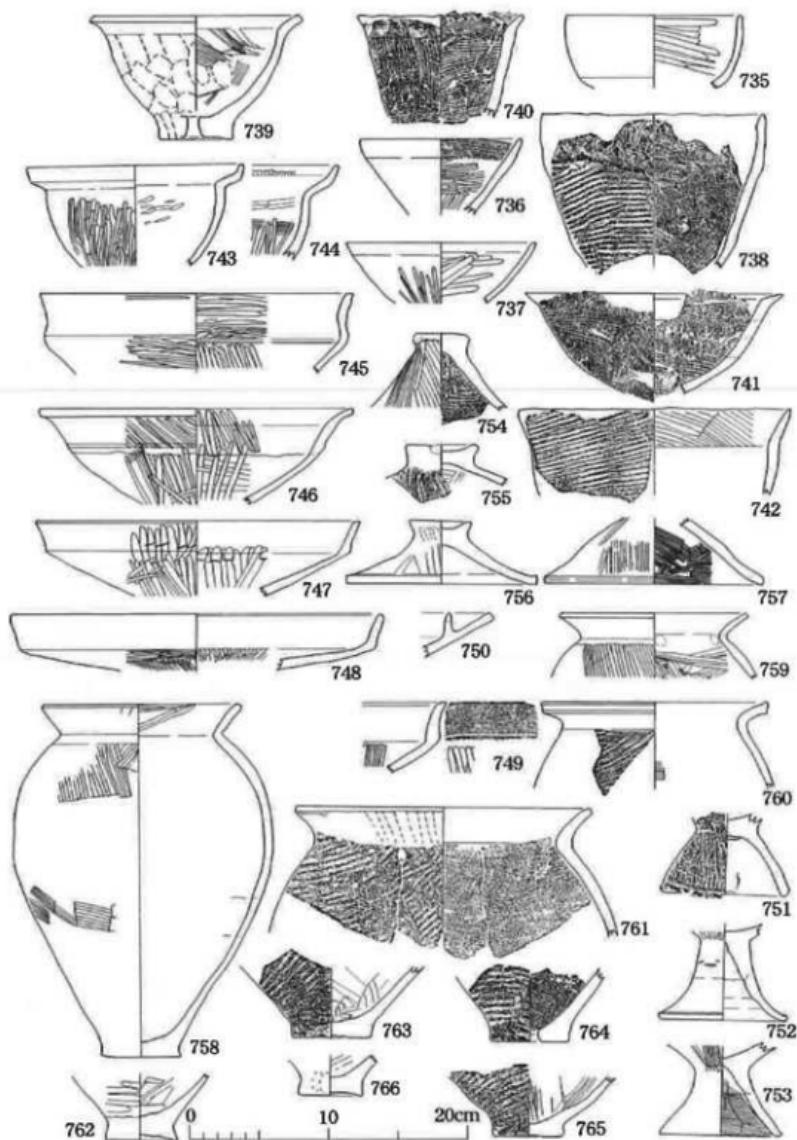
第42図 第3層内出土 弥生時代中期土器実測図-1



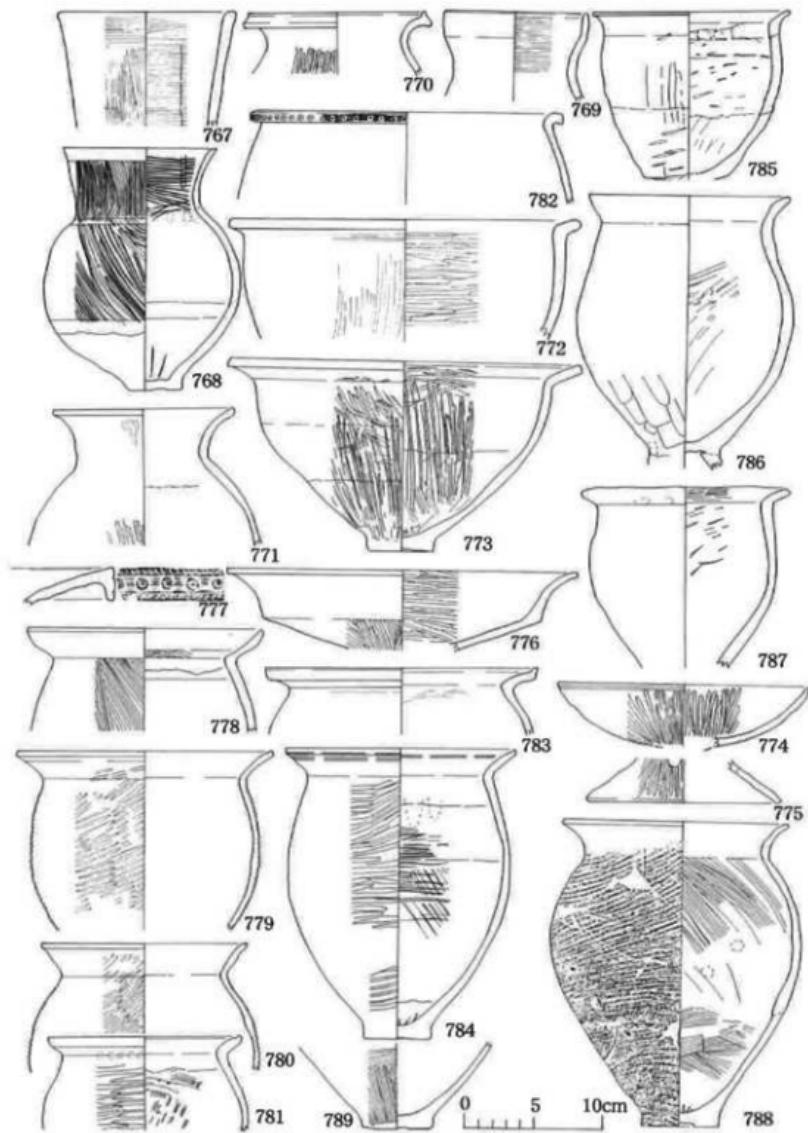
第43区 第3層内出土 青生時代中期土器実測図-2



第44図 第3層内出土 弥生時代後期土器実測図-1



第45図 第3層内出土
弥生時代後期土器実測図-2



第46図 第2層内出土 猿生時代後期土器実測図

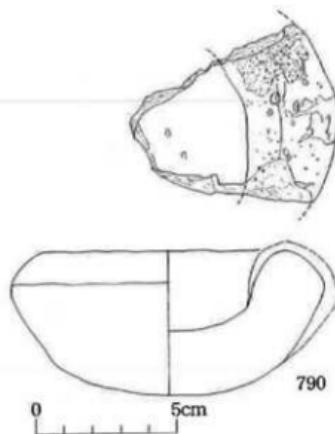
てたちあがるもの、746の口縁部はゆるやかに外湾しながら斜め上方に大きくひらくもの、747～749は口縁部がわずかに外傾して立ち上がるるものである。749は口縁部に櫛描き同心円の半円形文が施されているもので、同一個体と考えられるものが北西50m離れている地点から出土している（西ノ辻遺跡第23次調査¹⁾）。高杯750は斜めに開いている杯部内に高さ2cmの突帯が一周巡らされている。類例には藤原西辺地区の後期の土器²⁾にみられ、中実の柱状部に「ハ」の字形に開いている脚部がついている。脚部751は小型で「ハ」の字形に開いており、752・753は外湾しながら開いている。甕758・759・761は胴部の上部で、760はなかごろでそれぞれ張り出している。758はハケ目、759はヘラ磨き、760・761は叩き目の調整が施されている。甕の底部753～765は底部の下端部まで叩き目がみられる。蓋754は天井部のみ残存しているが丈高になると思われる。755・756は天井部につまみをもち、上げ底風に造られている。757は内清気味に口縁部まで開いている。

第2層内出土土器(767～788)：中期～後期の土器

土器の出土量は少ないが後期の土器と埴堀と考えられるものが共伴して出土している。中期の土器が一部混入している。壺C770は口縁端部の上方に立ち上がりが造られている。鉢B782は口縁部の全周に竹管文が押捺されている。鉢B772は器壁が厚っぽく造られている。

長頸壺767は口縁端部が丸く納められており、器壁の薄い短頸壺768は口縁端部が尖り気味に造られている。壺769は受け口状に造られた口縁部で短頸壺に近い形になるとされる。壺C771は器壁が薄く造られている。鉢773の外面は削りの上からヘラ磨きで仕上げられている。高杯A774、脚部775は全面が丁寧なヘラ磨きで仕上げられている。高杯B776は底部から鋭い稜が造られて大きく外湾しながら開いている。器台777は口縁部に刻み目文、凹線文、貼り付け文で飾られている。甕は第2・6層内で出土しているものと同じ形態のものが多いなかで、少し異質なものがみられる。785は幅広の底面がヘラ削りされており、体部は肩部がすばまらないで短い口縁部が付けられている。体部上面には煤が付着しているため調整は不鮮明になり下部に叩き目がみられる。786の体部は下膨れで口縁部が緩く外湾するように造られている。底部は上げ底風になるか脚部がついていたかもしれない。787は肩部がすばまらないで直立気味になっており、口縁部が外反している。これら三点の内面にはヘラ削りがみられる。785・786には煤の付着が著しい。

埴堀 粘土製で半球形状の埴堀あるいは「とりべ」790と考えられるものが出土した。弥生時代の資料として貴重なものであるが、出土状況が不明で、遺物洗浄の際に判明した。奈良国立文化財研究所の村上氏に分析を依頼したところ、洗いすぎたため情報が消失しており、断定はできないが、青銅の鋳造に使用された可能性が高いとの結果を得た（分析結果は95頁）。埴堀（とりべ）は全体の1/8が残存している。復原口径値は8.6cm、深さ5.1cm前後を測る。口縁部は丸く造られ全体的に平滑に仕上げられている。口縁部内面から外面にかけては暗赤色～黒緑色に変色して小さい発砲の凹凸がみられる。内面の中央部にも黒色を呈したカラミ



第46図 第2層内出土
弥生時代後期土製埴堀実測図

が付着し、発砲の凹凸が残っている。

第1層内出土土器(791~815)：中期の土器

壺A791は頸部から口縁部が水平に広がり、端部はそのまま納められている。下端部に刻み目文、頸部に直線文が施された中期前半の時期に属するものである。壺A792~794の口縁端部の形態がそれぞれ異なる。792は口縁端部がほぼ真下に、793は斜め下方に鋭角に肥厚し、端部は尖り気味に造られている。794は頸部から口縁部が外湾気味に開き、端部は厚手で矩形に造られている。これらの壺の腹状文の施文具はやや長めのものが使われている。受け口壺795は口縁部の形態が角ばっている。細頸壺797は口縁部に擬凹線文を3条、波状文、直線文が施されているもので胎土はc類に属する。無頸壺A799は口縁端部が尖り気味に造られている。無頸壺B800・801は口縁上端面にヘラ刻み目文が施されている。無頸壺用蓋798は小振りで厚手に造られている。796は水差し型土器になると考えられる。鉢C802は器壁が薄く小振りのものである。壺は大和型に属する805~810・812・814と河内型に属する811・813がある。

第1層内出土土器(816~835)：後期の土器

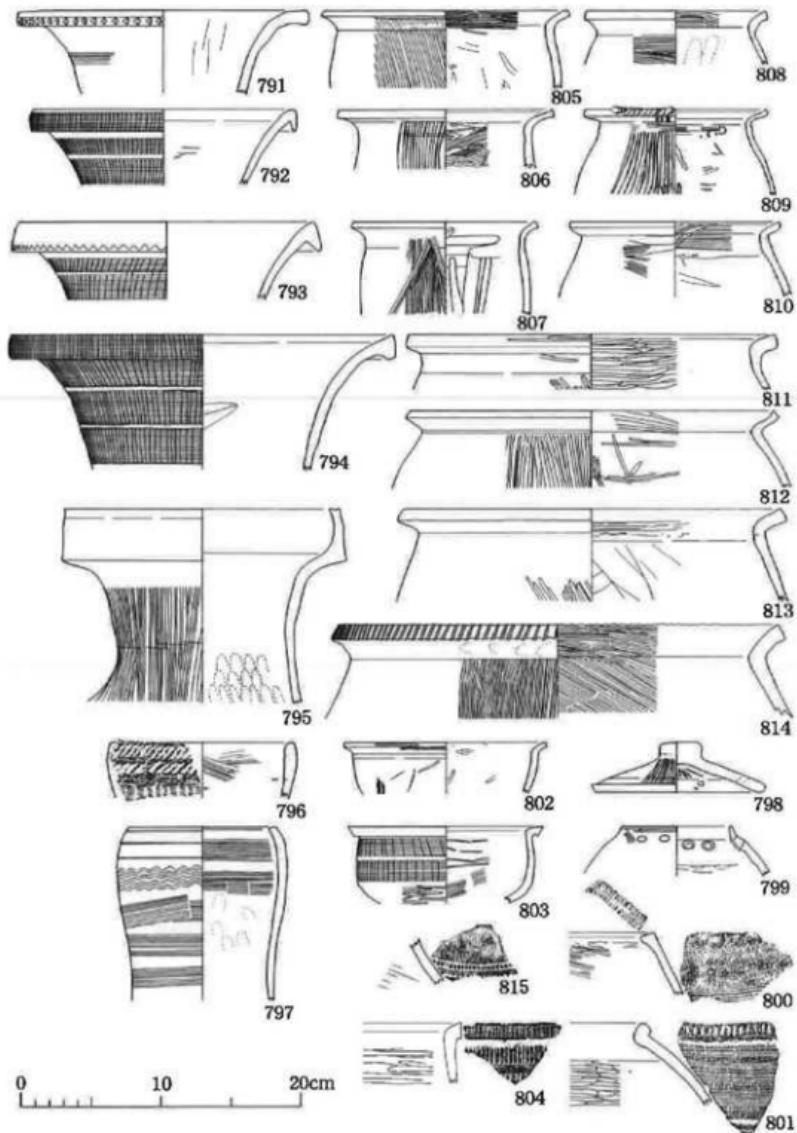
壺A816は口縁端部が丸みを帯び、817は尖り気味のものである。壺D818は頸部下に断面四角形の貼り付け凸帯にヘラ刻み目文が施されている。外面はヘラ磨きで仕上げられている。器台821~823は口縁端面に円線文と円形浮文、列点文、ヘラ刻み目文などが施されている。823は内外面に赤色顔料がみられる。820は壺の口縁部になるかもしれない。鉢A824は全体が逆台形に、825は底部が外方に広がり、828・829とともに脚部風に造られている。826は形がいびつで、底部に焼成前の穿孔がみられる。高杯830の口縁部は横方向に、体部は縱方向にヘラ磨きで調整されている。壺832・834はハケ目調整、壺831は叩き目調整がそれぞれ施されている。

新しい時期に属する壺819、壺833、小型壺835が出土している。

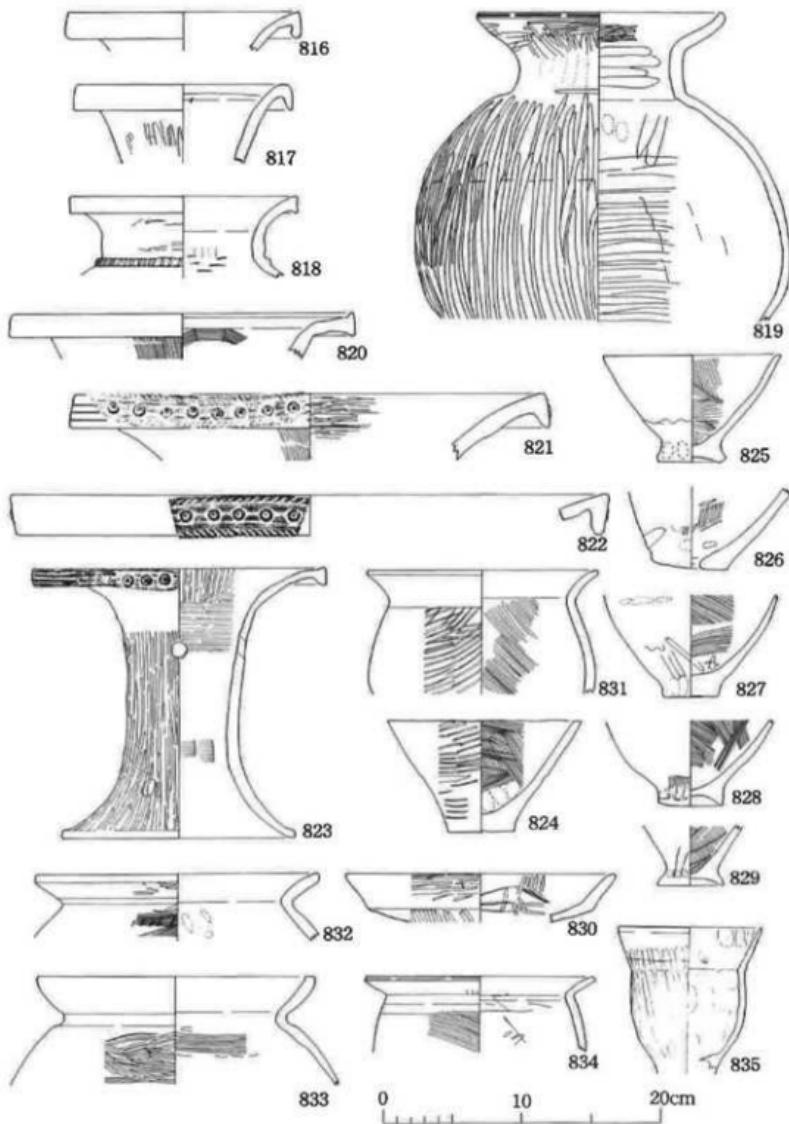
壺819は球形に近い胴部から短い頸部が立ち、口縁部がやや内湾気味に開くが上端部は剥離しているのかもしれない。壺833は口縁部が内湾気味に外反している。外面には横方向のハケ目調整がみられる。小型壺835は全面がヘラ磨き調整で仕上げられている。

なお谷流路の上層から多量に出土した中期の土器836~902、後期の土器903~937など良好な資料を挿図50~54(60~64頁)に掲載している。

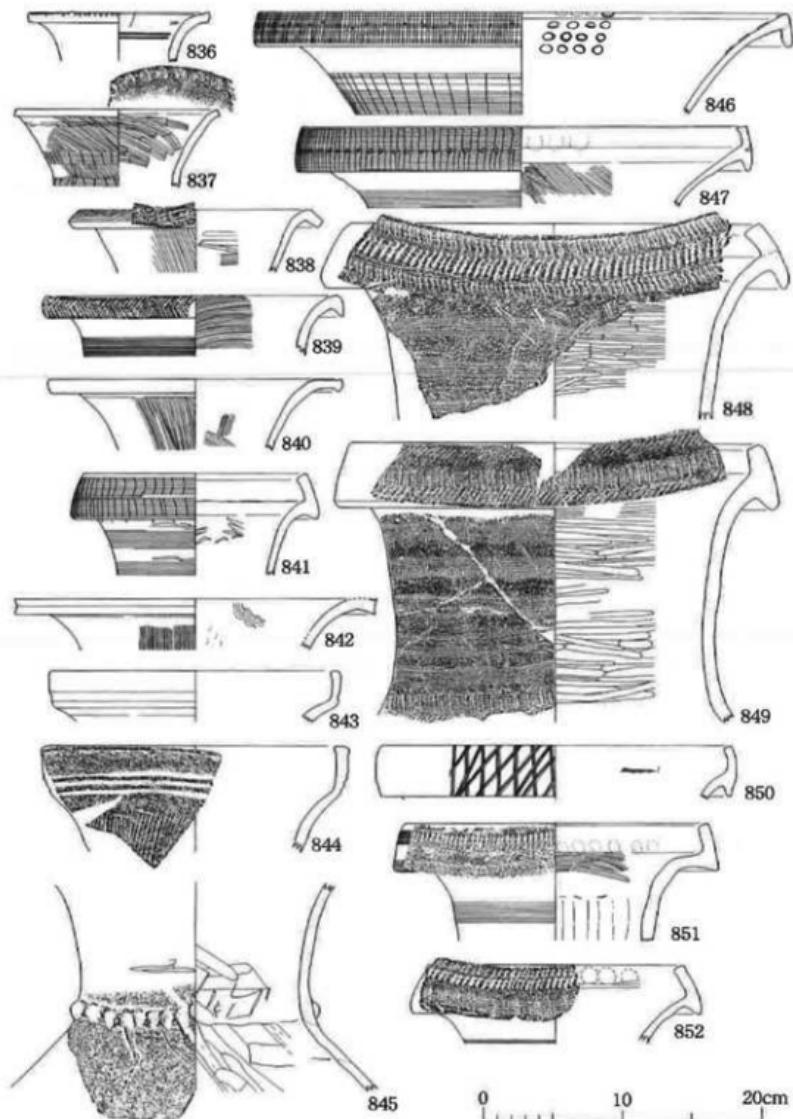
後期の短頸壺904には頸部下に円形浮文、905の胴部には二本の線による記号文、長頸壺908の口縁部と胴部の二カ所にはジグザグ線がヘラで描かれている。このジグザグ線は蛇を表現していると考えている。



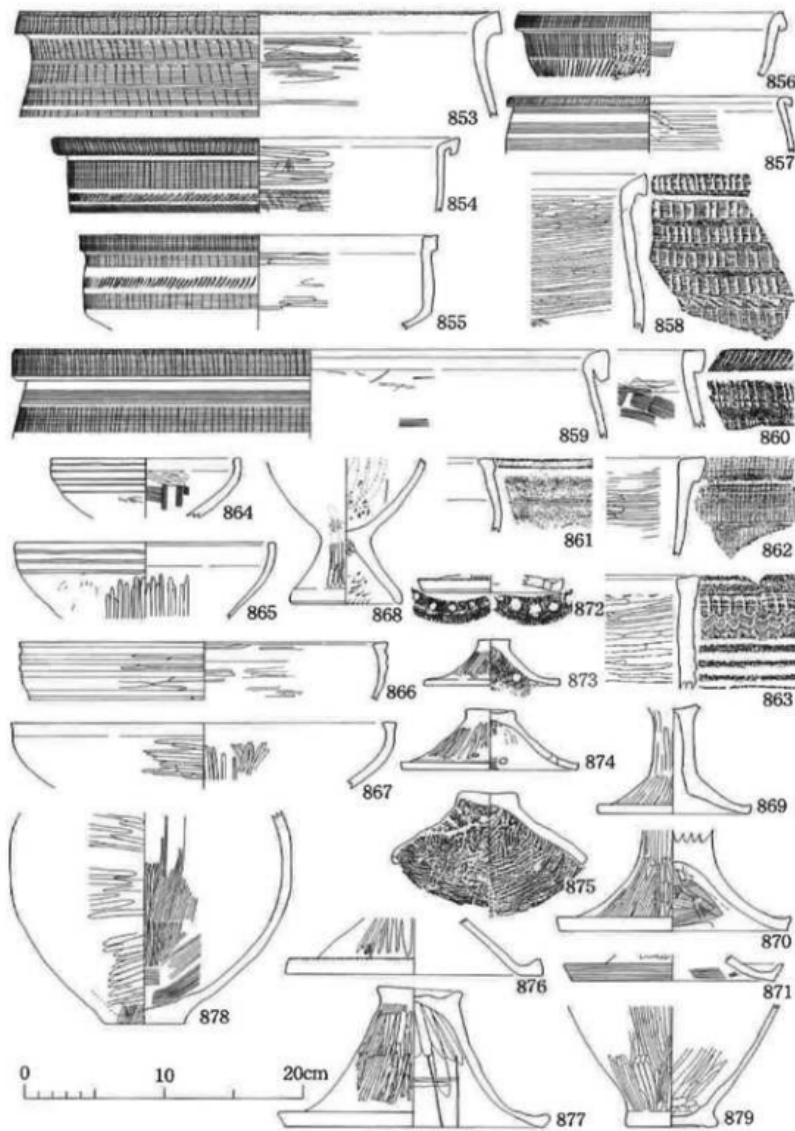
第48図 第1層内出土 青生時代中期土器実測図



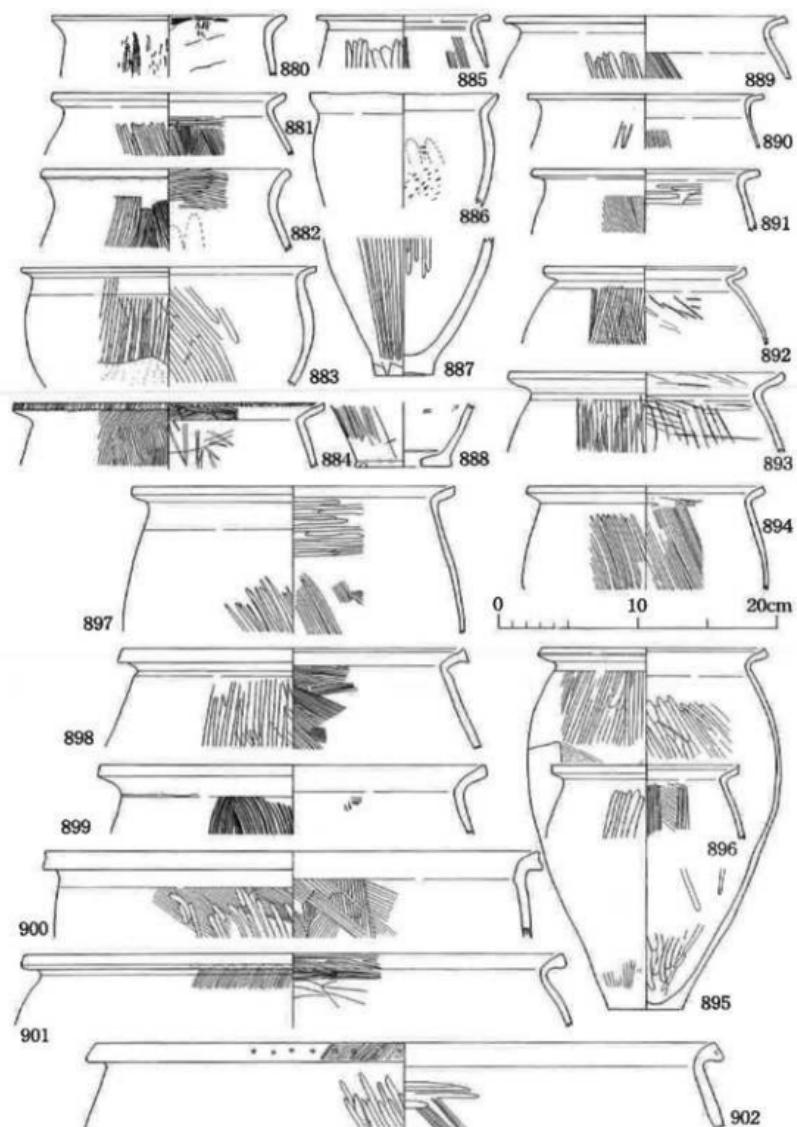
第49図 第1層内出土 弦生時代後期土器実測図



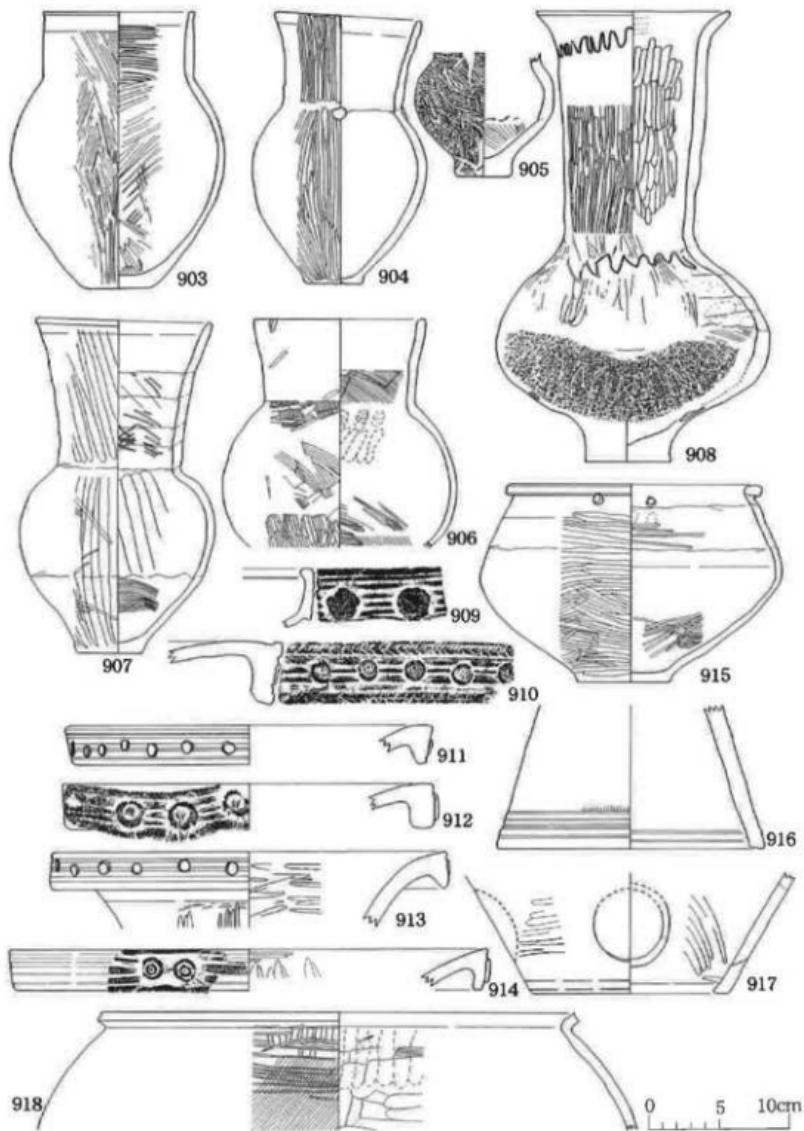
第50図 上層内出土 弥生時代中期土器実測図-1



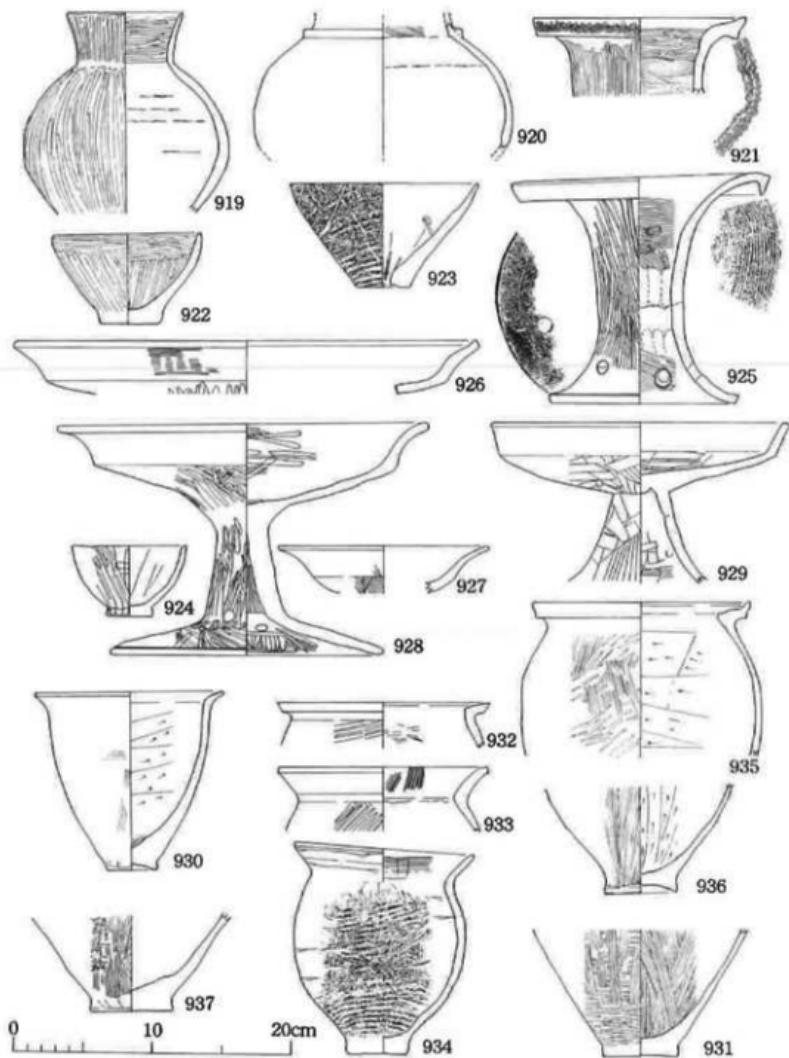
第51図 上層内出土 弥生時代中期土器実測図-2



第52図 上層内出土 弥生時代中期土器実測図-3



第53回 上層内出土 弥生時代後期土器実測図-1



第54図 上層内出土 弥生時代後期土器実測図-2

3.2.2) 石器

石器はおもに埋没谷(溝3)内から弥生時代の土器と共に出土している。石器には打製石器(石鎚・石錐・石剣・石匕・不定形石器)、磨製石器(石包丁・扁平片刃石斧)と砥石、紡錘車などが認められる。それぞれの石器の法量、重量、石材などは表2に示している。打製石器はサヌカイト製である。磨製石器の石材鑑定は自然史博物館の川端氏に依頼した。

今回の調査で出土した石器は石包丁7点、磨製石剣を転用した石包丁1点、石鎚4点、石錐5点、扁平片刃石斧1点、打製石剣2点、石匕1点、不定形石器32点、砥石2点、紡錘車1点の他にサヌカイト片が66点である。

埋没谷(溝3)内出土石器

磨製石器

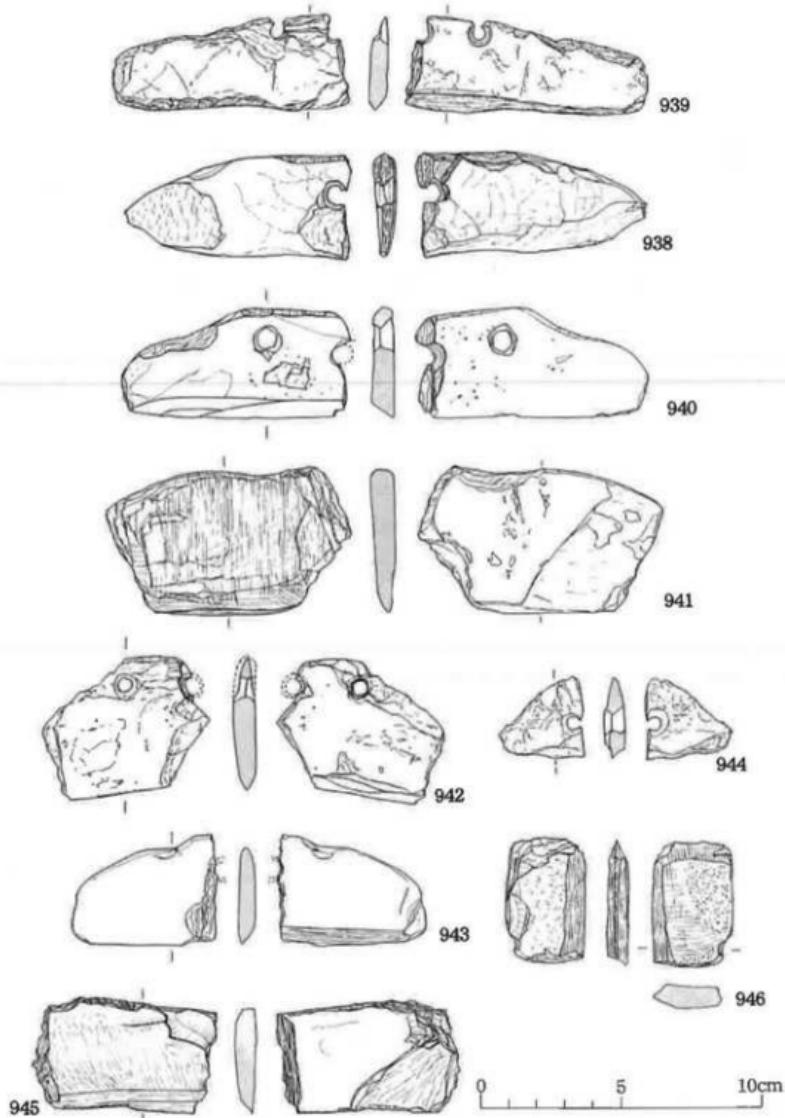
石包丁938～945 完成品は無くすべて破損している。938～941・943は半月形直刃形態、942は半月形内湾刃形態のもので、小片の944は形態が不明である。939は約半分欠損している。刃部側の紐孔のすぐ横の部位に穿ちかけの研磨痕が認められる。背部と刃部には主軸に直交する使用痕が認められる。938は約半分欠損している。背部と刃部の磨耗が著しい940は約半分欠損している。紐孔の近くには敲打痕が認められる。背部には主軸と直交する使用痕跡が認められる。941は約半分欠損している。残存部には紐孔が認められない。かなり大型のものと考えられる。背部はかなり磨滅しているが主軸と直交する使用痕跡が認められる。942は約2/3欠損している。紐孔の周辺の磨滅が著しく、背部に主軸と直交する使用痕が認められる。943は約2/3欠損している。背部の一帯に窪みがあり使用痕と考えられる。944は紐孔の周辺のみが残存するもので、表面は剥離している。945は磨製石剣が転用されているもので約2/3欠損している。刃部と背部には主軸に直交する使用痕が認められる。

扁平片刃石斧946は石包丁が転用されているものである。石斧の側辺に石包丁の刃部が使われ、二辺が研磨されて新たに石斧の刃部が磨き出されている。石包丁の紐孔が約1/4周ぐらい残存しており、その周辺には敲打痕が認められる。

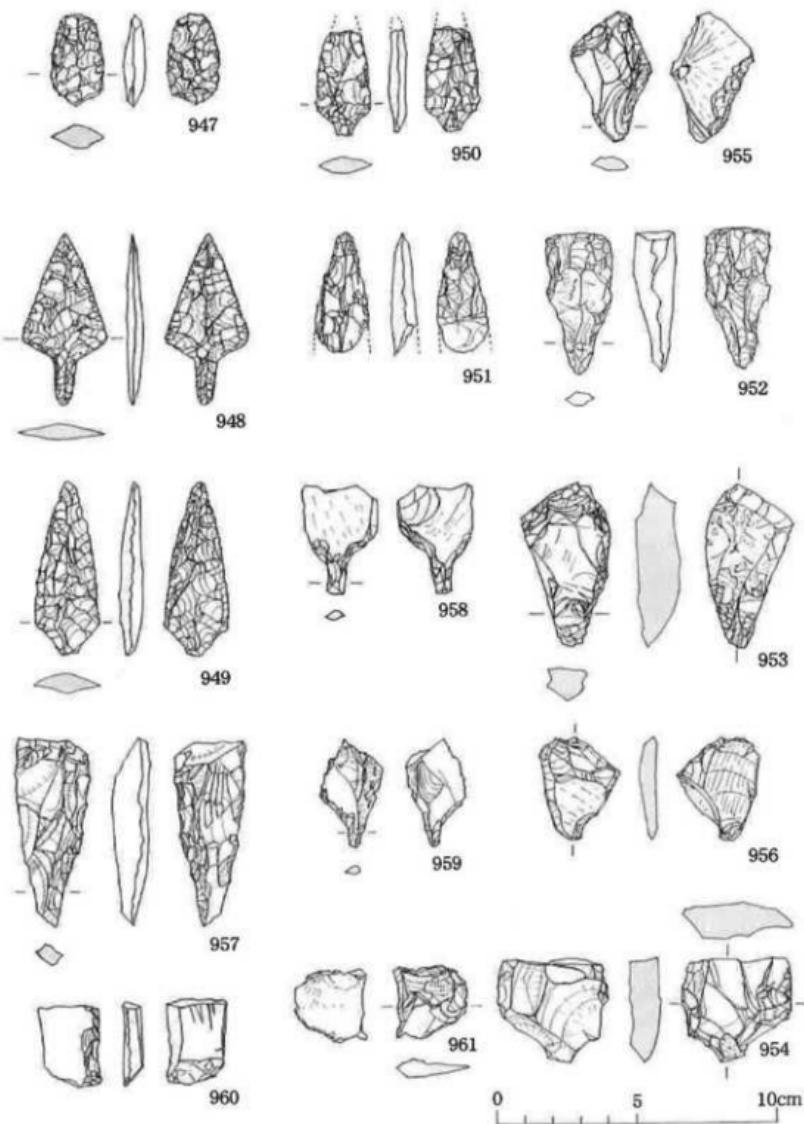
打製石器

石鎚947～951 947は先端部が欠けているが、肉厚の円基無茎式石鎚、948～950は凸基有茎式石鎚である。951は基端部が折損している。身幅が厚く尖頭器類にはいるかもしれない。948は均整のとれた形を呈している。中央部に大剥離面が残されており、鋸歯状に細部調整が加えられている。基端部は丸みを呈している。949の身部は肉厚に造られている。

石錐952～959 952・953・955は身部に大剥離面が残されており、頭部と錐部の境界がはっきりしない。952の背面の右側面に潰れとステップ状の剥離痕が見られる。953は背面に自然面が残されており、頭部先端に打撃痕が認められるが、斜め右下に向かって剥離痕、腹面には白い傷とステップ状の剥離痕が認められる。錐部の背面の左側には潰れとステップ状の剥離痕が認められる。右側面は割れている。953は背面の右側面が潰れて白色を呈しており、先端部にも白い傷と刃こぼれが認められる。955は主剥離面が残され、打面の対辺部には細部調整が施されている。956は頭部の先端部に打撃痕を受けて錐部の先端部に白色を呈する使用痕が認められる。954・958・959は頭部と錐部の境界が鮮明である。954は錐部が欠けている。背面頭部の下位に自然面が残り、大剥離面はステップ状を呈している。958は背面の右側に自然面が残されており、左側は大剥離面と周縁部に細部調整が施されている。錐部には白い傷と潰れが認められる。錐部先端部は折れている。959は頭部に大剥離面が残されており、頭部側から錐部にかけての周縁部に細部調整が施されている。白い傷の使用痕



第55図 弥生時代磨製石器実測図



第56図 新生時代打製石器実測図-1

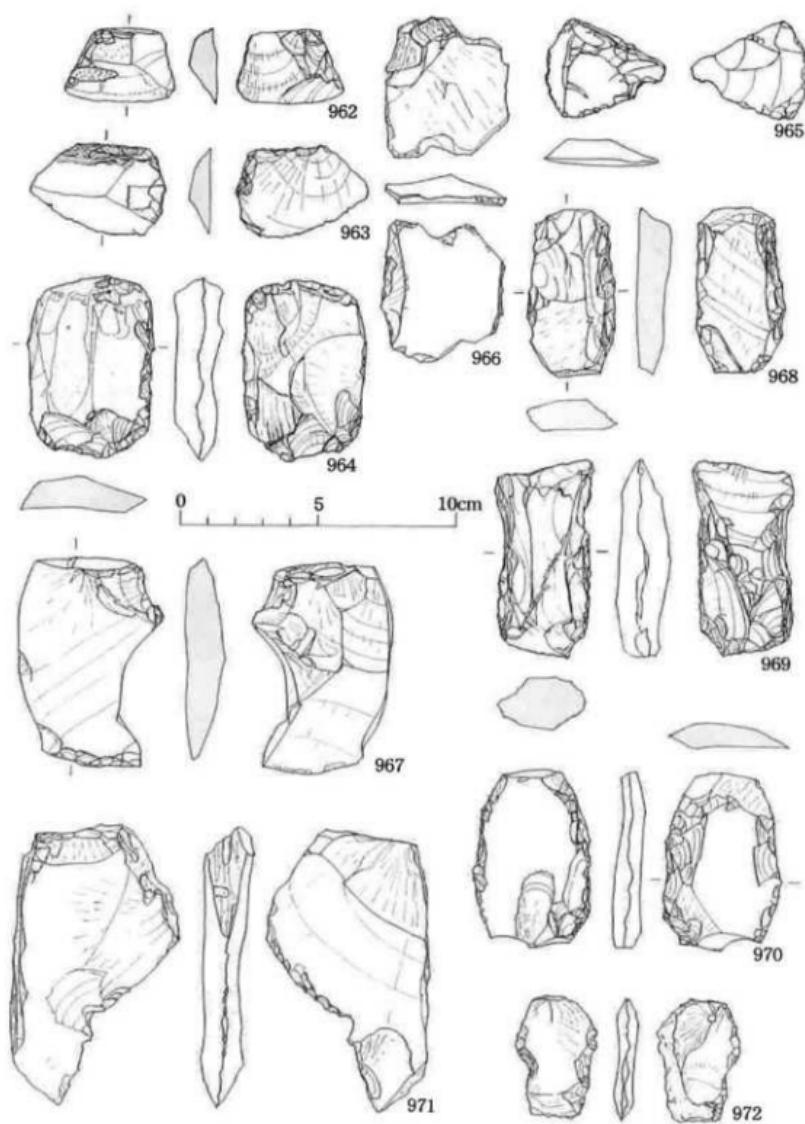
が認められる。先端部は折損している。

楔形石器960～967は背面の側辺に細部調整が施されて、下先端部の稜が磨滅して白色を呈している。他側辺は割れている。961は主剥離面が残り、剥離面の打面の対縁部の一部に細部調整が施されている。打面付近には白い傷が認められる。962は自然面の打面の一部に細かい斑点とそれに続く剥離面にステップ状の打撃痕が残されている。963は打点周辺にステップ状の剥離痕が認められる。全面に焼成をうけて暗紫黒色を呈している。964は一面に自然面が広く残され、2縁辺に細部調整が施されている。上部の角には細かい斑点がある打撃痕が残され、相対する縁辺にはステップ状の剥離と縁辺の角は剥離痕の稜がこすれて白色を呈している。腹面には剥離面と両側辺には細部調整がみられる。965は上部に小さい斑点を呈している打撃痕と他の2辺の細部調整痕に刃こぼれと潰れがみられる。966は上部の自然面を打面にし、周縁を細部調整しているものと考えられるが、一側辺は切断され下縁辺には刃こぼれがみられる。967は背部に剥離打面と主剥離面が残されている。対辺部の細部調整が施されている刃部には使用痕とみられる潰れとステップ状剥離痕が認められる。腹部には剥離打面の稜に打撃痕によると考えられる潰れがある。刃部の潰れと両縁辺の割れは使用時のものと考えられる。

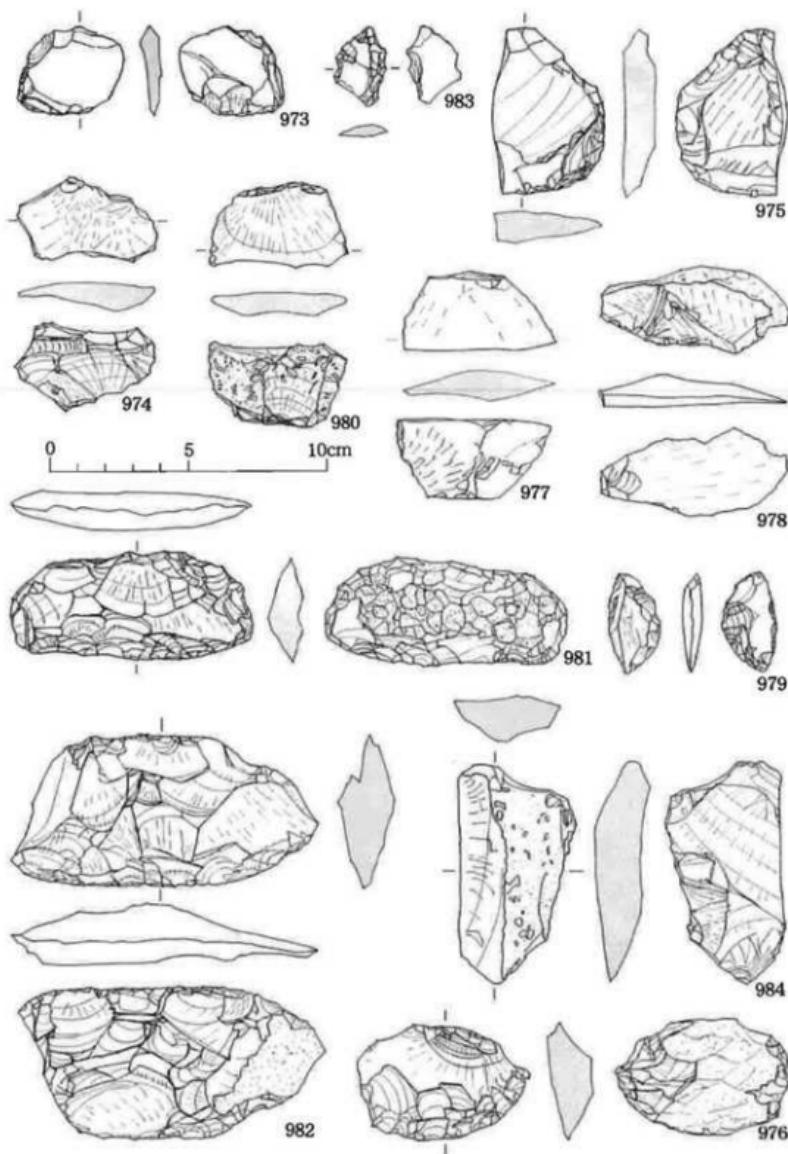
石剣968は身部の調整剥離の稜が磨耗しており、光沢がみられる。上端部は折れており下端部には自然面が残されている。側辺部の稜には潰れと亀裂がみられ、周辺部にはステップ状の剥離が夥しくみられる。969は身部の調整剥離の後に光沢がみられる。側辺部にちかい部分にはステップ状の剥離面がみられ、側辺部の一辺には潰れと亀裂が著しくみられる。上端部は折れている。側辺部の刃潰しの状況から968・969は石剣の握り部と考えられる。

尖頭器970は左右対称にちかい形態に両側辺が細部調整され、刃部は鋸歯状に造られている。先端部は折れているが刃部には使用痕とみられる潰れとステップ状の剥離痕が残されている。

削器971～982 971・972は擬形剝片、973～980は横形剝片を素材にして造られた削器である。981・982は石包丁形に造られている。971は背面に肩部の自然面を打面にした主剥離面と剥離打面が残され自然面は側辺部にも残されている。腹面の側辺に細部調整が施されている。刃部の剥離痕は刃こぼれと考えられる。972は背面に自然面を打面にした主剥離面が残され、両側辺には細部調整が認められる。腹面の片側にも自然面が残されており、大剥離面2面と側辺に細部調整が施されている。刃部の溝みは使用時の刃こぼれと考えられる。973は隣り合う2縁辺に細部調整が施されている。刃部の1辺には潰れ刃に沿って白い傷が認められ、一部分が欠けている。他辺は腹面側が欠けている。974は剥離打面が造られ、背面の周縁は割れているが細部調整が施されていたと考えられる。975は周縁に鋸歯状の刃部が造られているが、一部に自然面が残されている。両面の刃部周辺にステップ状の剥離痕が認められる。周縁の大剥離痕は使用時にできたものと考えられ、真ん中で剪断されている。全体に細部調整が施されていたのだろう。976は背面の周縁にステップ状の剥離と細部調整が認められる。刃部は使用痕で白色を呈している。977は剥離打面の両側縁に不連続の細部調整が施されている。打面の対縁には細部調整が施されていたと考えられるが割れている。978は背面に自然面が残され、対縁辺部に細部調整が認められる。979は背腹部の周縁に大剥離と細部調整が施されている。刃部に使用痕が認められる。980は腹面に自然面と主剥離面が残され、打点付近にステップ状の打撃痕が認められる。981の背部の身部には大剥離面が残され、周縁には細部調整で刃部がつくられている。使用によると考えられる微細な傷、刃部と平行する割れ目、潰れ跡などが認められる。腹面は凹凸のみられる自然面が残されている。982は



第57図 新生時代打製石器実測図-2



第58図 新石器時代打製石器実測図-3

両面とも身部に大剥離面が残され、二縁辺に細部調整が施されている。両縁辺に白い傷の使用痕、長い縁辺の刃部の一部には潰れが認められ、腹面に自然面が残されている。

細部調整片983は小片の身部の周縁に鋸歯状の細部調整が施されている。

984は両面に大剥離面と自然面が残されている。

古墳時代以降の遺構内、包含層内出土の石器

落ち込み内出土

楔形石器985は打面周辺に打撃痕、相対する二辺に刃こぼれと白色の傷がみられる。削器986は背面に大剥離面と自然面が残され、腹面の相対する二辺に細部調整がみられる。

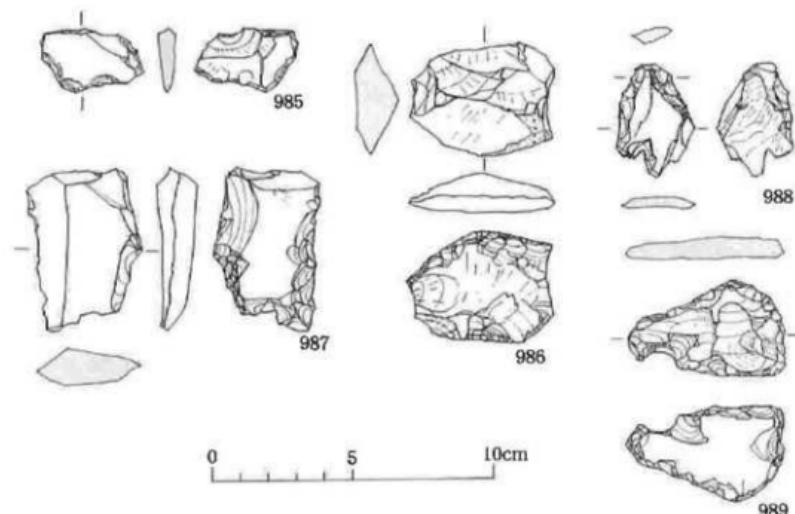
土坑1内出土

細部調整片987・988 987は背面に長い稜線がある大剥離面と自然面が残され、腹面は打面以外の縁辺に細部調整が施されている。長辺には細かい刃こぼれ、短辺には大きい刃こぼれがみられる。その他の縁辺には部分的に白い傷がみられる。988は先端部に自然面が残され、二縁辺には鱗状の剥離調整が施されている。

包含層出土内

楔形石器989は扁平な横形剥片の素材が使われており、背部には主剥離面が残されている。背腹共に周縁が細部調整され、打面の両縁辺には打撃痕と考えられる小さい斑点が多くみられる。対縁辺には潰れと磨耗痕が残されている。

砥石990・991 990は表裏面とも研砥されており滑らかである。細粒閃緑岩製である。991は表面と一側面が研砥されおり、滑らかになっている。黒雲母辺麻岩製である。



第59図 弥生時代打製石器実測図-4

石製紡錘車932・993 2点とも石包丁の転用品である。992の断面は均一の厚みで造られている。両面は滑らかで擦痕はみられず、周縁には研磨された擦痕がみられる。緑色片岩製である。993は断面がレンズ状を呈している。両面に研磨された擦痕がみられる。周縁には表面から欠落した部分や白い傷が走る磨耗痕がみられる。緑色片岩製である。

サヌカイト製の石器の総重量は1255.3K g、その他のサヌカイトの破片は492 gになる。他に凹み石994-角閃石斑構岩製、叩き石995とミグマイトと考えられるものがある。

番号	層位	図版	器種	最長	最幅	最厚	重量	角度	石材	自然	残存状況
938	10層 44 45	石包丁	8.2	3.7	0.75	29.4			緑色片岩		1/2 残存
939	8	石包丁	8.3	3.3	0.7	29.5			緑色片岩		1/2 残存
940	8	石包丁	8.2	3.7	0.7	42.6			緑色片岩		1/2 残存
941	3	石包丁	8.7	5.2	0.8	56.3			緑色片岩		1/2 残存
942	7	石包丁	5.9	4.7	0.8	32.3			緑色片岩		1/3 残存
943	6	石包丁	5.1	3.9	0.6	19.3			蛇紋岩		1/2 残存
944	6	石包丁	3.0	2.8	0.65	6.3			緑色片岩		残存部小片
945	7	石包丁	6.5	3.8	0.8	34.7			黒色準片岩		1/2 残存
946	6	扁平片刃	4.95	2.85	0.75	17.2			黒色準片岩		先端部折損
947	6	43 石鎚	3.15	1.8	0.7	2.5	28°	サヌカイト			
948	6	石鎚	6.0	3.0	0.5	6.8	44°	サヌカイト			
949	6	石鎚	6.1	2.3	0.7	2.5	30°	サヌカイト			
950	4	石鎚	3.6	1.9	0.5	4.6	29°	サヌカイト			先端部折損
951	5	石鎚	4.2	1.8	0.9	6.3	30°	サヌカイト			基端部折損
952	6	石鎚	4.95	2.3	1.3	15.8		サヌカイト			
953	6	石鎚	5.8	3.1	1.7	27.6		サヌカイト	有		
954	6	石鎚	3.5	3.7	1.1	19.7		サヌカイト	有	錐部折損	
955	6	46 47 石鎚	4.7	2.9	1.0	10.4		サヌカイト			
956	6*	石鎚	3.5	2.9	0.6	5.9		サヌカイト			
957	7	43 石鎚	6.6	2.6	1.2	18.5		サヌカイト			先端部折損
958	7	石鎚	3.9	2.7	0.5	5.9		サヌカイト	有	錐部折損	
959	7	石鎚	3.8	2.2	0.7	4.4		サヌカイト			先端部折損
960	6	46 47 楔形石器	3.0	2.0	0.6	6.8		サヌカイト			一側面割れ
961	6	楔形石器	2.5	2.5	0.55	3.2		サヌカイト			
962	6*	楔形石器	2.5	3.9	1.0	9.6		サヌカイト			

表2-1 埋没谷(溝3)内出土石器一覧表(法蓋単位:cm・g)

番号	層位	固版	器種	最長	最幅	最厚	重量	角度	石材	自然	残存状況
963	6*	46 47	楔型石器	3.2	4.8	0.7	10.2		サヌカイト		
964	上層	48 49	楔型石器	6.5	4.5	1.1	47.4		サヌカイト	有	
965	4	々	楔型石器	4.2	3.5	0.9	12.2		サヌカイト		刃こぼれ
966	1	々	楔型石器	4.4	5.1	0.9	23.9		サヌカイト	有	
967	9	46 47	楔型石器	7.5	5.2	1.5	66.3		サヌカイト		両縁片欠く
968	6	々	石剣柄か	6.0	3.2	1.1	30.2		サヌカイト	有	上端部折損
969	1	48 49	石剣柄か	7.0	3.5	1.7	51.5		サヌカイト		上端部折損
970	7	々	削器	6.4	4.1	1.0	64.0		サヌカイト		先端部折損
971	7	々	削器	10.3	5.8	1.4	77.2		サヌカイト	有	刃こぼれ
972	6*	46 47	削器	4.4	2.9	0.7	10.5		サヌカイト	有	刃こぼれ
973	5	48 49	削器	4.4	2.9	0.7	10.5		サヌカイト		一部欠損
974	7	々	削器	5.1	3.1	0.9	13.4		サヌカイト		
975	8	46 47	削器	4.0	6.0	1.1	32.2		サヌカイト	有	1片剪断
976	6	々	削器	4.1	6.2	1.4	33.3		サヌカイト	有	
977	6	々	削器	5.5	2.6	1.0	15.5		サヌカイト		1辺割れ
978	6	々	削器	6.7	3.1	1.1	16.2		サヌカイト	有	
979	3	48 49	削器	3.6	1.9	0.6	4.2		サヌカイト		
980	上層	々	削器	5.0	3.1	0.8	14.3		サヌカイト	有	
981	6	46 47	石包丁形	8.7	3.8	1.2	52.7		サヌカイト	有	
982	7	48 49	削器	10.9	6.0	2.1	102.		サヌカイト	有	
983	5	々	細部調整	2.8	1.7	0.3	1.6		サヌカイト		
984	7	々	石核	7.8	4.3	1.5	55.5		サヌカイト	有	
985	落	50	楔形石器	3.7	2.2	0.5	5.5		サヌカイト		刃こぼれ
986	落	々	削器	5.0	40.	1.45	29.2		サヌカイト	有	
987	溝2	々	削器	5.9	4.0	1.4	31.2		サヌカイト	有	刃こぼれ
988	溝2	々	細部調整	4.0	2.8	0.5	5.7		サヌカイト	有	
989	2	々	楔形石器	5.4	3.2	0.8	16.2		サヌカイト		
990	6	52	磁石	8.7	6.0	3.0	22.2		細粒閃綠岩		下端部割れ
991	3	々	磁石	8.5	6.0	3.0	27.0		黒雲母片岩		
992	6	44 45	紡錘車	3.35	—	0.6	14.8		緑色片岩		
993	3	々	紡錘車	4.6	—	0.55	20.8		緑色片岩		

表2-2 埋没谷(溝3)内出土石器一覧表(法量単位:cm・g)

3.2.3) 土製品

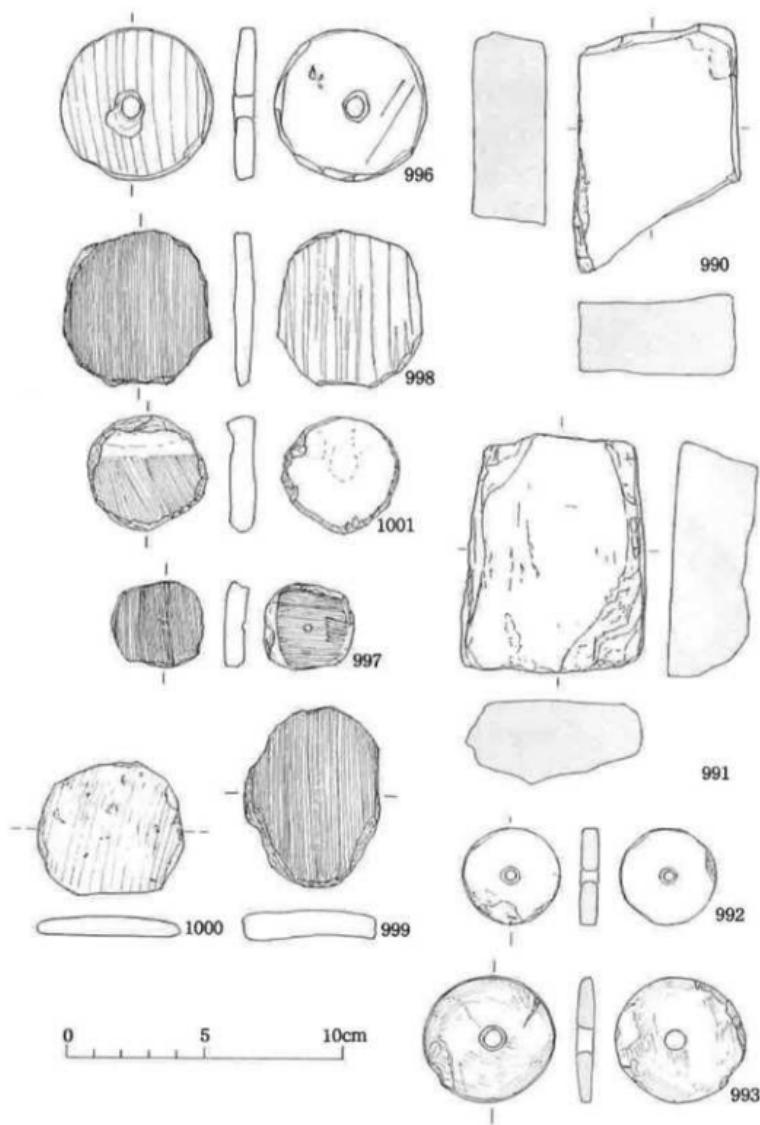
土製品は紡錘車996、紡錘車の未製品997、円板998～1001が出土している。いずれも土器片が再加工されたものである。

紡錘車996は表面がヘラ磨きされたものが利用されており、中央の孔は錐状のもので穿たれている。孔の周辺には糸すれの痕跡がみられる。997は小型で最大径は3.2cmを測る。方板に近い形をしており、周縁は研磨の箇所と割れ目がそのまま残されている。表面はハケ目で調整されたものである。中央に孔の位置を決めるための試しの傷が2個認められる。裏面もハケ目調整が残され、中央に錐による未貫孔の跡がみられる。

円板998は方板に近い形をしており、表面は細かいハケ目、裏面は粗いハケ目がみられる。999は楕円形をしており、円板の未製品と考えられる。表裏面ともにハケ目調整がみられる。1000は器壁が薄いもので一部直線を呈し、ハケ目調整がみられる。1001は小振りで最大径は4.4cmを測る。器壁は厚いもので壺の頸部下のくびれた部位が転用されている。上部はナデ調整、肩部に当たる部位には細かいハケ目調整がみられる。裏面には指オサエ痕がみられる。

番号	層位	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	残存状況
996	埋没谷6層	紡錘車	5.2cm	5.6cm	0.8cm	28.9g	
997	埋没谷9層	紡錘車	3.2cm	3.4cm	0.8cm	9.9g	未貫孔有
998	埋没谷6層	円板	5.8cm	5.4cm	0.8cm	22.0g	
999	埋没谷6層	円板	6.8cm	5.0cm	1.1cm	29.0g	
1000	埋没谷3層	円板	5.0cm	5.4cm	0.8cm	16.3g	
1001	埋没谷上層	円板	4.2cm	4.4cm	1.1cm	21.7g	

表3 埋没谷(溝3)内出土土製品一覧表



第60図 弥生時代土製・石製紡錘車・円板、砾石実測図

4. 古墳時代以降の遺構と遺物

4.1) 遺構

室町時代の遺構面 溝1・2、井戸3基、土坑5基、柱穴、杭列などを検出した。

i) 埋没谷(溝3) 古墳時代後期に埋まつた埋没谷の下層から多量の弥生時代の中期～後期の遺物が出土しており、上層からは古墳時代の遺物とともに中世までの遺物が出土した。

ii) 溝1 調査地のcラインの南側から東西方向に流れる中世の溝1が検出された。西側にいくと溝幅は広くなり、南岸は南側に屈折して流れ、溝幅が広くなる。東側の北岸のレベルがT.P.約11.77m、南岸は約T.P.約11.65m、溝1中央の最深部はT.P.約11.3mである。西側の北岸はT.P.約11.34m、南岸はT.P.約11.51mの高さで溝1中央の最深部はT.P.約11.18mである。東端の溝幅は3.6m、最大幅は約4mを測る。溝内には疊層の堆積がみられた。最下層から杭、また南側に屈折する箇所には杭と大型石、自然木がかたまって出土している。堰か水流を調節するためのものと考えられる。鎌倉時代以降の遺物が出土している。

iii) 溝2 溝1の北側で東西方向に流れる中世の溝を検出した。東側は溝1の北岸と平行し、途中で北方向に流れを変えていく。東側の北岸のレベルはT.P.約12.00m、南岸はT.P.約11.76m、中央の最深部はT.P.約11.52mである。西側の北岸はT.P.約11.60m、南岸はT.P.約11.70mの高さで溝2中央の最深部はT.P.約10.98mである。東西の高低差は約50cm前後になる。東端の幅は約1.8mだが幅は一定せず、最大幅は約4.20mを測る。古墳～室町時代の遺物が出土している。

溝2の北岸に杭、東側の底から護岸用の杭、土坑3および周縁部に打たれた杭、内部に打たれた杭と共に素ぼり井戸を検出した。西半分から土杭4・5、多数の杭列と自然木を検出した。

iv) 土坑4 溝2の底部の西側で形がいびつな土坑4を検出した。規模は最長の径が約1m、深さは約10cm前後を測る。ウマの臼歯が出土した。

v) 素ぼり井戸3 溝2の底の東側で、cラインのすぐ北側で井戸3を検出した。井戸の規模は径が約84cm、深さは約1.44mを測る。井戸内からはウマの歯・上腕骨が出土した。

vi) 土坑3 井戸3につづく西側から土坑3を検出した。南側は溝2に、東側は井戸3の掘削時に切られている。土坑の残存部は南北の径が約2.8m、東西が約4mを測る。深さは約20cmあり、周縁部に沿って杭が巡り、その近辺の北側にも杭が打たれている。

vii) 土坑2 溝1と溝2の間の南北Bラインと東西cラインの交差する地点で検出した。東側の肩部ははっきり残るが西側ははっきりしない。南北の幅は約9.4m、東西は約6.2mを測る。深さは約30cmから中央の最深部で約54cmを測る。鎌倉～室町時代の遺物が出土している。南東部に杭が3本残る。土坑の底から素ぼり井戸2を検出した。

viii) 素ぼり井戸2 土坑2の南東部で井戸2を検出した。井戸の規模は南北の径が約2.4m、東西が約2.72m、深さ56.6cmを測る。井戸内の周縁部の北側半分に杭が打たれている。

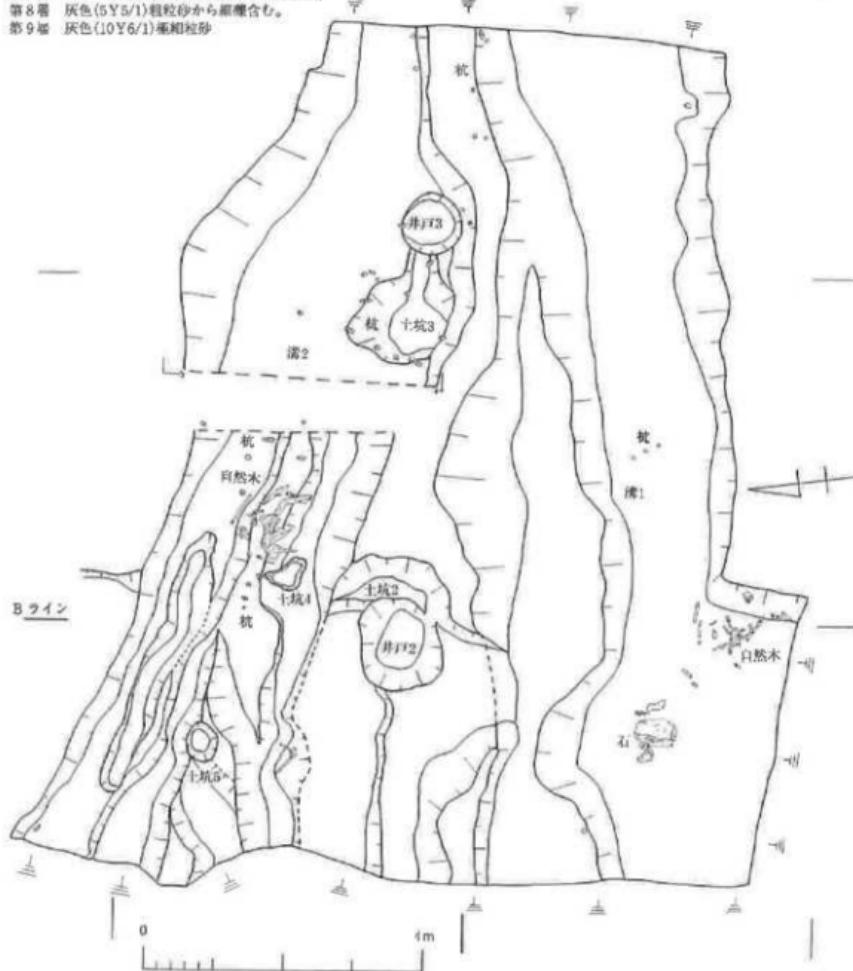
ix) 土坑1 調査地の最北端部のレベルがT.P.約12.36mの面で土坑1を検出した。規模は南北の径が約72cm、東西が約88cm、深さ24cm前後を測る。

x) 柱穴 土坑1と同じ面の南側の地点と、調査地の東西bライン周辺部のレベルがT.P.約12.14mの面で柱穴を合計21個検出した。中央部には上層の落ち込みで削平されているのか柱穴はない。柱穴の規模は径が約38～56cmまでみられる。深さは約10～38cmを測る。

中世～近世の遺構面 落ち込み・石列・杭列を検出した。

第2の堆积層

- 第1層 淡黄褐色(10YR 4/2)に黄褐色(10YR 5/6)混じる。
細粒砂に細礫混じり、中礫少量含む。
- 第2層 黄灰色(2.5Y 4/1)に黄褐色(2.5Y 5/6)混じる粗粒砂
に細礫混じり中礫少量含む。
- 第3層 黑色(5Y 2/2)シルト質粘土に植物遺体少量混
じる。
- 第4層 墓オリーブ灰色(5G Y 4/1)粘土質シルトに粗粒砂混じ
り、中礫少量含む。
- 第5層 オリーブ黑色(5Y 2/2)シルト質粘土に植物遺体少量混
じる。
- 第6層 オリーブ灰色(2.5G Y 5/1)粗粒砂に中礫含む。
- 第7層 オリーブ黑色(5Y 3/1)細粒砂に中礫含む。
- 第8層 灰色(5Y 5/1)粗粒砂から細礫含む。
- 第9層 灰色(10Y 6/1)細粒砂

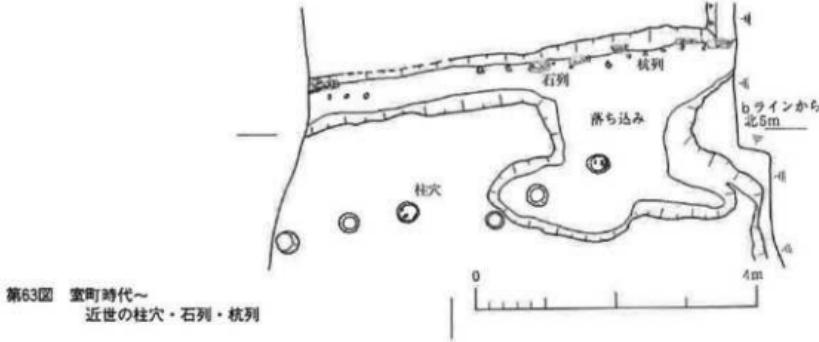


第61図 室町時代の遺構平面図・溝2の南北断面図

東西 b ラインから北 5m 付近のレベルが T. P. 約 12.84 m の面で落ち込みを検出した。落ち込みの深さは北側で 50cm を測り、南側の肩部は T. P. 約 12.39 m と傾斜しているため、深さは約 8~16cm になる。鎌倉~室町時代の遺物が出土している。北端の落ち込みの東西の側面沿いに並ぶ杭列・石列がみられた。落ち込みの南側は半分が足形状に広がる。これらの遺構は神並遺跡第21次調査で検出された石垣、土取り穴に相当するだろう。落ち込み内に 2 個と外の西側にもこれらにつづく 4 個の柱穴を検出した。柱穴の規模は径がほぼ 28cm 前後と均一で、深さは 10~40cm を測る。



第62図 室町時代の柱穴・土坑平面図



第63図 室町時代～近世の柱穴・石列・杭列

4.2) 古墳時代以降の遺物

4.2.1) 土器

溝1内出土土器：遺物の大半は鎌倉時代以降の時期のものである。

古墳時代の遺物

甕1006は球形に近い体部に口縁部が短く外反させられ、外面に粗いハケ目調整がみられる。

奈良時代

甕1007は長い胴部から口縁部が外反させられて、外面は縦方向に、内面は横方向にハケ目調整が施されている。

鎌倉時代以降の遺物

土師器 小皿1002は口径が8cmの小振りのもので、1003は厚い底部に浅い体部がつけられている。中皿1004は平底で、1005は底部が欠けているが、「へそ」皿になると考えられる(14~15c)。羽釜1008~1011には、内傾する体部から口縁部が「く」の字型に外反しており、端部を外側に折り曲げられているもの、端部は内側に折り曲げられているもの(14c初頭)、直立気味の体部から口縁部が「く」の字型あるいは水平近く外反し、端部が内側に折り曲げられ、肩部に断面方形の短い鈎が巡っている(14c後半)ものなどがみられる。

瓦器 羽釜1012は内傾する体部が口縁部まで続き、端部が丸く納められている(14c)。1014は口縁部が内側上方に折れ曲がっている(15c)。椀1015は丸底から内湾しながら口縁部まで続き、高台がつかない和泉型に属するものである。1016は断面三角形の高台がついている(径高指数22.5~13c後半~14c前半)。和泉型の椀1018~1020は体部内面に渦巻状の暗文が施されている(径高指数20.2~25.5~14c末)。1021は丸底で暗文が施されないものである(径高指数25.0~15c初頭)。

磁器 1022~1025はいずれも白磁の小片である。

溝2内出土土器：古墳時代から鎌倉~室町時代の遺物が出土している。

古墳時代

土師器 甕1026・1027は体部から口縁部が「く」の字形に外反させられ端部はそのまま納められている。1028・1029の口縁部は内側に肥厚している。これらの甕にはハケ目か叩き目の調整が施されている。

奈良~平安時代の遺物

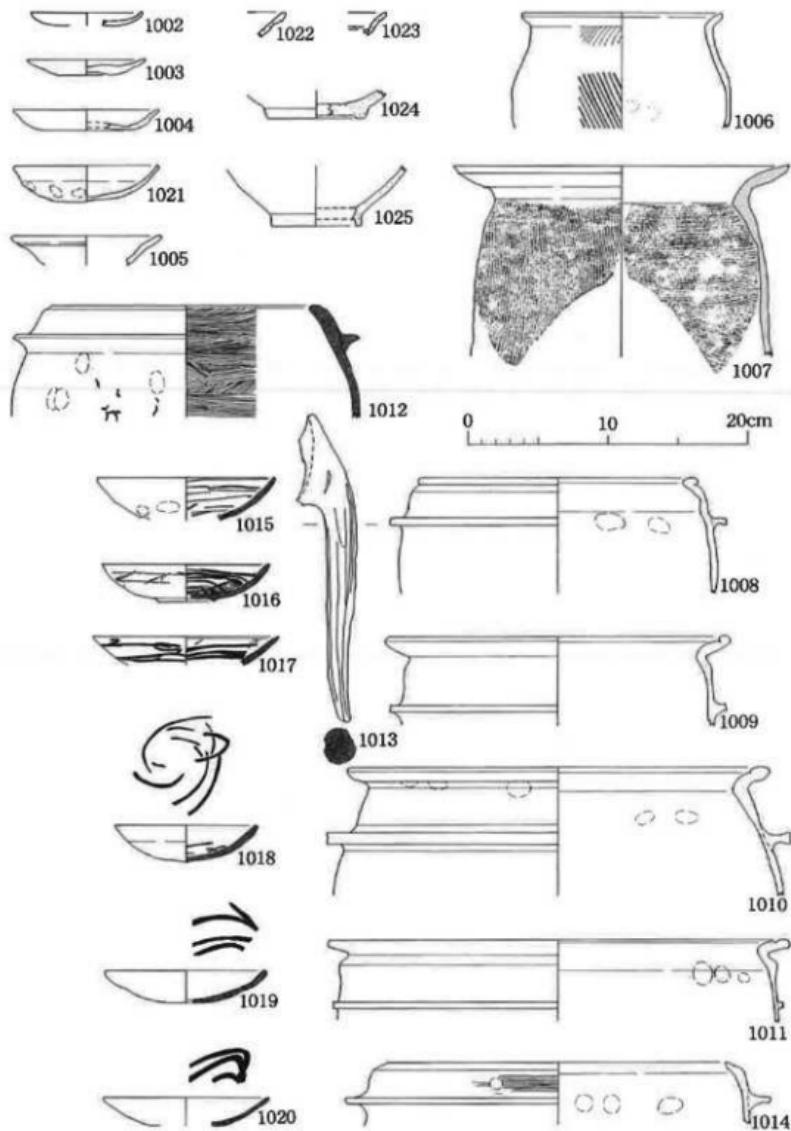
土師器 甕1030は体部から「く」の字形に外反している口縁部がそのまま尖らせて納められている。1031は口縁端部が水平に短く伸ばされている。1032の口縁端部は屈曲したあとで内傾させられている。

須恵器 甕1033は外側に「ハ」の字型に開いている高台がつけられ、丸みをもたせた胴部の上位には内傾して立ち上がる体部の稜がつくられている(8c)。

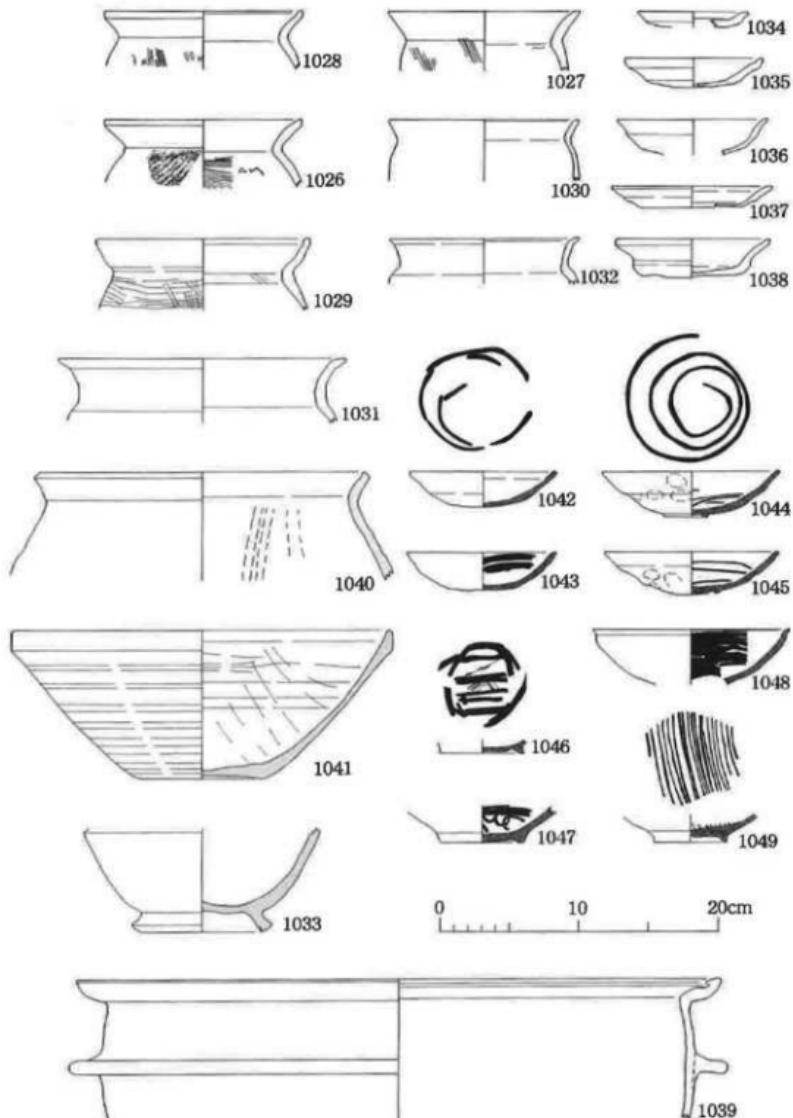
鎌倉時代以降の遺物

土師器 小皿1034は平底から口縁部が僅かにたちあがるもので口径8cm、1035・1036・1038は口径が10cm以上になり、体部も深く造られている。中皿1037は口径が12cm弱を測り、体部は浅く造られている。羽釜1039は体部から口縁部が水平に屈曲しており、端部は内側に折り曲げられ厚手の鈎が水平に巡らされている。

須恵器 甕1040は張り出された胴部からゆるやかに外反している。鉢1041は平底から外上方に直線的に開いている体部に口縁部が造られ、端部は断面三角形を呈している(13c後半)。



第64図 漢1内出土中世土器実測図



第65回 溝2内出土古墳時代～中世土器実測図

瓦器 梶には大和型のものと、和泉型のものがみられる。梶1048は口縁部に沈線がつけられており、1047は見込みに連結輪状の暗文が施されている大和型のものである。1046・1049は丸底から内湾しながら立ち上がる体部に口縁部が丸く納められるもので、見込みに平行線の暗文、1042・1045は見込みから体部にかけて渦巻き状の暗文が施されている和泉型のものである。大和型梶1047、和泉型1046・1049にはそれぞれしっかりした高台がつけられている(12c前半～中頃)。大和型梶1048は体部に太い墨線の暗文が施されている(13c中頃)。和泉型梶1044の高台は低く断面三角形に造られ(径口指数25.5)、1045の高台は体部に埋まっている(径口指数25.013c末～14c初頭)。1042・1043は小振りになり体部の渦巻き状の暗文は途切れ途切れに施されており、高台も付いていない(径口指数25.5～14c末～15c初頭)。

埋没谷(溝3)内出土：埋没谷の上層内と6層内に古墳時代以降の遺物が混入している。

第1層内出土

古墳時代の遺物

土師器 壺1058・1059は口縁部が「く」の字型に外反しており、1050～1057の口縁部は内面に緩やかな稜がつくられてやや斜め上方に外反させている。前者の体部外面と口縁部内面には細かいハケ目調整が施され、体部内面はヘラ削りがみられる。後者のなかで完形に復原できた1052は扁平な底部の内面に継ぎ目が残されている。壺1060は口縁部が丸く納められ、内面にはハケ目調整がみられる。

須恵器 杯1071～1073は底部が欠けているが、やや長い立ち上がり部がつくられ(5c末～6c初頭)、1074は立ち上がり部が低く扁平な形のものである(6c後半)。杯蓋1075～1077は天井部が扁平な形で口縁部との境界に鋭い稜が造られている(5c末)。1078・1079は天井部が丸く造られ、口縁部との境界も稜が消失していく過渡期のもの(6c後半)。高杯(1083)は腰部に鋭い稜線が2条みられる(5c末)。1085は口径が50cm近く測られる大型のもので口縁部に波状文が施されている。1084は口縁部が斜めに外反してから、さらに斜めに開き、端部は矩形に納められている。体部外面には搔き目、内面には青海波の叩き目で調整されている。口縁部内面に「×」印のヘラ記号が認められる。

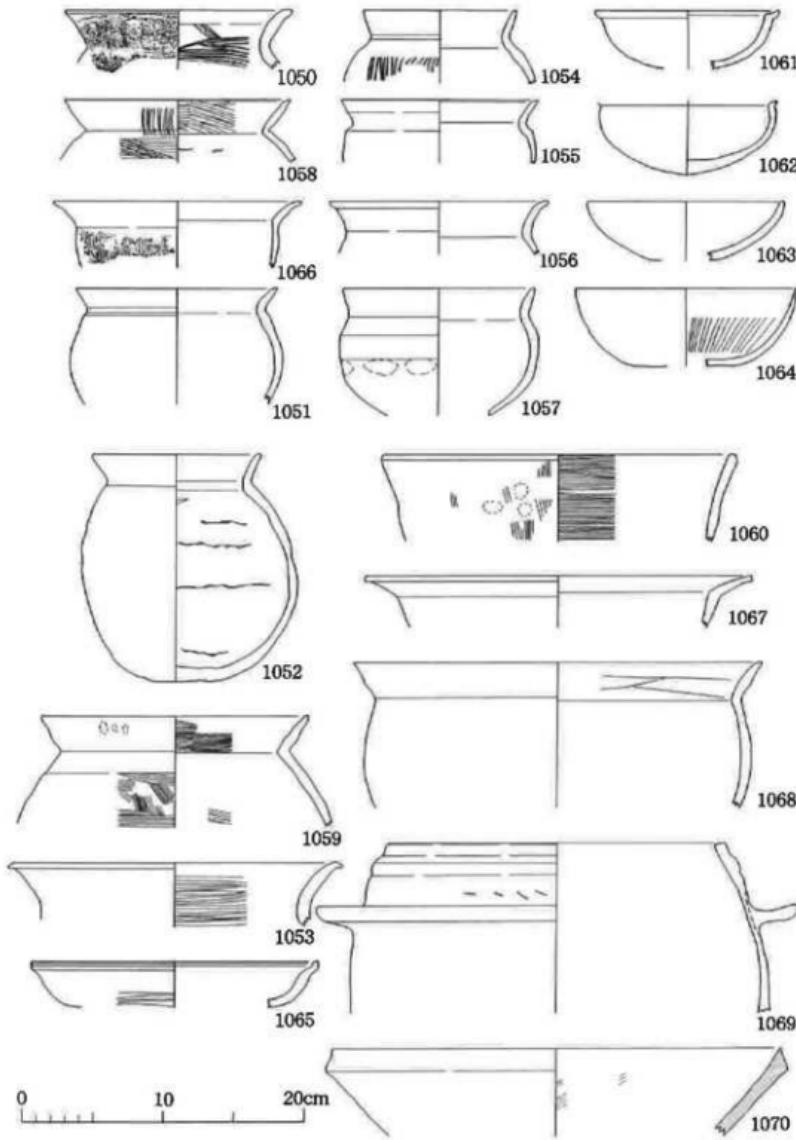
飛鳥～室町時代の遺物

土師器 小型壺1061～1064の胎土は精錬されたもので、河川の岸辺で祭祀用に使用されたものだろうか。壺1065は口縁部が外反してから上部に立ち上がり部が造られている(9c末)。鉢1067は口縁部が水平近くまで外反しており、1068は「く」の字型に外反してから口縁端部を内傾させている。羽釜1069は内傾して立ち上がる口縁部の外周に段が巡らされ、端部には面が造られている。鉢は水平に長くのばされたものが付けられている(14c中頃)。

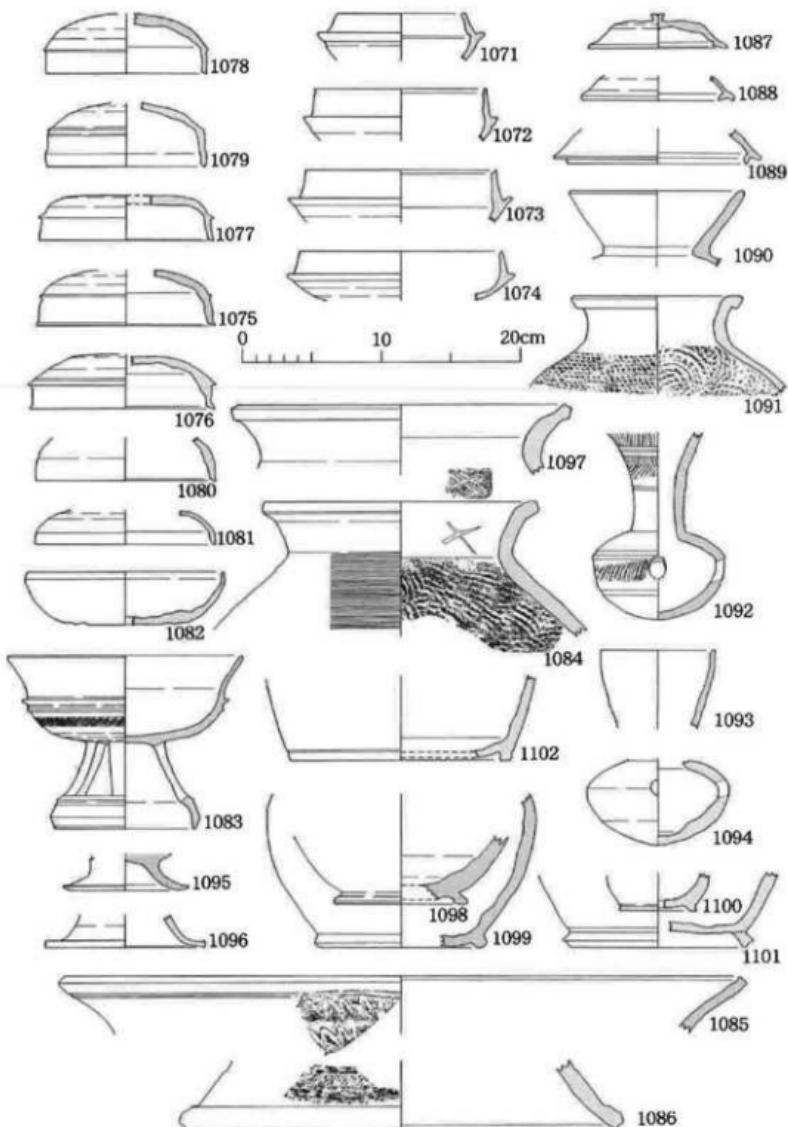
須恵器 1087～1089は宝珠つまみがつく蓋である。壺1091は直立している頸部から口縁部が水平に開いており、体部外面は格子状の、内面は青海波の叩き目で仕上げられている。1097の頸部は短く外湾してから口縁部につづき口縁端部が矩形に造られている。壺1092は小振りでタマネギ形の体部に、長い頸部から口縁部が漏斗状に開かされているもの。1094は底部の中央がやや尖り気味に造られている。壺口頸部1090は平瓶に、1093は提瓶になるかもしれない。他に脚部1095・1096がある。これらの須恵器は6c後半～7c前半にかけての時期のものである。1098～1102は広口壺か長頸壺の底部に当たる破片と思われる(8c)。鉢1070は口縁部の端部が断面三角形に造られ、体部外面は削りのまま仕上げられている(13c後半)。

第(6)層内出土

古墳時代の遺物



第66図 满3内出土古墳時代～中世土器実測図



第67図 溝3内出土古墳時代～奈良時代土器実測図-1

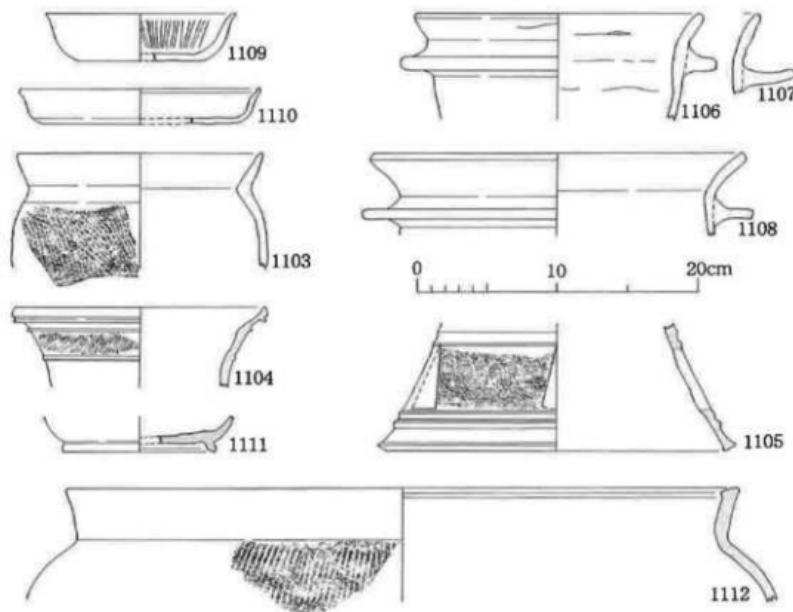
土師器 壺1103の口縁部の内面は「く」の字形に造られており、外面は肩部まで横ナデ、体部がハケ目で調整され、内面の体部はヘラ削りがわずかに残されている。

須恵器 壺1104は口縁部と頸部に、器台は裾部に鋭い凸線が付けられている。壺には凸線の間に、器台には三角形の透かしの間に波状文が施されている（5c後半～6c前半）。

飛鳥～奈良時代の遺物

土師器 杯1109は口縁端部が薄く造られ、わずかに外反している。内面には暗文がみられる。皿1100は口縁端部が内方に肥厚して、沈線が巡っている。羽釜1106は小振りで、斜めに外反している口縁部に、端部が丸く納められている。厚手の鉢が水平に付けられている。羽釜1107は長い鉢がわずかに湾曲して付けられている。羽釜1108の口縁部は体部から「く」の字形に屈曲して外反し端部は面取りされている。鉢は水平に巡っている。

須恵器 杯底部1111は高台の端部が内傾している。壺1112は口径48cmの大型のもので、体部から口縁部が直立し、端部は内方にわずかに肥厚させて内傾している。体部には平行叩き目が施されている。



第68図 滋3 内出土古墳時代～奈良時代土器実測図-2

落ち込み内出土土器

第1層内出土

13世紀以降の鎌倉～室町時代の遺物が多く出土しているが、古墳～奈良時代の遺物が少量混入している。

土師器 壺1113は球形の体部から「く」の字形に口縁部が外反している。端部は尖り気味に納められている。体部は外面がハケ目、内面が削りで調整されている。脚部は外面に指サエの凹凸が残されており、内面にはしばり目がみられる。杯1115は半円球形の体部に口縁部がわずかに外湾している。端部は薄く仕上げられている。

須恵器 杯1116は底部からゆるやかに外傾して立ち上がる体部に断面が方形で器壁がうすい高台が付けられている。杯1117は焼成時に底部がゆがんだもので、外面には切り取られた跡がみられる。

鎌倉時代以降の遺物

土師器 盆は3種類みられる。平らな底面から口縁部が外反している1118～1120、底部が上げ底に造られているへそ皿1121・1122、深い底部から口縁部が外反している1123がある。羽釜1124は口縁部が外方に折り曲げられて丸く納められ、肩部の下に断面が方形の短い鈎が付けられている(15c)。羽釜1130は口縁部が水平に外反しており、端部は内側に折り曲げられている。肩部の下に形ばかりの断面三角形の鈎が巡っている。器壁は薄く胎土は精良である(14c前後)。

瓦器 梶1125は断面三角形の高台に体部は半円球状に造られ、口縁部内面に沈線が巡らされている。大和型に属するものである。体部内面には密に、外面にはまばらに暗文が施されている(径高指数33.3-12c末～13初頭)。

1126～1128は丸底から内湾して造られる体部に口縁端部が丸く納められている。内面には見込みから体部にかけて一連の渦巻き文の暗文が施されている(径高指数25.0～25.5-14c後半)。羽釜1129は内傾して立ち上がる口縁部の下部に断面方形の鈎が巡らされている。胴部には脚部が付くものと考えられる。1131は直立している口縁部の内外面にヘラ磨きがみられる。

須恵器 壺1132は短い頸部に口縁部が下方に肥厚しているもので、口径が40cm前後の大型品である体部には横方向の叩き目がみられる。鉢1133は斜めに開いている体部に、口縁部は上方に長い立ち上がりが造られている(いずれも15c)。

磁器 碗の底部1135、白磁碗の底部1136が出土している。

第2層内出土

瓦器碗1137は半円球の鉢部に断面方形の高台が付けられている。口縁部は内傾し沈線がめぐらされている大和型に属するもので、体部内面にやや密なヘラ磨きと見込みに同心円状、外面上位に数本のヘラ磨きが施されている(径高指数37.9-12c中頃)。

第3層内出土

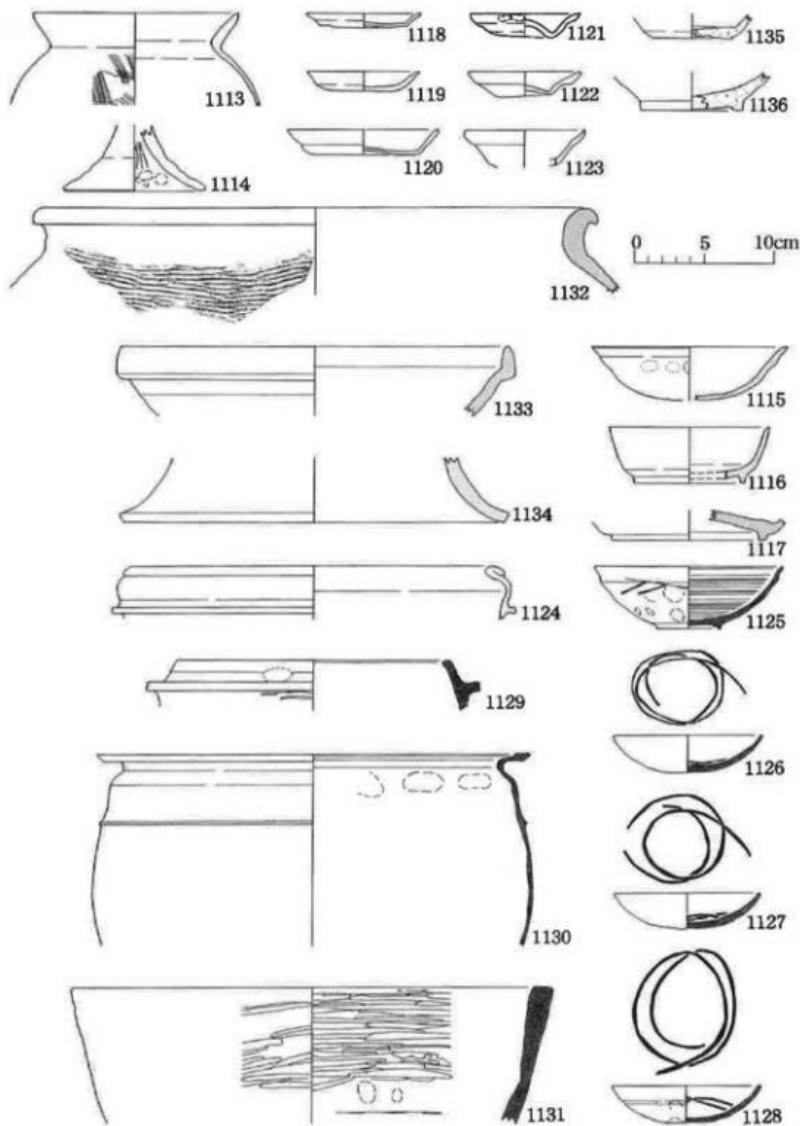
土師器皿1138はやや上げ底風に造られている。羽釜1139は内傾している口縁部に浅い溝の凹線文が施されている上端部に面が付けられている。鈎は外上がりである(14c～15c)。

瓦器 羽釜1140は口縁部が内傾しているもので、口縁部の上位に鈎が巡らされ、羽釜1141は直立している口縁部に凹線文が施されている(14c～15c)。鉢1142は厚手に造られ、口縁端部は断面三角形に造られている(15c)。

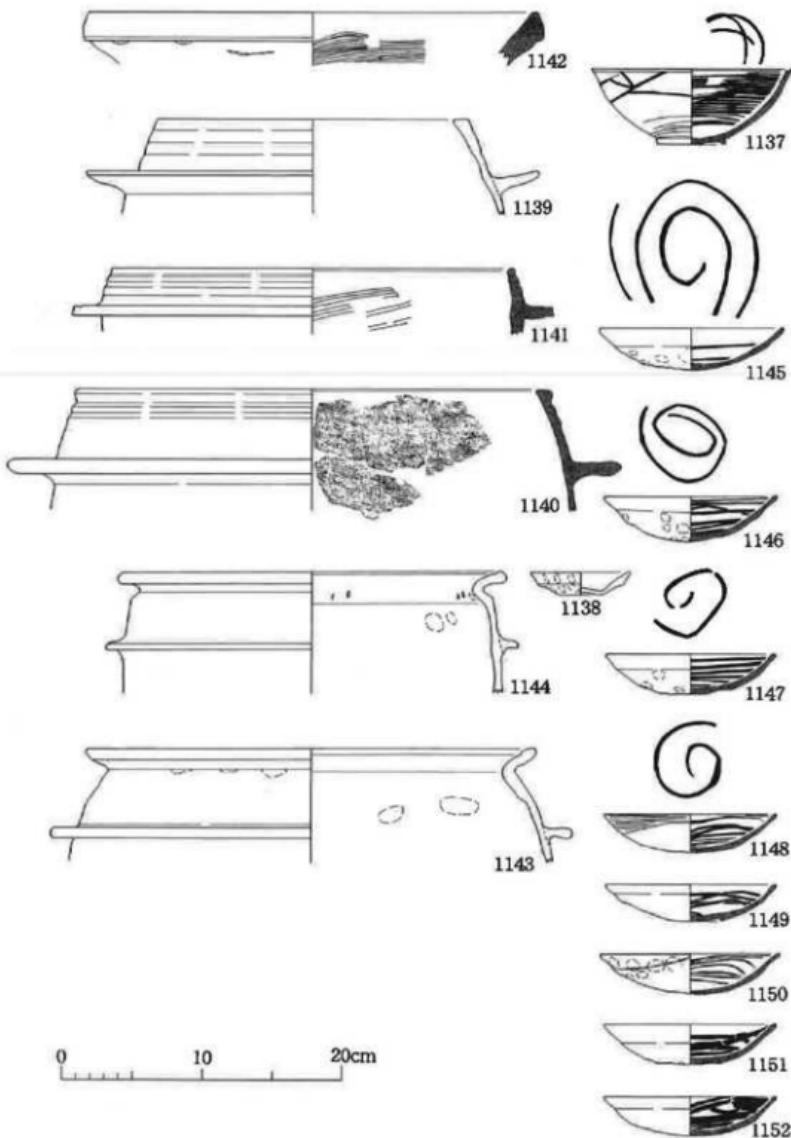
礫層内出土

土師器 羽釜1143は内傾している体部から口縁部が「く」の字形に外反しており、口縁部が内側に折り曲げられている。鈎は肩部の下位に巡らされている。1144は直立気味の体部に水平近くに口縁部が外反しており、端部が折り曲げられている(13c後半～14c)。

瓦器 梶1145～1152はいずれも丸底からゆるやかに内湾しながら口縁部まで続く和泉型に



第69図 落ち込み第1層内出土中世土器



第70図 落ち込み第2・3・4層内出土中世土器実測図

属するもので高台がつかないものである。内面には見込みから体部にかけて連続している溝巻き状の暗文が施されている。暗文の本数は1層内の瓦器に比べるとやや密にみえる（径高指数22.5~26.3前後が多い-14c末）。

土坑2内出土

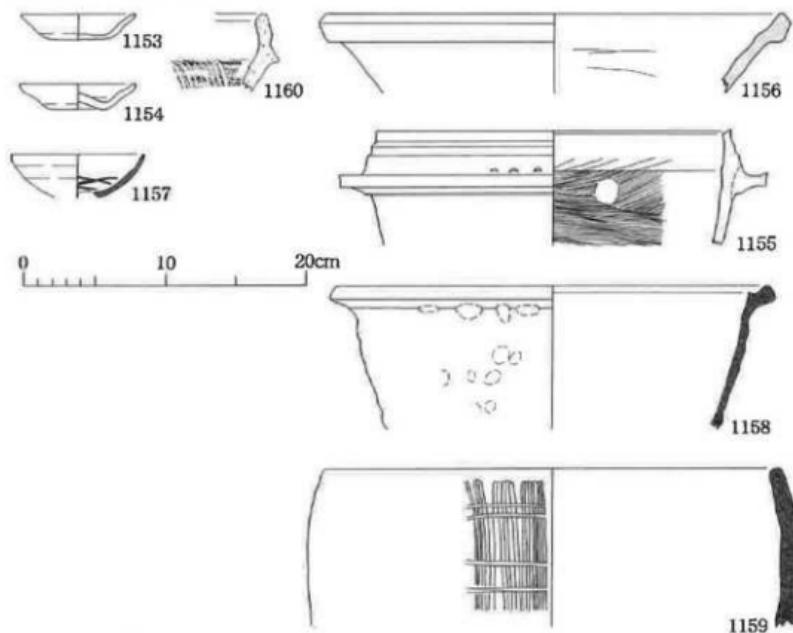
鎌倉~室町時代の遺物

土師器 皿1153は平底から口縁部が斜めに外反しているもので、1154は上げ底風のへそ皿である。羽釜1155は体部からほぼ直立している口縁部で、端部は内側に斜傾している。肩部には鍔が水平に巡らされている。口縁部には強いナデつけで段状を呈している。胴部には横方向の削り目が残されている(15c)。

須恵器 鉢1156は斜めに開かれた体部に口縁部が矩形状に厚っぽく造られている(15c)。

瓦器 楼1157は口径が9.4cmの小型のもので和泉型に属する。高台はつかないものと考えられる(15c)。鍋1158は外傾して立ち上がる体部から、斜めに開く短い口縁部の上部に蓋受け用の溝みが付けられている。体部外面には指オサエの痕跡がみられる。火舍1159は内湾しながらほぼ真っ直ぐに立ち上がっており、体部外面にはヘラ磨きが施されている。

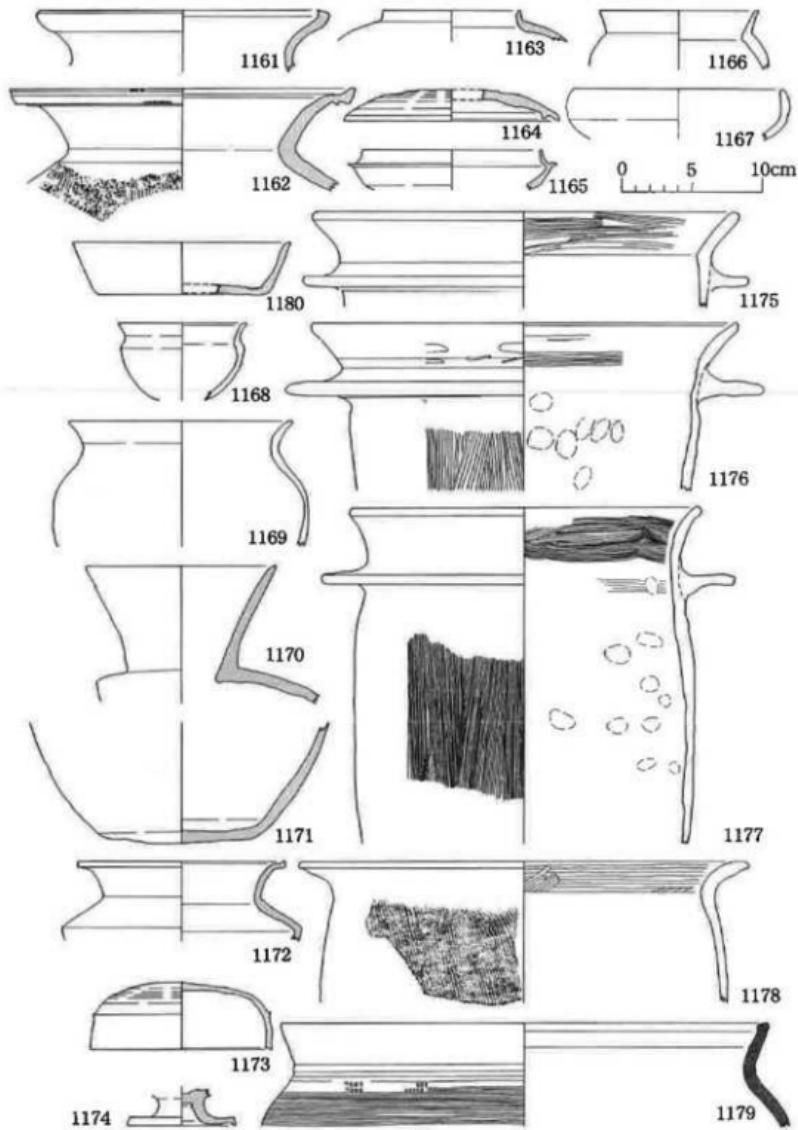
磁器質の鉢1160は斜めに開いている体部から口縁部が上方に長く伸ばされているもので内面に刷り目が付けられている。



第71図 土坑2内出土中世土器実測図

包含層内出土

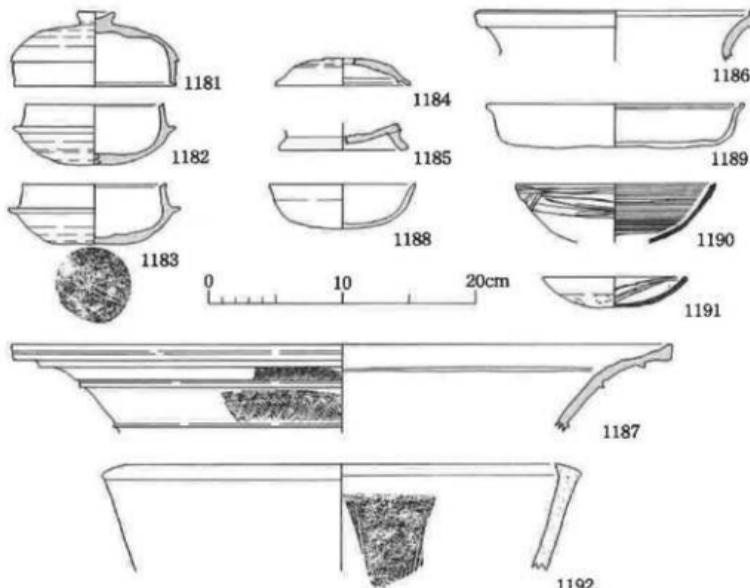
③層内から奈良時代の須恵器杯、⑤層内から奈良~平安時代の土師器壺・甕・羽釜、須恵



第72図 包含層内出土古墳時代土器実測図

器の杯蓋・平瓶・壺・脚部・甕、⑥層内から古墳～奈良時代の土師器甕、須恵器杯・杯蓋・壺・甕などが出土している。

また表探遺物には古墳時代の須恵器、奈良～平安時代の土師器、鎌倉～室町時代の瓦器、陶器などがみられる。



第73図 包含層内出土古墳時代土器実測図-2

ii) 銭貨

包含層内から渡来の古銭が2点出土している。

③層内から出土した「開元通宝」(621年初鑄造—唐) 1193は外径が2.4cm、内径0.65cm、重さ2.1gを測る。⑤層内から出土した「天聖?元寶」(1023年初鑄—北宋) 1194は外径が2.4cm、内径0.6cm、重さ3.1gを測る。



iii) 土錐

⑤層内から2点出土している。1196は一先端が

第70図 銭貨・土錐実測図

欠けている。中央に最大径をもち、両端が徐々にすぼまる形態のものである。筒部の径は1.1cm、重さ4.1g。1195は両端部が欠けている。中央が筒状で両端がすぼまる。筒部の径は0.8cm、重さ1.9gを測る。

5. 自然遺物

遺構内及び包含層内から動物・植物遺体が何点か出土している(表4)。動物遺体は大阪市立自然史博物館の椿野氏、植物は那須氏に同定していただいた。

5.1) 種子

第4表に示すように埋没谷(溝3)の各層内からアカガシ亜属などの広葉樹の種子のほか、とくにモモの核が多く量に出土している。モモの核について金原氏が弥生時代のものと古墳時代に外来品として入ってきたものを分類されている。同氏によると弥生時代のモモの核の方は小型品だということである³⁾。

5.2) 炭化物

土器の内面に見られる焦げ付きによる炭化物や木炭が多くみられる。今回の調査では原形がそのまま残されているものがある(図版42-1)。

図版の左下は平面が楕円形を呈し、一面は山形を呈しているパン状のものである。内容物に穀物の種子状のものがみられる。左上は器状のもので上部が口縁部の様な形を呈しており、体部は内湾する面が造られている。いずれも完全に炭化している。

5.3) 食骨

5~7表に示すように、埋没谷の第7層内から出土した骨には焼け痕が見られる。加工品の破片である。第6層内からはテン、第6~9層内からシカ・イノシシの動物遺体が出土している。上層内からウシ・ウマの臼歯が出土した。

9層内からは貝類がかたまって出土した。

中世以降の溝1・2・落ち込み・土坑・井戸内などと包含層内からウシ・ウマなどの動物遺体が出土した。井戸3内からはウマの右上腕骨と臼歯と切歯が出土しており、祭祀的な意味が考えられる。

	属名	種名
11層	26) アカガシ亜属	27) アラカシ
10層		25) モモ
9層		24) モモ
8層	23) アカガシ亜属	
7層	22) コナラ属	
6(炭) 層		21) モモ
6層	18) コナラ属	20) モモ多量 19) モモ 17) ヒヨウタン 16) オニグルミ
5層	13) コナラ属	15) ハクウンボク 14) モモ 12) ヒヨウタン 11) アラカシ
4層		10) モモ 9) トチの果皮 8) クロモジ
	7) コナラ属	
3層	6) コナラ属 5) アカガシ亜属	4) エゴノキ 3) カヤ 2) モモ 1) イヌガヤ

表4 埋没谷(溝3)内出土種子

出土層	シ カ	イ ノ シ シ	そ の 他
9層	・右下頸骨-B01 ・左腸骨-B02 ・第一頸骨-B03 ・きょう骨?-B04	・右上第一切歯-B06	・貝類-B11
8層	・右尺骨-B05	・右肩甲骨-B07 ・♀下顎骨M ₂ まで萌出-B08 ・右上顎骨P ⁴ M ¹ M ² M ³ つき-B09	
7層		・右距骨-B10 ・右下顎骨-B26	・加工骨片(焼け跡痕あり)-B12
6(炭)層		・右下第3大臼歯	不明1点
6層		・右側頭骨-B13 ・右肩甲骨-B14 ・右踵骨-B15	・テン左下顎骨P ₃ M ₃ つき-B16 ・焼け骨(脊髄骨1、不明3-B20~23) ・不明-B17~19・24・25

表5 煙波谷(溝3)内出土動物遺体-1

	ウ マ	ウ シ	そ の 他
溝1 疊層	・左上第1か、第2大臼歯-B201 ・左上第1切歯-B202 ・右下顎臼歯 ・基節骨-B203 ・右腸骨-B04		4個
溝2	・右腓骨-B205 ・右中足骨-B206	・基節骨-B101 ・右下顎骨(先端部)-B	4個
落ち込み 1層 3層	・切歯 ・左上第3か、第4小白歯	102	2個 2個
土坑4 1層	・左下第1大臼歯 ・左下第4小白歯		
排水溝		・中足骨-B108	

表6 各遺構内出土動物遺体-2

	ウマ	ウシ	不明
埋没谷 (溝3) 2層			臼歯片 (ウシか ウマ)
埋没谷 (溝3) 1層	<ul style="list-style-type: none"> ・左下第3か、第4臼歯2個-B 207 ・左下第1切歯-B 208・右下第1か、第2大臼歯-B 209 ・右下第3か、第4小白歯 	<ul style="list-style-type: none"> ・左上第2か、第1大臼歯 ・左上大臼歯-B 103 ・右上第1か、第2大臼歯-B 104 ・右下第3大臼歯-B 105 	2個
⑥層	<ul style="list-style-type: none"> ・右上白歯 ・左下白歯2個 		
⑤層	<ul style="list-style-type: none"> ・左下第3大臼歯2個 ・左上第2小白歯 ・左下第1大臼歯 ・左下第2大臼歯 ・左下第3大臼歯-B 210 ・左下白歯-B 211 ・左下白歯 ・右上白歯 ・右下白歯 	・臼歯片-B 107	
3層	・右上第3か、第4小白歯-B 212	<ul style="list-style-type: none"> ・右下第3大臼歯-B 106 ・骨片 	
疊層	<ul style="list-style-type: none"> ・右きょう骨-B 213 ・右上第1か、第2大臼歯-B 214 		
井戸3	<ul style="list-style-type: none"> ・左上大臼歯-B 301 ・左上白歯-B 302 ・左上第2切歯-B 303 ・左上第3切歯-B 304 ・右上白歯3個-B 305~07 ・右上腕骨-B 308 		

表7 埋没谷(溝3)・包含層・井戸遺構内出土動物遺体-3

IV 「埴堀」の分析結果

弥生時代から古墳時代の埋没谷の第2層内（青灰色シルト）から出土した土製品が、埴堀であるかどうかを奈良国立文化財研究所の村上隆氏に分析を依頼した結果を以下に記す。

表8 「埴堀」の蛍光X線による定性分析結果

No	Fe	Cu	Sr	Zr	Rb	Zn	Cr	Nb
1	+++	+++	++	++	*++	*+	*++	
2	+++	++	++	++	*++	*+	*++	
3	+++	++	++	++	*++	*+	*++	
4	+++	++	++	++	*++		++	*++
5	+++	++	*+++	*+++	*++	*+	*+++	
6	+++	++	+++	++	*++	*++	*+++	

・分析資料部位

No 1—口縁部内面、No 2・3—断面、No 4—口縁部外側、No 5—一体部外側、No 6—底部外側

・+の数が多いほど含有量が多い

+ $0 < I < 0.1$

++ $0.1 < I < 1.0$

+++ $1.0 < I < 10$

++++ $I > 10$

I : $\times 103 \text{ C.P.S}$

以上が、分析していただいた結果である。
本文にも記したように青銅の鋳造に使用された可能性が高いとのことである。



第75図 埋没谷(清3)第2層内出土「埴堀」の分析部位

V 弥生土器について(-2*) 一埋没谷(溝3)内出土の弥生土器を中心に一

弥生時代中期から後期の土器の形態について、以前、西ノ辻遺跡第5・7・31次調査の遺物を整理して分類を試みた²¹。(＊一回は統編になる。)

第7次調査の方形周溝墓に伴って出土した遺物には中期の前半～中頃の属性を持つ土器が大半を占めていた。第31次調査で検出された旧河道内、第5次調査で検出されたた埋没谷(溝3)内の下層から上層にかけて出土した中期～後期の土器を整理した結果、形態をはじめとする製作手法に新しい属性をもつものが順次増えていく状況が窺えた。本書では文様・調整などを中心にみていくため拓本を多用した。

中期初頭～末期の間の土器には回転台の使用とともに形態や文様などに変遷していく状況が認められる。特に形態的に変遷が顕著にみられるものには壺類・鉢B・無頸壺Bの口縁・端部、胴部の張り出しの位置、高杯Bの杯部、脚柱状部などがあげられる。後期の土器は、中期の土器の形態・文様・調整が局部に継続されているものと大きく変化するものがみられる。大きな変化としては、土器全体に小振りのものが増える、文様の種類が少くなり施される部位は局所的になる、甕などの叩き目調整が増える、長頸壺が多くなり壺・器台には赤色顔料で色付けされたものがみられるなど供膳用と考えられる土器が増えるといった点があげられる。

1) 土器の調整

中期～後期の土器にはナデ、ハケ目、ヘラ磨き、ヘラ削りの調整が施されている。中期初頭の土器にはハケ目調整が多く、中期中頃～後半の土器にはヘラ磨き調整が中心になる。さらに中期の終わり頃から叩き目調整が出現し、後期に増える。

◎ナデ調整は通常、口縁部などの最後の仕上げに施される。中期後半以降の土器には口縁部や頸部のナデ調整の際に装飾性を兼ねる凹線文がみられる。本遺跡での出土例は少ない。

◎ハケ目調整は土器の器面に原体の木目が平行する線でみられ、中期の中でも古い土器に多用されている。中期初めの大和型壺・壺の体部内外面には縱方向、口縁部内面には横方向の粗いハケ目がみられる。中期中頃の土器の内外面とも、ハケ目は細かくなり、口縁部内面のハケ目調整は少なくなる。さらにハケ目のあとからヘラ磨き調整を施したもののがみられる。

◎ヘラ磨き調整は前期から後期の土器に器面を密に仕上げるために器種を問わずに多くみられる。壺などの各器種には外面の施文帶以外の部位に規則性をもってヘラ磨き調整が施されており、それだけで装飾効果があるようみえるものがある。文様の間をヘラ磨きしているものも多い。壺・甕・鉢などの内面のヘラによる調整は外面の磨きほど丁寧に施したようにはみえないため、ヘラ磨きという用語があてはまらないものもある。逆に高杯の杯部内面にはヘラ磨き手法で装飾風に仕上げられた暗文がみられる。ヘラ磨き調整は他の調整が施されたあとに最後の仕上げに使われているものが多い。中期の甕の内面の肩部にみられる横方向のヘラによる調整は、河内型甕の特徴としてあげられる。中期の壺類の胴部には縱方向と横方向のヘラ磨き調整がみられる。後期の壺のヘラ磨きは、全面に縱方向のヘラ磨き調整が施されるものが多い。

◎ヘラ削り調整は一般に土器の器壁をうすく仕上げるための成形時に施されている。中期後半以降の土器の胴下半部の内外面、脚部の裾内面などにそのまま残されているものと、他の調整が併用されているものがある。後期の甕の内面にはヘラ削りが施されているものが多くなる。

◎叩き目は土器の器面を叩き締める手法で、そのまま痕跡が残るものは後期の甕などによ

くみられる調整であるが、奈良県の飛鳥藤原遺跡出土遺物には中期前半の土器にすでに施されている²²。西ノ辻遺跡では中期後半後葉の時期から壺・甕などにみられる。この時期の土器の叩き目調整は量的には少なく、叩き目の上にハケ目やヘラ磨き調整などが加えられてめだたないものが多い。後期の土器にも中期の土器の調整と同じく、複数の調整が併用され、底部などに部分的に叩き目が残されているものや、ハケ目調整の上に叩き目が加えられているものがある。甕などの外面には底部の上位から体部までと、底部の下位から体部までの間を叩き目が施されているものがある。叩き目の方向には水平のもの、わずかに右上がりのものになっているものがある。水平方向の叩き目には凹凸の幅の広いものが多い。甕の体部の叩き目は部位により方向が違い、土器の成形が分割して造られている状況が窺える。さらに口縁部が叩き出し手法で成形されたものもみられる。

2) 土器の文様

土器の文様には器面に粘土紐を貼り付けられているもの、施文具を器面に水平に走らせて描くもの（縦位に施されているものも數は少ないがみられる）、押捺によるもの、孔が穿たれているものがある。施文具別にみると次のように分けられる。

- 1) ヘラによる刻み目文・圧痕文・綾杉文・沈線文・斜格子文・渦巻き文・暗文・透かし文・記号文（・絵画）
- 2) 櫛状の工具で施されている直線文・扇形文・波状文・簾状文・列点文（・綾杉文）・流水文・同心円文・斜格子文
- 3) 板状の工具で施されている簾状文・列点文（・綾杉文）・波状文
- 4) 半截竹管の工具で施されている押捺竹管文・直線文・斜格子文・流水文
- 5) 櫛・竹の工具の先端部で土器に穿孔されている刺突文・円孔文
- 6) 粘土塊が貼り付けられている円形浮文・貼り付け穴帶文・棒状浮文
- 7) 指で施されている指頭圧痕文
- 8) ナデで施されている凹線文

これらの文様はそれぞれの部位に単一の文様が施されているもの（單）、複数の文様の組み合わせがある程度バタン化しているものと、そうでないもの（複）がみられる。

2)・3)の施文具による文様のなかで直線文・波状文・簾状文は土器に向かって、左まわりに施されており（櫛描き文A種）、扇形文・列点文は土器に向かって右まわりに施されている（櫛描き文B種）²³。直線文・波状文・簾状文・扇形文・流水文は縦位方向の施文もみられる。次に文様別、時期別に施文されている土器の部位などをみていく。

・刻み目文=刻み目文は繩文時代の土器から古墳時代の土器師まで施されている。刻み目文は口縁部や端部、貼り付け凸帶文上にヘラで縦位に刻みを入れてから施文具を横方向に移動させている。文様の下位には刻み目文と等間隔に細い線の工具の「当たり」の跡が見受けられる。ヘラ圧痕文は甕の胴部などに押捺しているものである。

中期一(单)壺A. 受け口壺.鉢A・B.無頸壺A・B.壺蓋.甕Bの各口縁端部、脚部の裾端部（中期初めのものに多い）。

壺A. 受け口壺の頸部下位。

(複)壺A. 受け口壺.鉢Bの口縁端面に櫛状か板状の施文具による簾状文・列点文との組み合わせ、頸部下の貼り付け凸帶文の上に付加されている。

鉢Aの口縁端部の内外面に刻み目文が施され、外面のすぐその下部に櫛描き

直線・簾状文などと組み合わせ。

後期一(単)壺A.鉢A.器台の口縁端部、壺の胴部。

(複)壺、器台口縁部に沈線文と刻み目文・円形浮文と組み合わせ。壺A.受け口壺の頸部下の貼り付け凸帯文の上に付加されている。壺肩部にヘラ刻み目文、つづけて胴部に直線文・波状文との組み合わせ。

・直線文=弥生前期の土器にはヘラ描きによる沈線文がみられる。古段階では1本であったものが中、新段階と時期が新しくなるにつれ本数が増加している。

弥生中期以降には半截竹管・櫛状・板状の施文具で描かれている。

中期一(単)壺、鉢、無頸壺の頸・胴部(中期初めの土器に多い)、細頸壺の口頸部。

(複)壺、鉢、無頸壺の頸・胴部に櫛描き波状文・扇形文と組み合わせ。

後期一(単)脚部の柱状部にヘラ描き沈線。

(複)壺、器台口縁部に沈線文と刻み目文・円形浮文と組み合わせ。壺肩部にヘラ刻み目文、つづけて胴部に波状文との組み合わせ。

・扇形文=弥生中期の初めごろの土器に櫛描きによる扇形文が多用されている。その他の各種の櫛描き文と組み合わせられているが、文様の間、文様帶の最下端部、文様帶の上面に一列あるいは継位に重ねられているものなどもみられる。

中期一(単)壺の口縁部内面、受け口壺の口縁部、鉢Bの口縁上端面にみられる。

(複)壺の口縁部内面、受け口壺の口縁部、壺、鉢、無頸壺の胴部に櫛描き直線文・簾状文・波状文と組み合わせ。

・波状文=弥生中期初めから後期の土器、古墳時代の土師器・須恵器の口縁部や胴部などに施されている。

中期一(単)壺口縁部内外面にみられる。

(複)壺口縁部のヘラ刻み目文、壺、細頸壺、鉢Aの頸胴部の櫛描き直線文と組み合わせ。

後期一(単)壺口縁部内外面にみられる。

(複)壺肩部にヘラ刻み目文、つづけて胴部に直線文との組み合わせ。

・簾状文=弥生中期初めの土器には櫛描き直線文が多用されているなかで頸部下などに1帯だけが簾状文のもの、また直線文の途中で休止してできる幅の広い簾状文が施されているものなどがみられる。中期後半の時期の土器には施文具が櫛状の工具から板状のものにかわる。

中期一(単)壺A.B.受け口壺、水差し、鉢B.無頸壺Bの口縁部・頸・胴部にみられる。

(複)壺口縁部にヘラ刻み目文・刺突文、受け口壺の口縁部に櫛描き扇形文・列点文・刺突文、壺A.細頸壺、水差し形土器、無頸壺A・Bの頸胴部に直線文・扇形文・列点文・流氷文・円形浮文と組み合わせ。

・列点文=櫛状か板状工具の先端部による押捺施文である。土器の表面にごく狭いピッチの押捺で一周巡らされている。中期前半の土器には少ない文様で、文様のピッチも広い。中期後半の土器には多用され、文様のピッチは狭くなっている。

中期一(単)壺、鉢B.無頸壺B.高杯Bの口縁部(中期前半はヘラ圧痕文が施された部位、後半には櫛状の工具が使われている)壺・器台の口縁部の内面、水差し型土器、壺Aの口頸部にみられる。

(複)受け口壺の口縁部に波状・簾状文、細頸壺の口頸部に簾状文・円形浮文、壺

- Aの胸部に簾状文・流水文・円形浮文、鉢Aの体部に直線文、鉢B体部に簾状文(中期前半には扇形文)と組み合わせ。
- ・流水文=繩文時代からみられる。弥生中期の流水文は前半には横位のもの、後半には縱位のものが施されている。
 - 中期一(單)鉢Bの体部にみられる。
(複)細頸壺の胸部に簾状・列点文と組み合わせ。
 - 同心円文=櫛描きの施文具を回転させたもの、後期では太さの異なる2種類の竹管の押捺による。
 - 中期一(單)壺A(胎土がc類のものに多い。)の口縁部内面にみられる。
 - 後期一(單)壺Aの口縁部内面にみられる。
 - 斜格子文=櫛状・ヘラ状・半截竹管状の工具による施文で出土量は少ない。
 - 中期一(單)壺Aの口縁部にヘラ描き、受け口壺の口縁部に半截竹管状の工具による施文がみられる。高杯Bの口縁部にはヘラによる暗文で描かれている。
 - (複)壺Aの胸部に櫛描き波状文と、細頸壺の胸部に櫛描き簾状文・流水文と組み合わせ、半截竹管状の工具による流水文と組み合わせ。
 - 綾杉文=ヘラによるものは前期の壺などにみられ、中期には櫛描き列点文で施されている。
 - 中期一(複)壺口縁部の内面に列点文を交互に方向を変えて施され、その上に円形浮文を付加する。細頸壺の胸部に列点文による綾杉文を、胸部中位に流水文を組み合わせ。
 - 竹管文=竹管状の工具による押捺の施文法であるが限られた器種にみられる。
 - 中期一(單)台付き鉢の脚部、壺蓋、甕の口縁部にみられる。
 - 後期一(單)壺の口縁部外側にみられる。
(複)壺、器台の口縁端部に刻み目文、端面にあるいは端面の凹線文上の貼り付け円形浮文に押捺されている。
 - 指頭圧痕文=指による押捺が横方向につけられている。
 - 中期一(單)壺頸部下に押捺による施文がみられる。
(複)甕口縁部下、壺頸部下の粘土貼り付け文の上に押捺により施されている施文と組み合わせ。
 - 凹線文=指ナデによる横方向の施文法。弥生中期後半に目立って多くみられる。
 - 中期一(單)壺の各器種、水差し型土器鉢、高杯、甕の口縁部、器台の柱状部にみられる。
(複)鉢の体部に簾状・波状、器台の口縁部に円形・棒状浮文と組み合わせ。
 - 後期一(複)壺、器台の口縁部に押捺竹管文が施されている円形浮文と組み合わせ。
 - 刺突文=植物纖維の棒状を器面に突き刺す施文法で、中期後半に多くみられる。
 - 中期一(單)壺A、甕の口縁端部にみられる。
(複)壺A、受け口壺、鉢Bの口縁端部に簾状文と組み合わせ、受け口壺の口縁部に簾状文・列点文・扇形文と組み合わせ。
 - 透かし文(円窓)=脚部などの器面がヘラ状工具で切り取られた円窓のもの、棒状の工具を刺突する円孔文がある。
 - 中期一(單)台付鉢の脚部に小円孔、台付鉢の脚部、器台に円窓風の透かしが施されている。
 - 後期一(單)器台の筒部に小円孔が施されている
 - 円形浮文=扁平に丸められた粘土が貼り付けられたもので小粒のものと、やや大きいも

のがみられる。

中期一(単)壺A・Bの口縁部内面に施されている。

(複)壺A・Bの口縁部内外面、胴部の波状の簾状、列点文のいずれかの上に、受け口壺の口縁部、細頸壺の口頸部、胴部の簾状文、列点文の上に数個ずつを1単位にして何組かまたは1個ずつが等間隔に貼り付けられている。

後期一(単)壺Aの口縁部にみられる。

(複)壺の口縁部の波状文の上に、壺、器台の口縁端部に刻み目文、端面の凹線文上に竹管文を押捺したものが貼り付けられている。

・貼り付け突帯文=繩文時代晚期の土器から古墳時代の土師器にまでみられる。刻み目文との組み合わせが多くみられる。

中期一(複)壺A・鉢・壺の頸部下に施されている貼り付け突帯の上に刻み目文が組み合わせ。

後期一(単)壺の頸部下に断面三角形・方形の貼り付け突帯文がみられる。

(複)壺の頸部下に施されている貼り付け突帯の上に刻み目文が組み合わせ。

・棒状浮文=弥生前期の壺などにみられるが、弥生中期後半の鉢などに縦方向に貼り付けられている。

中期一(複)鉢Bの体部の簾状文、列点文の上に横方向に刻み目文が施されている棒状浮文と組み合わせ(出土例は少ない-248)。

・鋸歯文=三角形にヘラで囲われたなかにヘラによる斜めの平行線が刻まれている。

中期一(単)中期の高杯の脚部にみられる(出土例は少ない-図版23の中央)。

・暗文=中期の土器の文様間を横方向にヘラで磨きがかけられているものが多い。また施されてる文様の上にヘラ状工具で縦位の磨きが重ねてかけられているものがある。

中期一(複)壺胴部の波状文・扇形文・直線文の上に、細頸壺、水差し型七器の胴部の流水文の上に、鉢Bの体部の簾状文の上にそれぞれ重ねてヘラ状工具で磨きがかけられている(出土例は少ない-234)。

後期一(単)高杯の内外面にジグザグ風に、内面に放射状に施されている。

・渦巻き文=ヘラによるもの、叩き目で施されているものがある。

後期一(複)ヘラで同心円文が描かれ、わらび手文風に施されている。赤色顔料で彩色されている(出土例は少ない-図版11-右列4番目)。

・記号文=土器の文様とは別に器表面の1箇所にヘラ記号文や竹管記号文、ヘラで絵画がえがかれているものがある。

中期一(単)鉢や壺の口縁端部に焼成後の「小」記号(矢印風-677)、壺Aの口縁部内面に「矢」印型記号文がみられる(-45)。

通常、絵画は中期の頸部下に貼り付け突帯が施されている壺の胴部、壺の胴部に描かれているものが多い。

後期一(単)長頸壺の口縁・胴部にジグザグ状の記号(蛇の絵と考えられる-908)、壺胴部に2本線による孤線-905、蛇状の孤線-726、「矢」印状型の記号文がみられる。

その他の土器装飾法

・彩色=弥生時代の赤色顔料による彩色が施されているものは前期と後期の壺などによくみられる。中期の土器に痕跡が残しているものは少なく、内面に赤色顔料が付着しているものはみられる。

後期一(複)壺、器台の口縁部の貼り付け円形浮文や凹線文・刻み目文・竹管文などが施されて

いる部位や記号文などが赤色顔料で彩色されているものがみられる(図版11)。

3) 諸々の土器について

・施文されていない土器；弥生中期初頭の土器には、同じ形態でも文様をもつものと文様のないものがあり、鬼虎川・恩智遺跡などでもよくみられた³¹。中期中頃の土器は櫛描きで施文されたものが圧倒的に多い。そのなかで施文されていない土器は甕と同じ機能をもつと考えられている壺Dをはじめ、短頸壺・鉢A・高杯Aの器種などがある。中期後半後葉の土器にも通例では施文されているものが多いが、受け口壺795・台付無頸壺245・無頸壺B915・鉢B173には施文がみられず、いずれも全面はヘラ磨きで仕上げられている。中期末には「飾らない土器」として「西ノ辻N式」と呼ばれているものが周知されている。後期になると文様が施されない土器のほうが多くなる。後期の土器の施文は、最初にも記したが、器種は限られ、施文の部位は局所的で、文様の種類など画一化したものになる。土器の胴部などには文様ではなく、一面(土器の正面といえるか?)にヘラ記号(905)、竹管状の押捺記号文、1~数個の貼り付け円形浮文(904)、絵画(726・908)などをつけたものがみられる。

・稚拙にみえる文様；中期の土器のなかには丁寧にかつ巧みに施文されたものと、稚拙にみえるものがある。施文が稚拙であることが当時の人たちにとってどれだけの意味があるのか疑問であるが、技法的にみると、中器の土器つくりに使われ始めたと考えられている回転台の使用との関連が大きいだろう。作り手のくせもあるだろうが、回転台を回転させる技術・回転台の工夫など、時期差と関係することも考えられる。櫛描き文、凹線文の最初と最後の繋ぎがかなり食い違っているもの、重なっているもの、櫛描き文が部分的にしかついていないものなどがある。これらは施文と土器を回転させる早さが適宜に協応できなかったためにおこると考えられる³²。そのほか、中期後半の壺の頸部などに器面に縦位の長い板状工具がうまく当たらないため簾状文の上下の横線のみが施されているものがある。

・出土例のすぐない土器；土器にはそれぞれの時期の地元産、あるいは近郊から運ばれたものの、他地方の影響を受けた技法が取り入れられているものなどがある。それぞれ、土器の形態・調整・施文にはほとんど時期毎に地域毎にゆるい規格性がみられるが、なかには規格から全くはずれたものがみられる。

施文の例では壺口縁部の扇形文の間に縦位の簾状文が施されているもの(図版23-1右上)、列点文と扇形文を同一上の施文帶に巡らされているもの(図版23-右上)などがある。半截竹管を綾杉状に押捺しているもの、幅の狭い縦位のハケ目の上に横位の直線文が引かれて簾状文風に仕上げられ、直線文の間をヘラ磨きしているもの(339)、櫛描き文の1帯のなかで簾状文・列点文・扇形文が混ざっているもの(図版23-右2番目)などがあり、施文具を使っての個人的な「遊び」あるいは「試し」のようにもみえるが、文様の組み合わせとしてバターン化しなかったのだろう。撒入品と考えられる壺の頸部下に貼り付け突帯文が施されている土器が数点みられる。調整の例では、器壁の薄い体部に断面方形の短い口縁部が貼り付けられた甕556のような、外面肩部には横方向のヘラ削り、胴部は縦方向の磨き、内面の肩部には横方向のヘラ磨きをしているものがある。撒入品のなかには、紀州系の甕と考えられるが、甕の肩部からヘラ削りがそのまま残されているもの(図版25-2)がある。量的には数が少ないものである。その他中期の資料では、脚部風に造られた土製品(第6図の22)は類例がみられず祭祀用に使用されたと考られるものや、壺45の口縁部内面、壺677の口縁端面の文様の上に焼成後、記号文がつけられているものがある。

・木葉痕が残る土器；土器の底面にみられる木葉痕は中期前半と後期の土器に多くみられる。ほとんどの資料は底部のみしか残存していないが、壺の底部と考えられる。これらの底部は中期の時期のものでは胎土が生駒西麓産以外のものに多くみられる。

・煤が付着している土器；日常的に煮炊き用に使われる壺の外面には煤が付着し、なかには内面に焦げ付きが残っているものがある。甕蓋には外面の大部分と、内面の周縁に煤が付着している。その他、煤が付着している器種には壺D、高杯などの脚部があげられる。壺Dは壺と形態的には異なるが文様が施されないという共通点がある。第7次調査で方形周溝墓に伴って出土した壺Dは数点あるが、胎土が生駒西麓産以外のもので、色調は赤味がかったものが多く注意を引いた²。高杯の脚部には脚部内面の煤の付着状況が甕蓋と同じものがあり、高杯の杯部が欠けたあと、柱状部を把手代わりにして脚部を蓋に転用されたと考えられる。機能的には貯蔵、盛り付けなどの容器と考えられている器種にも煤が付着していることがある。6(炭層)層内から出土している中期後半の時期の一括性の高い資料の各器種の外面にも煤が付着している。日常容器のものがなんらかの祭祀用に使われ、廃棄されたものと考えている。大庭氏は壺の煤の付着具合から日常の煮炊き用か祭祀用に使用されたもののかの研究をなされている²。

・焼成後の穿孔土器；方形周溝墓の盛り土や周溝内から出土した土器には腰部から底部に焼成後に孔が穿たれているものが多くみられる。これらの土器は祭祀用、供獻用などが考えられる。埋没谷内からの出土資料には、6(炭層)層内から小円孔が穿たれた壺の底部238がある。ほかに機能上、壺の底部(図版41-1)などに穿孔しているものがあげられる。

・風化した土器；土器の器表面の調整や文様が部分的に磨滅、風化しているものがよくみられる。通常、壺などは二次焼成のために器面が剥離していることが多い。鉢2053は口縁部内外面に煤が付着し、体部外表面が剥離しているものである。煤が付かない土器でも、壺2051は内外面ともに、鉢B2049・2050は外面～口縁部にかけて、蓋2048は外面の器表面が殆ど剥離してしまっている。

4) 中期～後期の各時期別の土器について

一中期初頭の土器つくりには他地域との交流が多くみられる。一

弥生中期の土器について形態的に分類・編年を試みた際に、各器種のなかで口縁部がそのまま終わるものは古い属性をもつものとして0を採用し「・0」＝「壺A 0・鉢A 0」と呼称した。このような中期中頃の口縁部をもつ土器は胎土が生駒西麓産以外のものに多く、西ノ辻遺跡第7次調査・鬼虎川遺跡第32次調査の方形周溝墓が検出された地区の資料でも同じ傾向がみられた。また亀井遺跡では中期初頭の土器には地元産と生駒西麓産の土器がほぼ同じ割合でみられることが報告されている³。この状況は中期初頭頃、各地ともかなり他地域との交流が盛んであったといえるのではないだろうか。これらの土器の文様は櫛描き文が出始めた頃のもので、胎土に関係なく、直線文・波状文・扇形文と文様の種類は少ない。櫛描き文の、さらには回転台の発祥地との関連性があるかもしれない⁴。中期初頭の大和型壺の属性である口縁内面の粗いハケ目調整が施されている壺は生駒西麓産の胎土の土器にも多くみられる。受け口壺129・312などにも同じ調整がみられ、外面上には稚拙にみえる簾状文が施されている。

一中期中頃～後半葉の土器つくりは地元の技法が中心になる。一

この時期の土器の特徴としては、生駒西麓産の胎土の土器がほとんどを占めていることがあげられる。各器種の文様には櫛描き簾状文が通常になり、中期初頭の土器に扇形文が施さ

れていた部位には列点文が施されている。後半前葉には凹線文が施されている土器が、生駒西麓産の胎土以外のものに少片でみられる。土器の調整はヘラ磨きもハケ目も両方みられるが、ヘラ磨きが中心に施されている。中期前半の壺や壺などにみられた口縁部内面の粗いハケ目調整はこの時期には細かいハケメ調整に変わっている。

一中期後半後葉～中期末の土器つくりには他地域の技法が少し取り入れられる。一

河内地方のなかでもとくに生駒西麓地においては中期を通じて施文は櫛描文が主流である。施文具として中期に爆発的な使用がみられた櫛状の工具は板状のものにとって変わっていく。後半後葉には凹線文が生駒西麓産の胎土でつくられた鉢A・高杯Aに少量みられる。生駒西麓産の土器の口部などには櫛描き列点文が施されているものが多いが、生駒西麓産の胎土以外の土器の同じ部位には凹線文が施されている。口縁端部に刺突文だけが施されているだけで体部には文様のないものはあるが、文様が全然施されていないものは少ない。このように凹線文、あるいは文様のない土器が特に増える現象は見あたらない。この時期の土器は櫛描き(板描き)文が盛用されているなかに、凹線文が施されている土器と、文様が施されない土器が少量ずつ共存しているといえよう。土器の調整でも壺などに瀬戸内地方の削りの手法が外腹下半部に施されるものがみられたり、すでに中期前半に大和地方でみられた叩き目による調整法が中期末に影響を受け、外面に叩き目が施されたものもわずかにみられる。これらの技法は中期の櫛描き(板描き)文、ヘラ磨き調整が多用されていた時期にはなかなか定着しなかったものである。

一中期終末から後期の土器つくりは地域色がなくなる。一

後期の土器は形態・文様・調整ともに地域色がなくなるが、機能性が重視されるようだ。中期の初めの土器のなかで文様のない壺D・鉢A・鉢Cはそのまま後期まで踏襲されている。中期中頃に多くみられた水差し形土器、無頸壺、鉢B、高杯Bは、後期にはなくなり器台、長頸壺、有孔鉢がとてかわる。土器の形態は丸みをおびた胴部に口部がつく新たな形が造りだされている。文様のある器種は壺A・器台・高杯に限られ、施文は口縁部、頸部下、脚部と局所的な部位になる。中期の時期に盛用された櫛状あるいは板状工具による各種の施文はほとんどなくなり、波状文のみがみられる。文様の種類には波状文をはじめ、ヘラ描き、沈線文、ヘラ刻み目文、凹線文、貼り付け円形浮文、貼り付け突帯文、透かし円孔文、押捺竹管文などがあげられる。そのなかでも刻み目文は縄文晩期から弥生前期に盛用され、さらに中期全般、後期の土器にも継続する施文である。赤色顔料の彩色は弥生前期の土器、さらに縄文土器までさかのぼってみられるが、弥生中期の土器にはほとんどみられなくなり、後期の壺・器台にまた盛用されている。この2つの器種は高杯とともに祭祀に多用されるものもある。後期の土器の成形には分割手法が多くみられる。調整では、文様が施されない土器はヘラ磨きで仕上げられているものが多く、中期の土器と異なり殆どが縦方向に施されている。横方向の叩き目がみられるものは回転台の使用末期の頃のものだろうか。中期前半の時期には生駒西麓産の胎土以外の土器が多くみられたが、後期の土器が各地域とも齊一化していくのは、中期前半以上に他地域との交流が活発になり、機能性がいかされた土器が定着し増加したともいえよう。

中期終末から後期の土器製作は簡略化する様相がみられるが、中期前半の土器と共通する点があげられる。

1) 各器種の口縁部の造りはそのまま納められているものがある。

2) 口縁部の中心が器体の中心を通っていないものが多い。

- 3) 後期の大型壺のように施文されていない土器が、中期前半の壺Aの大型品のなかにもみられる。また後期の長頸壺に似た形をしている、中期前半の丸みを持つ胴部に長い頸部をもつ壺などには施文のないものがある。
- 4) 工具を使用する文様に直線文・波状文がみられる。中期初頭の文様は稚拙に施されており、後期の文様は粗雑に施されている(すでに中期末の土器にもみられる)。
- 5) 中期中頃～後半末葉の土器の器壁の薄さに比べると全体的に器壁が非常に厚い。
- 6) 壺のヘラ磨き調整は縱方向のものが多い。
- 7) 底部は厚く上げ底風のものがある。
- 8) 底面に木葉痕が残されている。

以上の共通点は土器製作時に、中期初めの回転台を使う技術が十分駆使されていない頃と、中期末から後期にかけて回転台から離れていく頃の手法上からくるものと考えられる。

大和地方での中期前半にすでにみられた叩き目の技法は土器の回転技術から離れた製作手法である。後期になって各地域でこの手法が一般化するのも大和地方にみられた叩き目手法が再び復活したものかもしれない。

土器の出土状況から一括りの高い資料を同時期のものと判断するのに、個々の土器に、手法のくせをみつけると容易である。森井氏が中南河内地方の弥生中期の壺Aの編年をされた成果は非常に参考になる³。ほぼ同時期と考えられる壺Aのグループのなかでも胴部の張り出す部位の高低差で少しずつ形態の違いがみられる。これは厳密にみれば時期差になるかも知れないが、製作者の違いかもしれない。

埋没谷(溝3)の第6*(炭層)層内から出土した遺物は中期後半のなかでも後葉の同時期の資料とおもわれる。これらの土器は殆どが生駒西麓産の胎土で、板状工具による縦状文が多用されているものが大半を占める。その他口縁部に列点文が施されているもの、短頸壺、文様のない無頸壺の土器など中期後半のなかでも新しい属性をもつものがある。一方、甕などには中期中頃によくみられる手法のものがみられ、甕の手法は持続性が強いとも言える。平野部の遺跡ではこれらの土器には凹線文が施されているものが共存する例が多いが、6*(炭層)層内から出土した資料には見あたらなかった。この資料は先にも記したように形態、施文、調整など共通する手法がみられることから同じ製作集団による遺物として、西ノ辻遺跡の土器編年の際の好資料になる思われる。

中期後半葉の生駒西麓地においての土器つくりは、縦状文を中心施すグループを中心に、中期前半の土器にみられたように施文しないグループ、瀬戸内地方の影響を受けた凹線文を施すグループ(あるいは搬入者)の三グループがそれぞれ間わっていたのだろう。三者の土器とも同時期のものと考えられる。

第4層内からは後期初めの土器のみが出土した。壺D・短頸壺・無頸壺・高杯A・高杯B・鉢Cなどは小振りで完形になるものが多い。これらの土器の外面の調整は全面がヘラ磨きで仕上げられ、施文がほとんどみられない。この資料は一時期の一括りのあるものと考えられる。

以上、弥生土器の中期から後期にかけての変遷をみてきた。この変遷は当時の自然、社会動向をもとに考えてみなければならないが、土器を中心にみると、生駒西麓地においては、すでに明らかのように中期の土器の調整はヘラ磨き、施文は縦状文を主流とする製作手法の堅固性が強いことが認められる。中期の土器つくりには、回転台が使用されていた。後期土器には回転台が放棄され、施文が限られたものになり、彩色された土器や記号文、絵画など祭祀

用の土器が増加していく状況がみられた。これは次の古墳時代への過渡的な生活様式の一侧面を表しているといえる。

先に西ノ辻遺跡第5次調査の遺物を整理したなかでの成果の一部を発表したが、ようやく全体の概要を報告する事ができた。弥生中期～後期の土器の編年については、本調査以後も、今日まで多くの方々の研究成果が発表されている³¹。またその後の各西ノ辻遺跡調査で報告されている成果などを、今回の大幅に遅れている報告書では十分生かせず、資料紹介に終わったことを反省し、今後さらに検討していきたい。

VII まとめ

1. 遺構

今回の調査で検出された南東から流れる埋没谷(谷4)は、その後の西ノ辻遺跡第17・22・23次調査で、北側のもう1本の谷(谷1)と合流し、蛇行しながら北西に流れしていくことが明らかになった。調査地の東側の西ノ辻遺跡第10・16・21次調査でも谷1・2が検出されている。

埋没谷の上層部の南部から中世の井戸2基を検出し、そのうち1基の井戸3からウマの骨が出土した。その上層部の北側には中世に整地されて柱穴などの遺構がみられた。南側には南北東西方向に流れる2本の溝、壠状の遺構や、杭列が検出された。

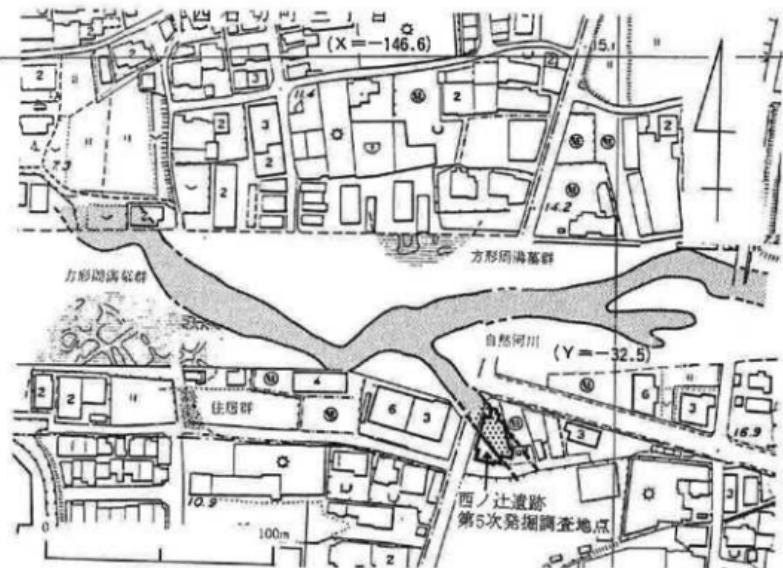
2. 遺物

今回、多量に出土した遺物のなかで特に弥生土器については、V章で詳しく述べている。

かつて弥生時代中期末の標識にされた西ノ辻N式、後期初頭の標識にされたI式の出土地点は第5次調査地点から100m以内にある。後期前半から後半のD・E・F式などの出土地点は第5次調査地点のすぐ東南にあたり、埋没谷(第76図)が続く場所であったかもしれない。

第5次調査の後に調査された公共事業の発掘調査地点からも厖大な遺物が出土している。今回は土器を中心についたが、いずれ機会があればこれらの遺物についてじっくり検討したい。

埋没谷内からは、多くの自然遺物とともにパン状の炭化物が出土した。ほかに特記すべき遺物は「培塿」である。先にも記したが遺物の洗浄の際に発見したため断定はできないが、後期の土器が共伴しており、その時期のものであれば弥生時代鉢物用の遺物として貴重なものになる³⁾。



第76図 西ノ辻遺跡弥生時代中期遺構、埋没谷概略図³⁾

注・参考文献

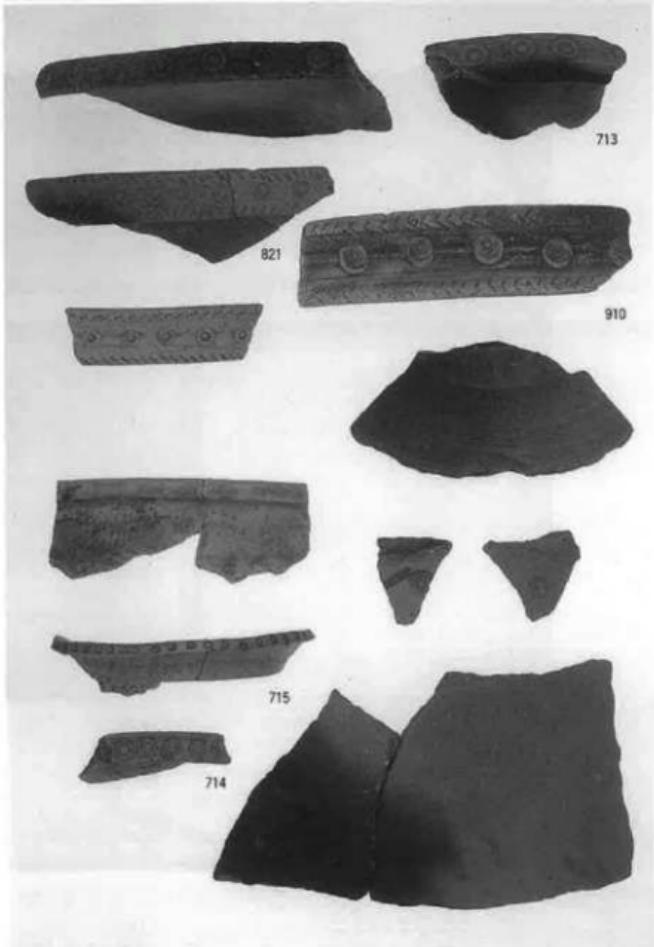
- 注1 1986 萩田昭次 西ノ辻遺跡「東大阪市文化財協会ニュース」vol.2、No.1 財団法人東大阪市文化財協会 p1~5
- 注2 1995 中西克宏 「西ノ辻遺跡第30次発掘調査報告」財団法人東大阪市文化財協会 p3 第1表に第35次までの調査内容が掲載されている。
- 注3 1990 松田順一郎 西ノ辻遺跡の位置と環境「西ノ辻遺跡第21次発掘調査報告」財団法人東大阪市文化財協会 西ノ辻遺跡の地理的な環境について詳しく述べられている。p3~5
- 注4 注2と同書 第1図より
- 注5 1988 下村晴文・上野利明・菅原卓太・曾我恭子「西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡」 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会 p6 の第5図改変
- 注6 1992 芦本隆祐「西ノ辻遺跡第23次発掘調査報告」東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会 p13
- 注7 1996 財団法人東大阪市文化財協会「宮ノ下遺跡 第1次発掘調査報告」p34・35第26図-209
1999 藤城泰・三輪若葉・若松博恵 東大阪市の土偶・土製品「光陰如矢」萩田昭次先生古稀記念論集「光陰如矢」刊行会 第5次調査出土の土偶も集成されている。 p106
- 注8 1983 大阪市文化財協会 大阪市平野区「長原遺跡発掘調査報告」(仮称大阪市立第8養護学校の建設に伴う発掘調査報告書 図版42・93~148)
- 注9 1968 佐原真 瓢内地方「弥生土器集成本編」本編
- 注10 注6と同書 芦本隆祐 出土遺物・奥田尚 「土器胎土の砂礫種とその採取地」p138~153
- 注11 1994 曾我恭子 弥生土器について「西ノ辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書」財団法人東大阪市文化財協会 p39~47
- 注12 1973 瓢生堂遺跡調査会「瓢生堂遺跡Ⅱ」図版 65-123
- 注13 1999 曾我恭子 弥生時代中期後半の一時期の土器—西ノ辻遺跡(東大阪市西石切町3丁目所在) 第5次調査より—「光陰矢如 萩田昭次先生古稀記念論集」光陰矢如刊行会 p135~146
- 注14 1980 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ 藤原西辺地区内裏東外郭の調査」奈良国立文化財研究所学報第37冊 遺物番号741
- 注15 1999 芦本隆祐「岩滝山遺跡第5次発掘調査概要」財団法人東大阪市文化財協会 p21第17図-232
- 注16 1980 瓢生堂遺跡調査会「恩智遺跡」Fig.60-166
- 注17 1995 大阪府教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会「鬼虎川遺跡26次・西ノ辻遺跡18~20次 調査概要報告書」p114-314
- 注18 注6と同書 p87-763
- 注19 注14と同書 遺物番号924
- 注20 1992 金原正明・粉川昭平・太田三喜 モモ核を中心とする古代有用植物の変遷「日本文化財化科学会第9回大会研究発表要旨集」
- 注21 注11と同書
- 注22 注14と同書 遺物番号81・84
- 注23 1964 佐原真「紫雲出」 番川県三豊郡能間町紫雲出 弥生式遺跡の研究
- 注24 注11、注16と同書
- 注25 1986 曾我恭子 西ノ辻遺跡の櫛鑿文土器「東大阪市文化財協会ニュース」vol.1 No.4 財団法人東大阪市文化財協会 p5~7
- 1989 桑原久男 瓢内弥生土器の推移と画期「史林」72卷1号 史学研究会 京都大学

- 1976 山本雅靖 ヨコナデ調整手法についての二・三の問題 —西日本の弥生土器を中心として— 「大阪文化誌」第5号 翻大阪文化財センター p11~19
- 注26 注5と同書
- 注27 1992 大庭重信 弥生時代の葬送儀礼と土器「大阪大学侍兼山論叢」 第26号史学編 p88~114
- 注28 注5・11と同書
- 1986 広瀬和雄 弥生土器の編年と二、三の考察「亀井遺跡」 翻大阪文化財センター p247~264
- 注29 1992 若林邦彦 弥生土器櫛描文様に関する覚書 一その発生をどのように考えればよいのか— 「大阪文化財研究 20周年増刊号」 翻大阪文化財センター p23~36
- 1995 若林邦彦 弥生土器における櫛描文原体の地域性「研究紀要」vol.2 翻大阪文化財センター 研究助成報告 p22~34
- 注30 1982 森井貞雄 河内地方の畿内第III・IV様式編年の一視点「大阪文化誌」第15号 翻大阪文化財センター p16~25
- 注31 注13と同書 各諸氏の研究成果なども注(5)にあげている。
- 注32 2000 6月24日 朝日新聞夕刊記事 弥生後期の取瓶出土 寝屋川市楠遺跡から弥生後期、青銅器鋳造用の取瓶と土製鋳型外枠が発見されている。
- 注33 1989 吉村博恵・中西克宏 西ノ辻遺跡第23次発掘調査概報「翻東大阪市文化財協会概報集」財団法人東大阪市文化財協会 p24第14図に加筆



790

図版1) 右 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期の彩色土器:
第3層内-713~715、第1層内-821、上層内-910、
左 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期: 第2層内
「埴堀」790



713

910

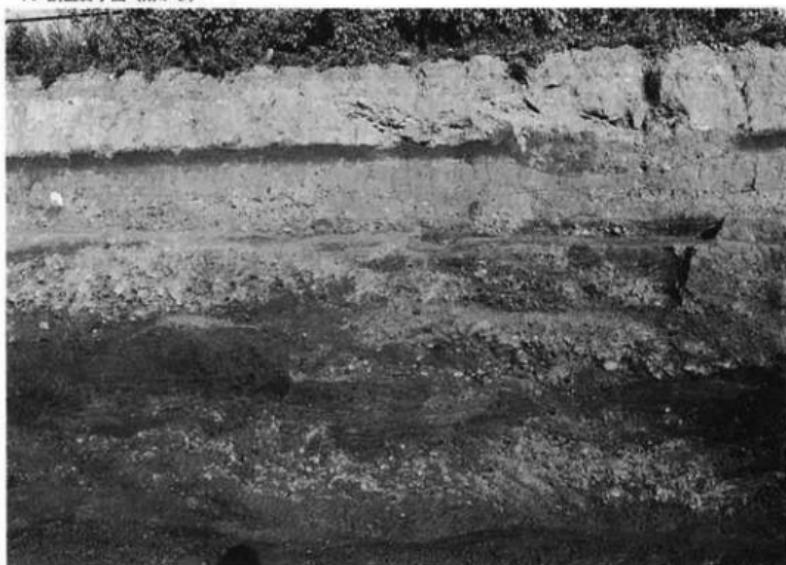
714

715

図版 2)



1. 調査終了面（南から）



2. 調査地北側断面



1. 埋没谷（溝 3） 実掘状況（北から）



2. 埋没谷（溝 3） 断面（北から）

図版4)



1. 埋没谷（溝3）内の後期土器出土状況



2. 埋没谷（溝3）内底部の木器出土状況



1. 埋没谷（溝3）内の弥生後期の土器出土状況

2. 埋没谷（溝3）の発掘調査風景

図版 6)



1. 溝2と井戸3検出状況（東から）



2. 溝2と杭の検出状況（北から）



1. 井軸用の材木、杭検出状況



2. 井戸と杭の検出状況

図版 8)



1. 遊橋裏剣風景（南から）



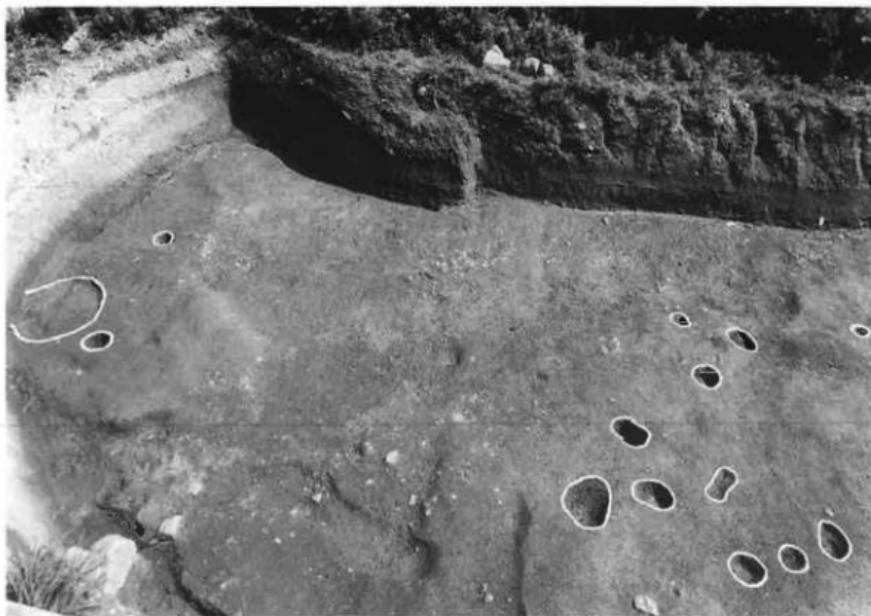
2. 銀倉～室町時代の土器出土状況



1. 室町時代の土師皿出土状況



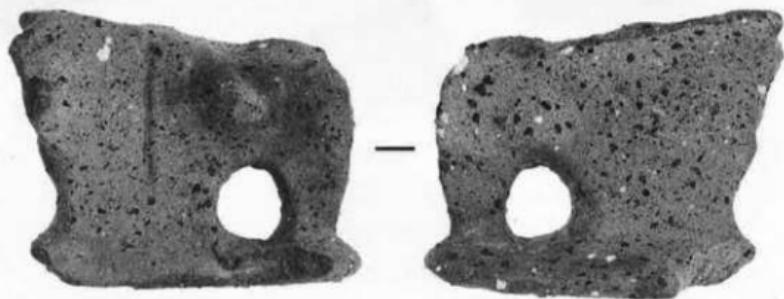
2. ウマの歯の出土状況



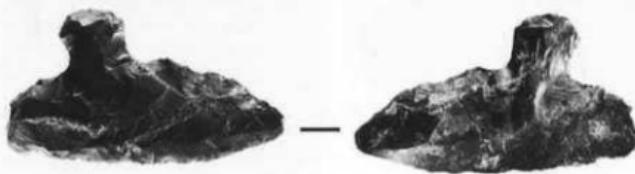
1. 室町時代の柱穴・落ち込み検出状況（西南から）



2. 室町時代の土坑1・柱穴・落ち込み検出状況（西南から）



1



2

埋没谷（溝3）内出土 繩文時代晚期土偶1・石匕2

図版12)



132



45*



47



45

埋没谷（済3）内出土 弥生時代前期土器：（上段）、弥生時代中期土器：第9層内-45・47 第7層内-132



161



182



161'



160



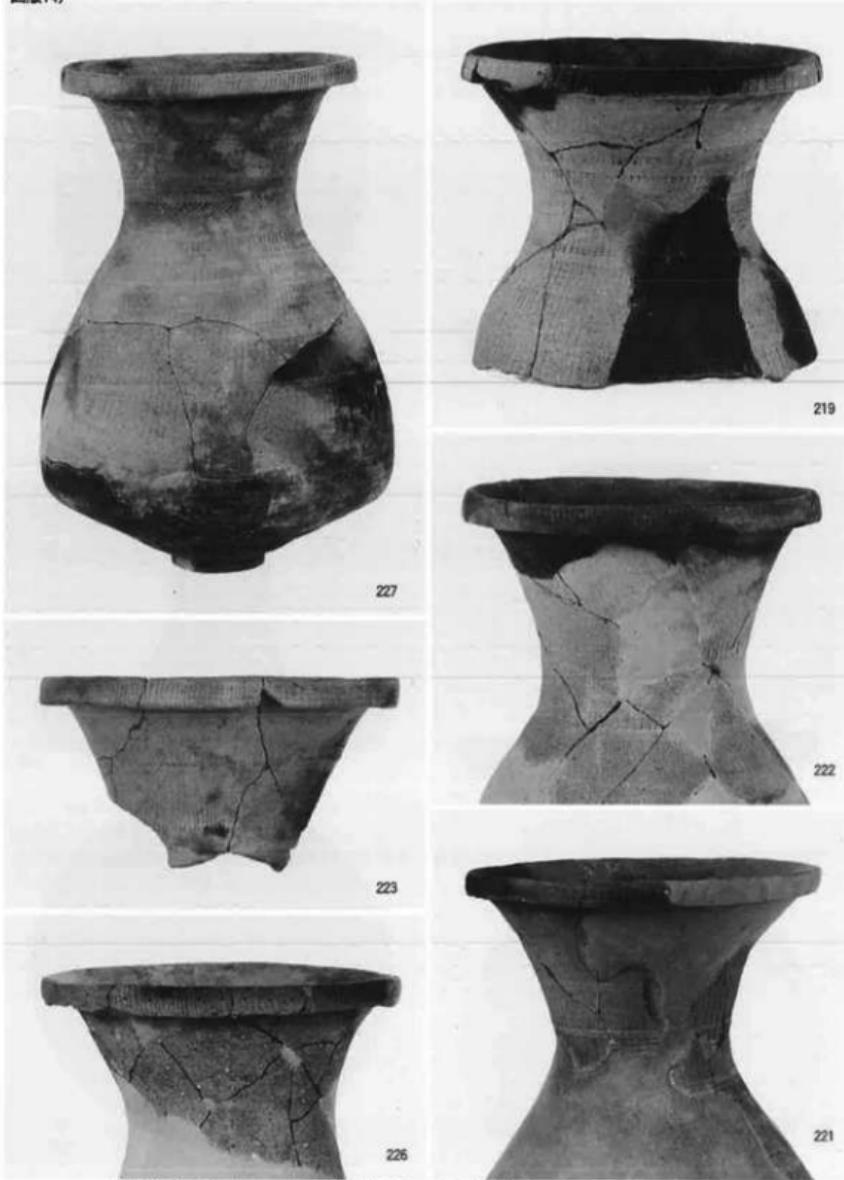
161''



160''

埋没谷（満3）内出土 猛生時代中期土器：第7層内-160・161・182

圖版14)



埠沒谷（溝 3）内出土 新石器时代中期土器：第 6（炭層）層内-219・221～223・225・227



234



233



230



231

埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器: 第6(炭層)層内-230・231・233・234



232



235



244

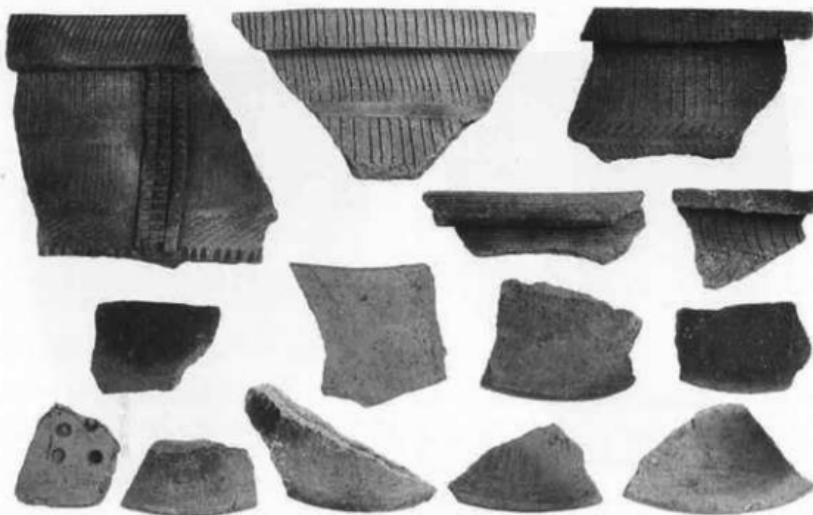


245

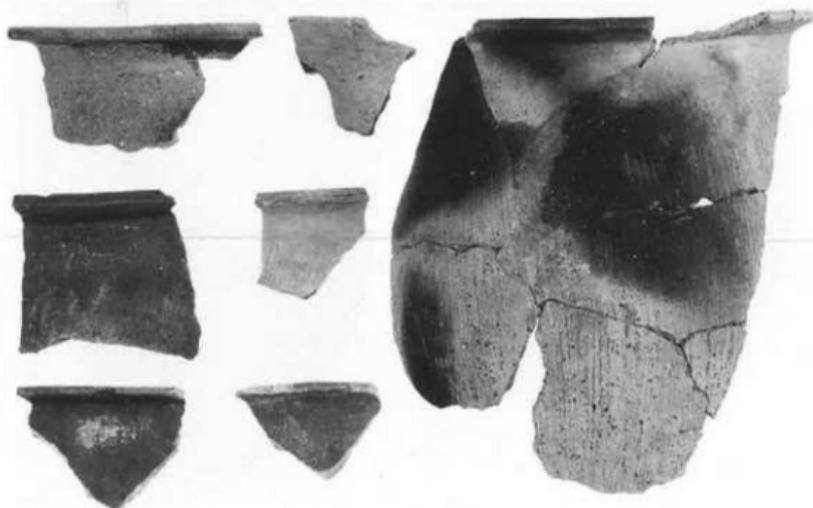


240

埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器: 第6(炭層)層内-232・235・240・244・245



1. 埋没谷（溝3）内出土 弥生時代中期土器：第6（炭層）層内（鉢・脚部）



2. 埋没谷（溝3）内出土 弥生時代中期土器：第6（炭層）層内（甌）



256



261



253



254

埋没谷（溝3）内出土 弥生時代中期土器：第6（炭層）層内-253・254・256・261



258



263



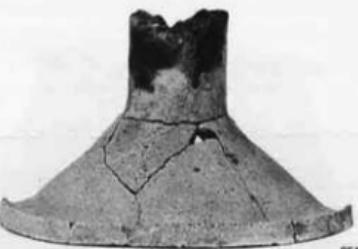
259



269

埋没谷（溝3）内出土 弥生時代中期土器：第6（炭層）層内-258・259・263・269

図版20)



251



243



249



250



265



262

埋没谷（溝3）内出土 弥生時代中期土器：第6（炭層）層内-243・249～251・262、第5層内-645



316



385



538



347



529



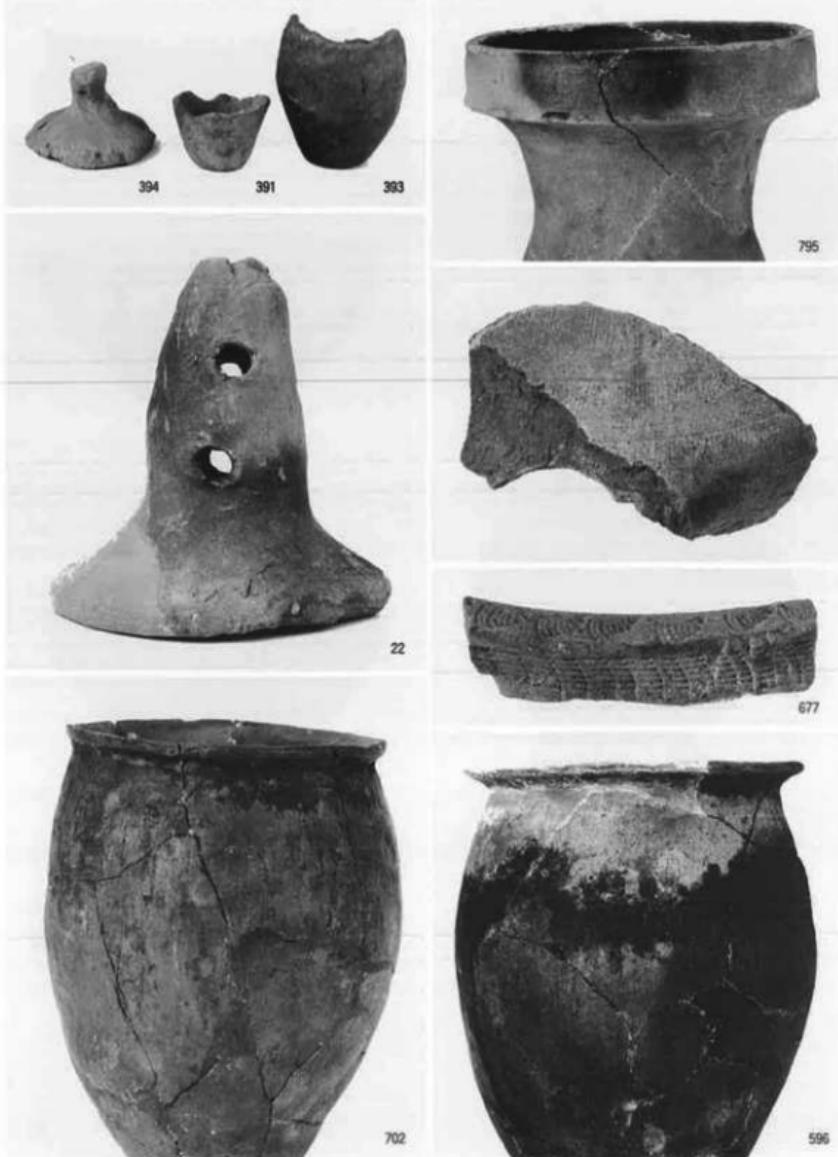
377



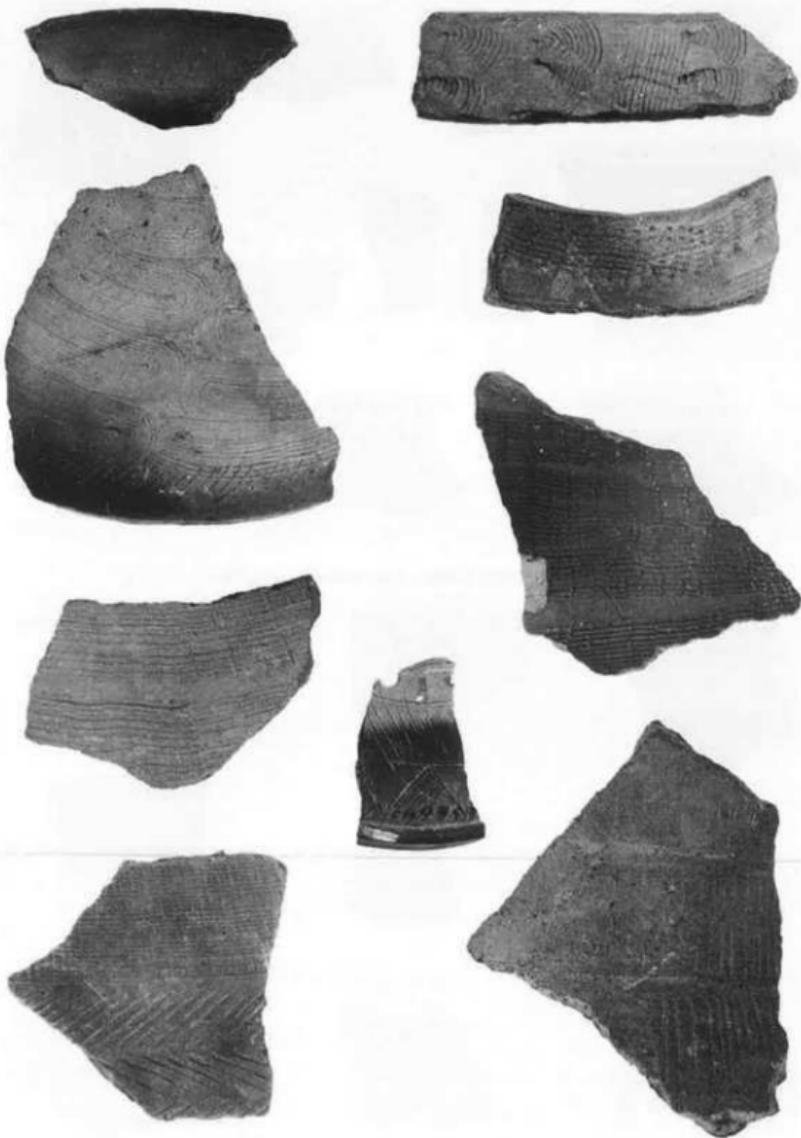
382

埋没谷（満3）内出土 弥生時代中期土器：第6層内-316・347・377・382・385・529・538

図版22)



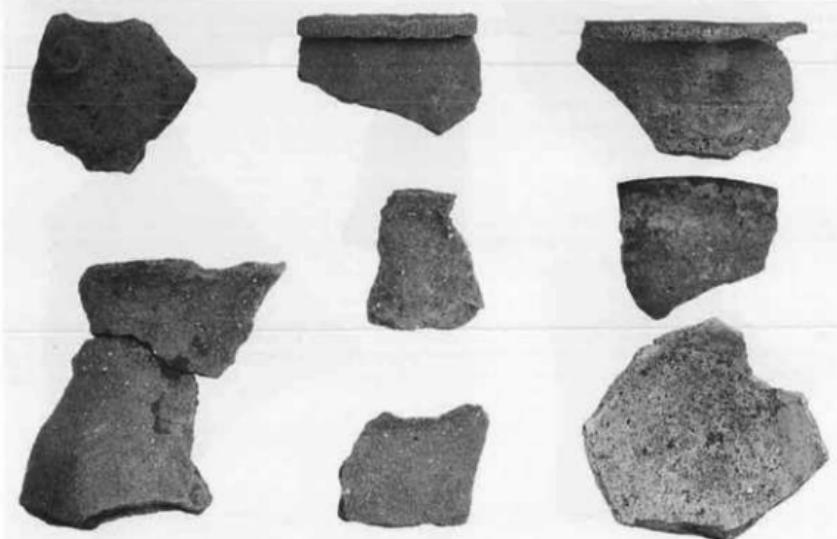
埋没谷(溝3)内出土
弥生時代中期土器: 第1層内-22、第7層内-391、第6層内-393・394、
第5層内-596、第3層内-677・702、第1層内-795、高熱により変形した土器-右上から2段目の土器



埋没谷（溝3）内出土 弥生時代中期の各種の土器文様片



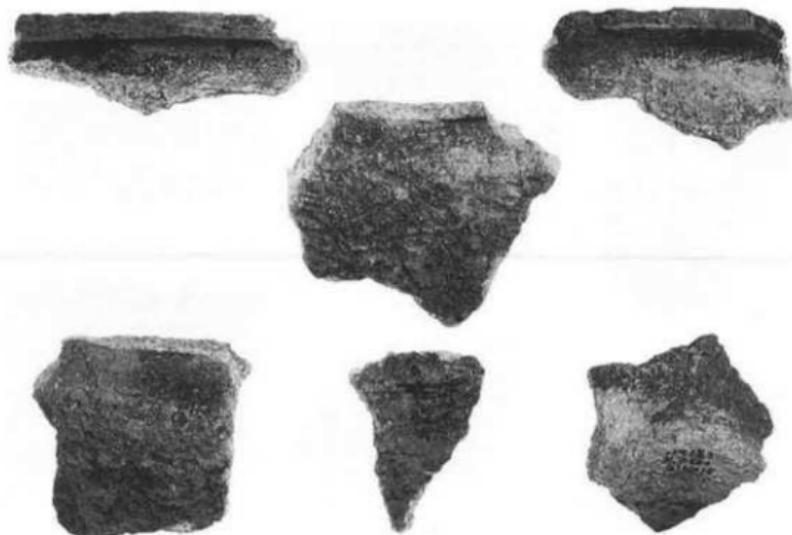
1. 埋没谷（溝3）内出土 弥生時代中期の外面がヘラ削り調整されている土器



2. 埋没谷（溝3）内出土 弥生時代中期の外面が剥離している土器



1. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期土器: 第6層内-裏



2. 埋没谷(溝3)内出土 弥生時代中期の各層内-紀州系裏

図版26)



1. 埋没谷（溝3）内出土 弥生時代中期：直口壺口縁部 第11層内10、第4層内658、第3層内679



2. 埋没谷（溝3）内出土 弥生時代中期：各層内（土器）、第6層内463



201



493



212



537



527



159

埋没谷(満3)内出土 弥生時代後期土器：第7層内-159・201・212、第6層内-493・527・537



551



570



574



569



573

埋没谷（溝3）内出土 弥生時代後期土器：第6層内-551・569・570・573・574



521



604



654



605



600



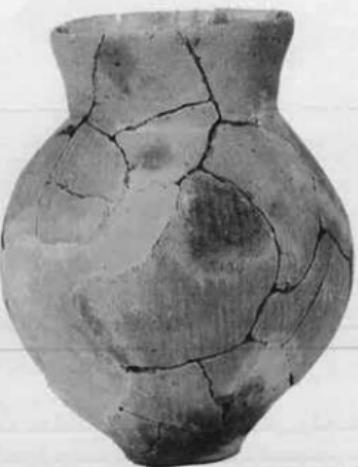
601



606

埋没谷(溝3)内出土 弥生時代後期土器：第6層内-521、第5層内-600・601・604～606・654

図版30)



602



620



611



616



617



615

埋没谷（満3）内出土 弥生時代後期土器：第5層内-602・611・615・616・617・620



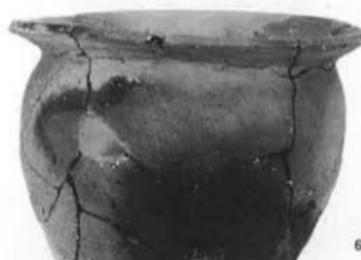
607



631



630



629



636



626

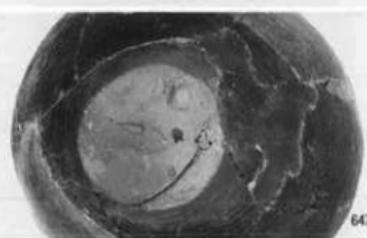
埋没谷（溝3）内出土 弥生時代後期土器：第5層内-607・626・629・630・631・636



647



644



647



648



649



652

埋没谷（満3）内出土 弥生時代後期土器：第5層内-644・647～649・652



659



657



603



660



661

埋没谷（溝3）内出土 弥生時代後期土器：第5層内-603、第4層内-657・659～661



656



665



667



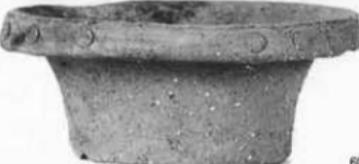
665



669



720



601

埋没谷（満3）内出土 弥生時代後期土器：第5層内-601、第4層内-656・665～667・669、第3層内-720



739



768



773



758



756



726

埋没谷（溝3）内出土 弥生時代後期土器：第3層内-726・739・756・758、第2層内-768・773



818



823



921



798



825



819



824

埋没谷（溝3）内出土 弥生時代後期土器：第1層内-798・818・823～825、上層内-921



786



875



785



784



788

埋没谷（清3）内出土 弥生時代後期土器：第2層内-784～786・788、上層内875

図版38)



埋没谷（溝3）内出土
弥生後期土器：上層内-873・874・908・915・922・923



907



904



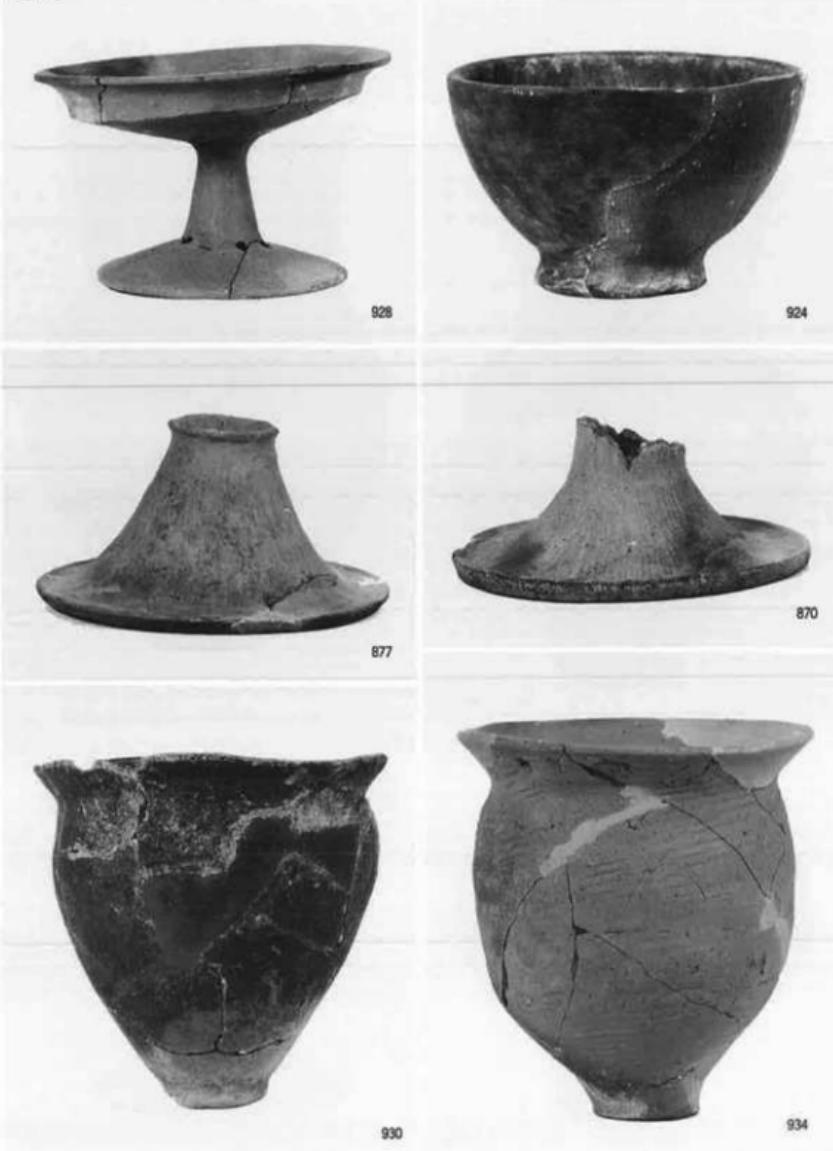
905



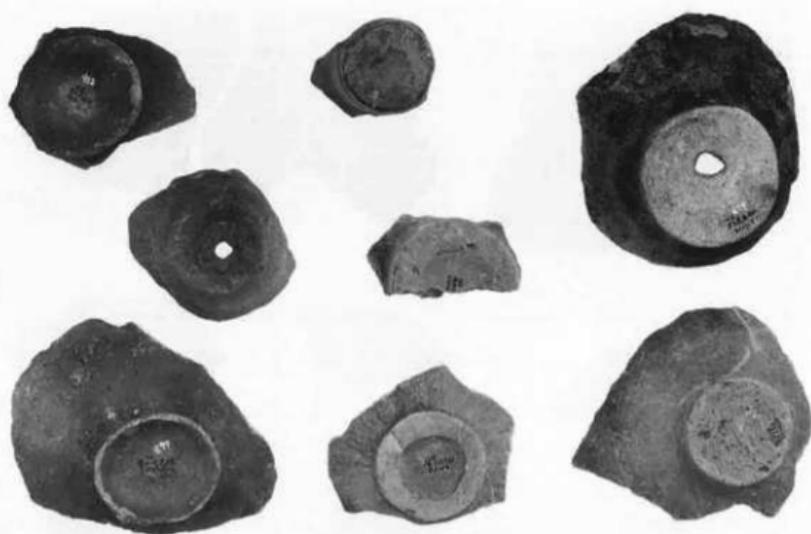
925

埋没谷（溝3）内出土 弥生時代後期土器：上層内 904・905・907・925

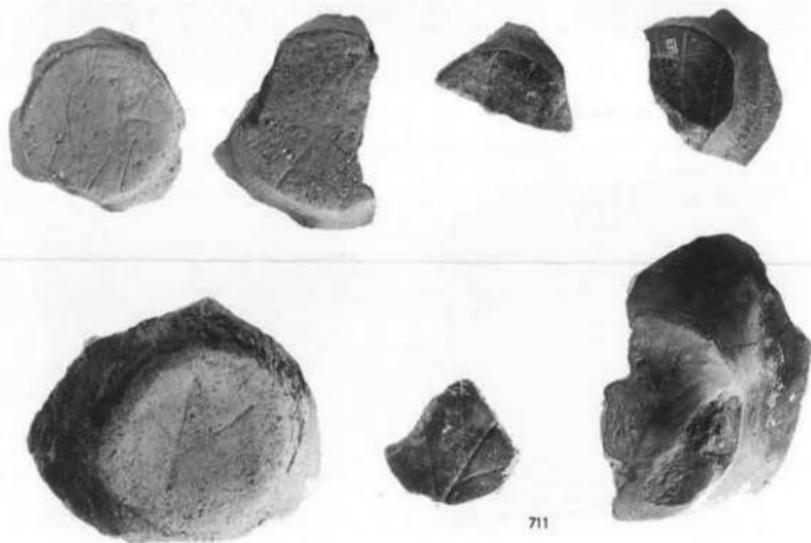
圖版40)



埋没谷（溝3）内出土 弥生時代後期土器：上層内-870・877・924・928・930・934

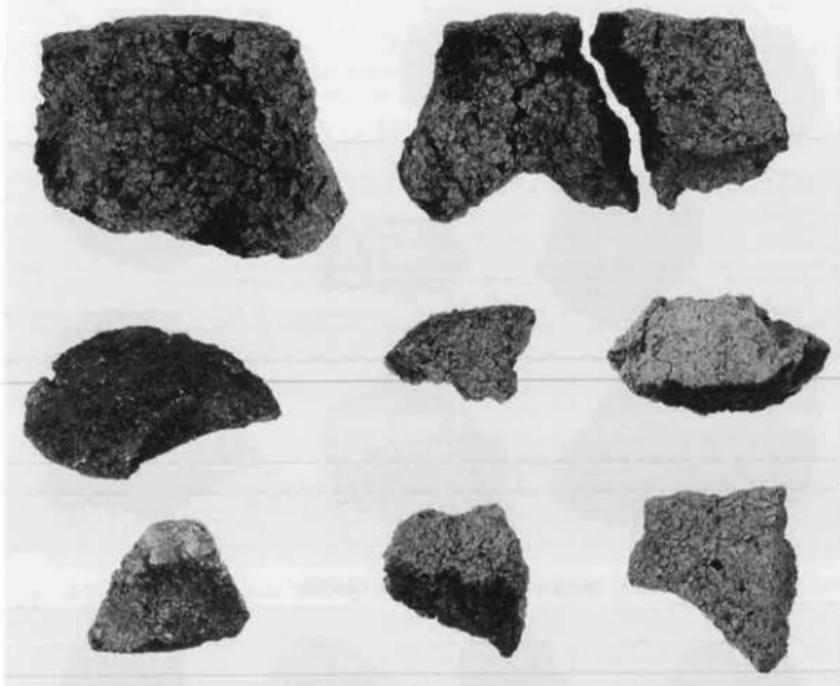


1. 埋没谷（溝3）内出土 弥生時代中～後期土器：各層内（底部裏面）

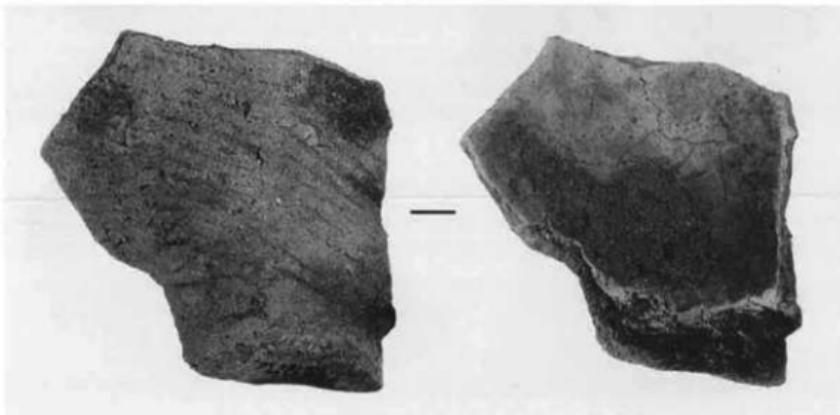


711

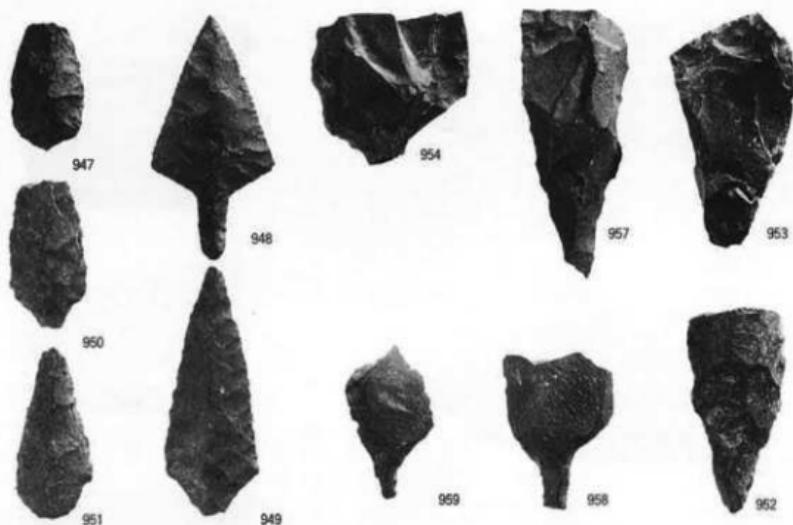
2. 埋没谷（溝3）内出土 弥生時代中期の木葉痕をもつ土器 第3層内-711



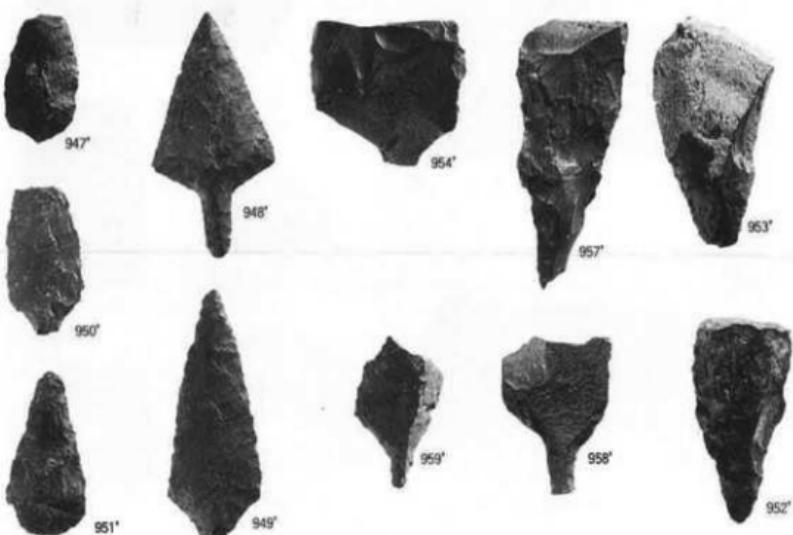
1. 埋没谷（溝3）内の弥生時代の炭化物



2. 埋没谷（溝3）内出土 弥生時代後期の炭化物が付着した土器



1. 墳没谷（溝3）内出土 弥生時代の打製石器（表面）947～954・957～959



2. 墳没谷（溝3）内出土 弥生時代の打製石器（裏面）947'～954'・957'～959'

図版44)



939



942



938



943



940



945



944



946



941



993



992

埋没谷（溝3）内出土 弥生時代の磨製石器(表面)938～946、弥生時代中期紡錘車(表面)：第6層内-992、第3層内-993



939'



942'



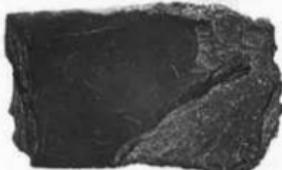
938'



943'



940'



945'



944'



946'



941'



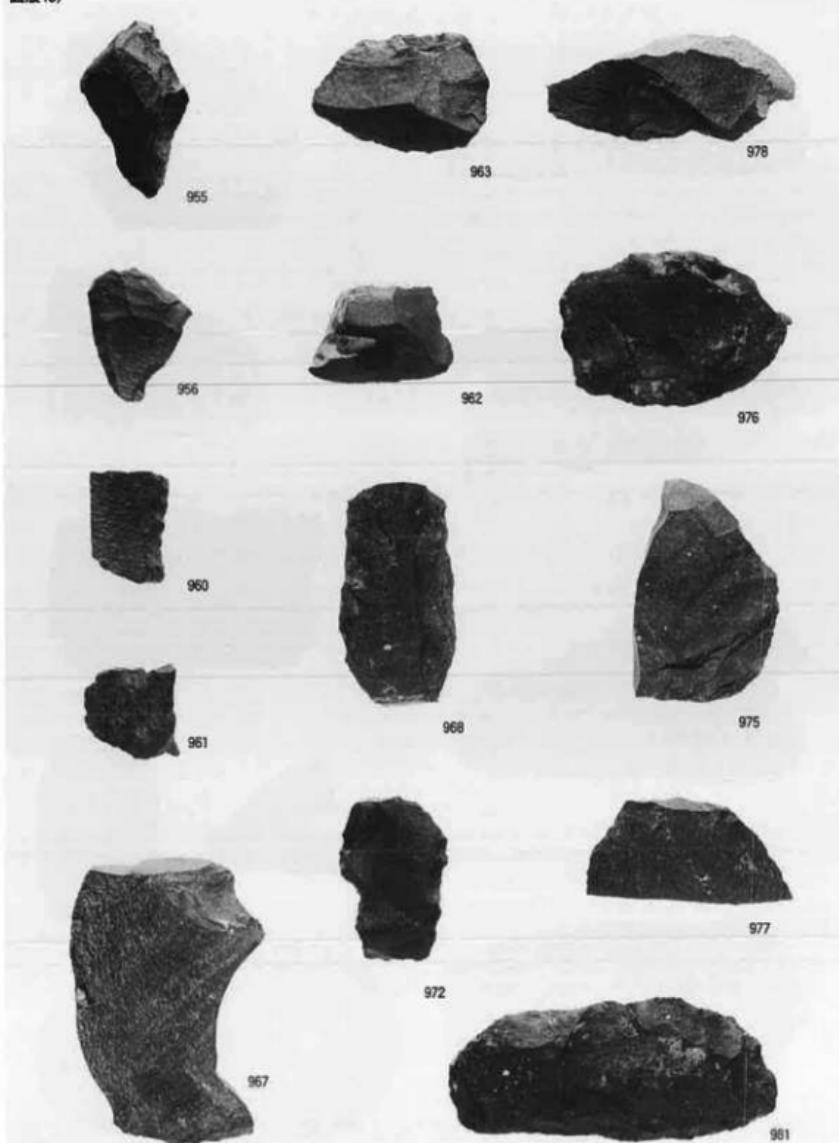
993'



992'

埋没谷（溝3）内出土 弥生時代の磨製石器（裏面）938'～946'、弥生時代中期紡錘車（裏面）：第6層内-992'、第3層内-993'

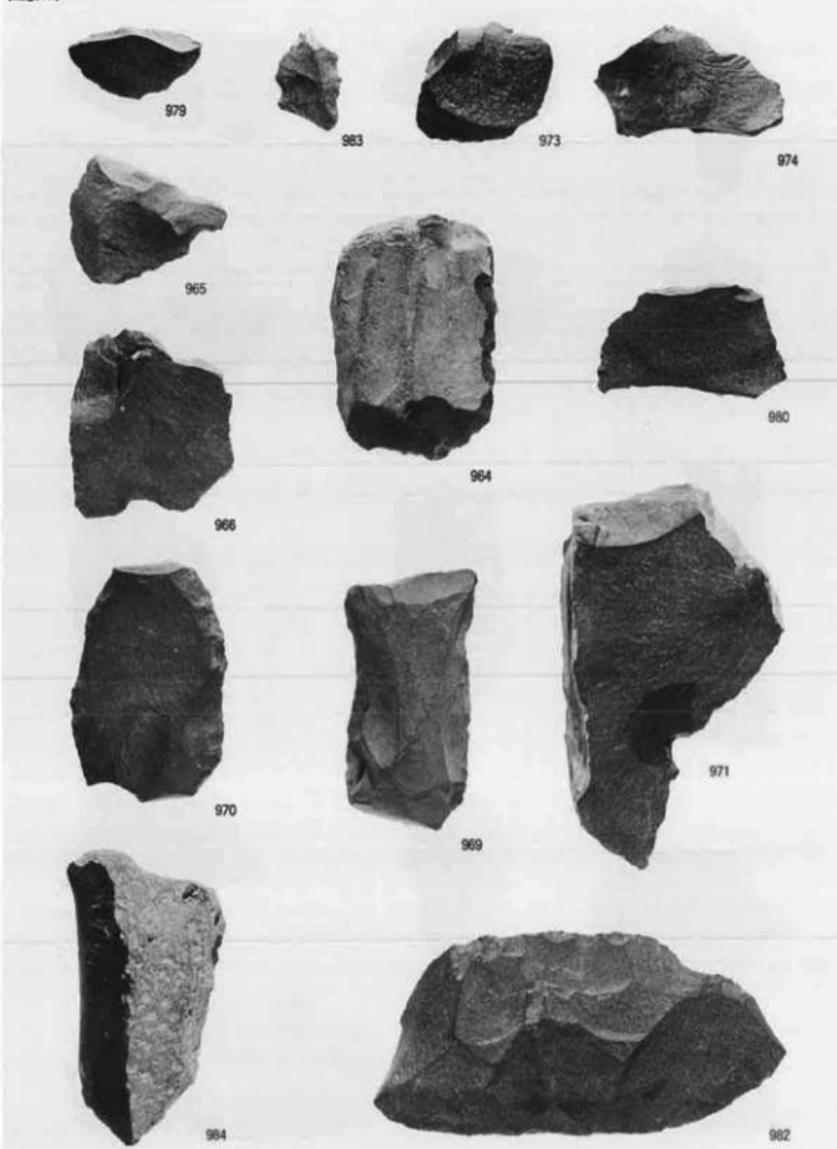
図版46)



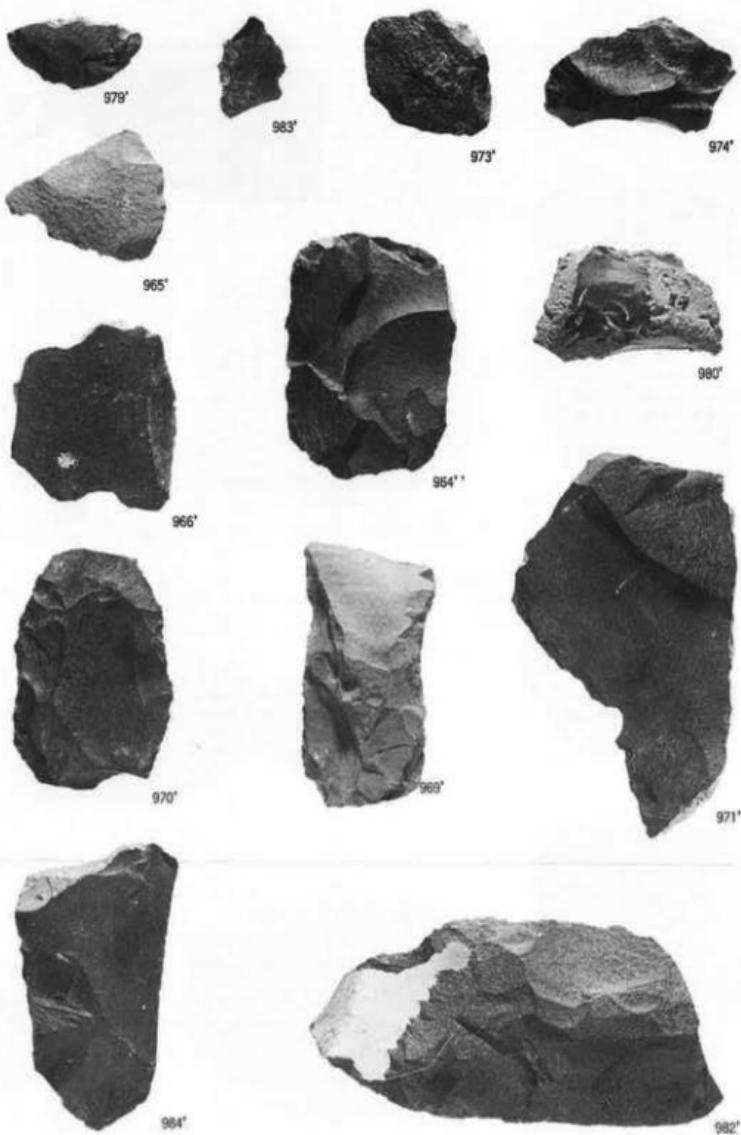
堺没谷(清3)内出土 弥生時代の打製石器(表面) 955・956・960~963・967・968・972・975~978・981



埋没谷（溝3）内出土 弥生時代の打製石器(裏面)955'・956'・960'～963'・967'・968'・972'・975'～978'・981'

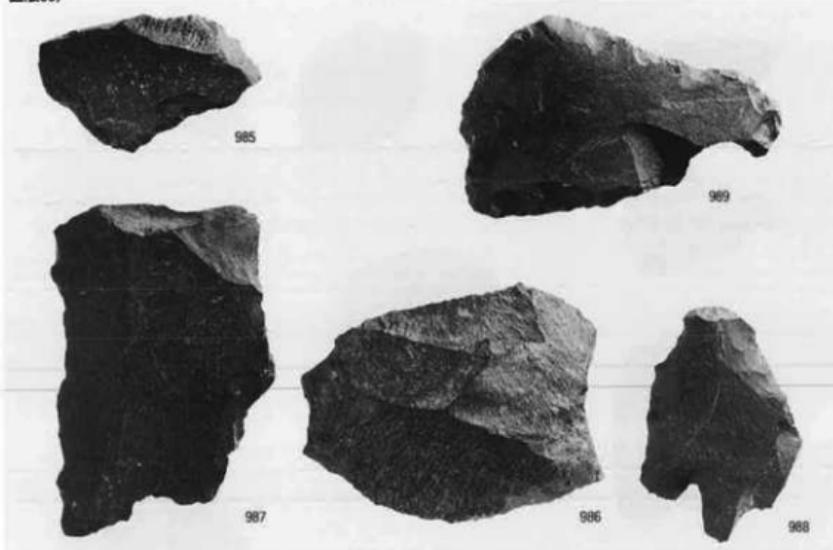


埋没谷(溝3)内出土 弥生時代の打製石器(表面) 964~966・969~971・973・974・979・980・982~984

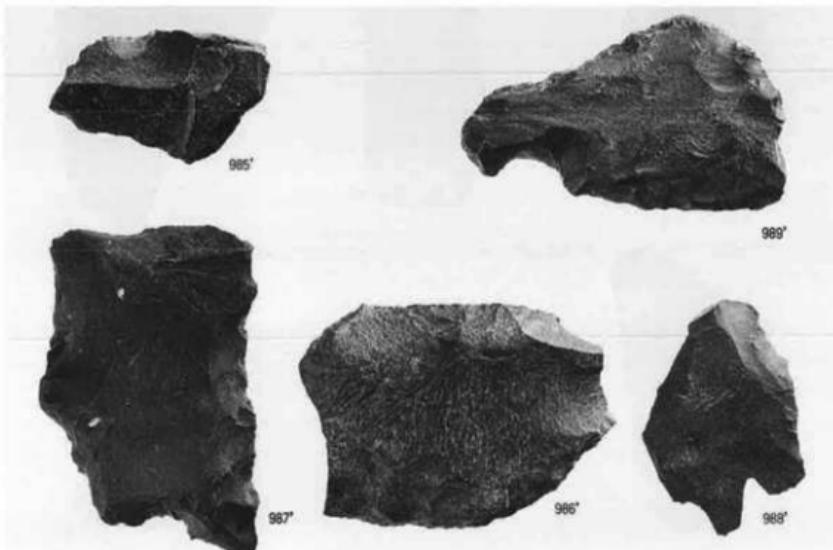


埋没谷（溝3）内出土 弥生時代の打製石器(裏面) 964' ~ 966' · 969' ~ 971' · 973' · 974' · 979' · 980' · 982' ~ 984'

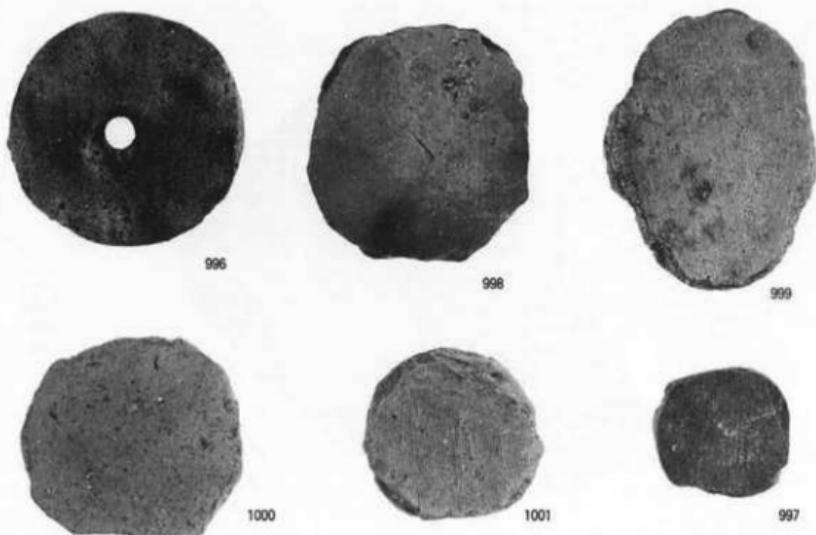
図版50)



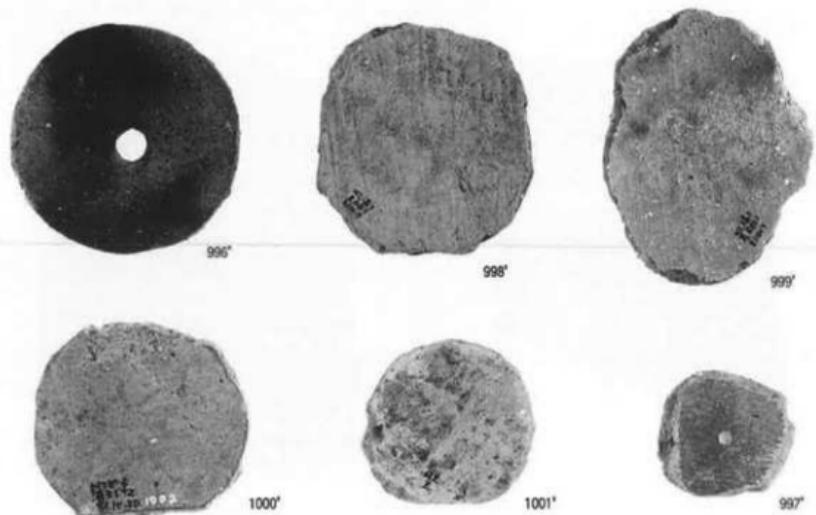
1. 中世遺構内出土 弥生時代の打製石器（表面）985～989



2. 中世遺構内出土 弥生時代の打製石器（裏面）985'～989'



1. 墓没谷（溝3）内出土 弥生時代の土製円板（表面）996～1001

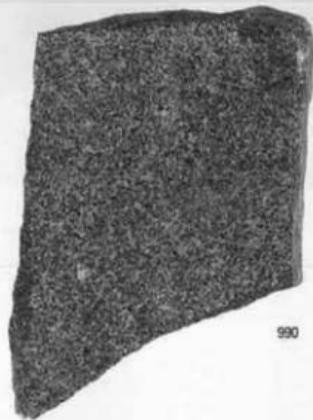


2. 墓没谷（溝3）内出土 弥生時代の土製円板（裏面）996'～1001'



790

1. 埋没谷（溝3）内出土 弥生時代の「埴燒」 第3層内-790

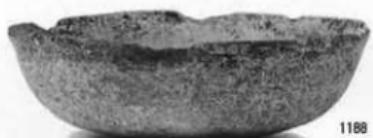


990



991

2. 埋没谷（溝3）内出土 弥生時代の砥石 第5層内-990、第3層内-991



1188



1189



1076



1092



1083



1183



1181

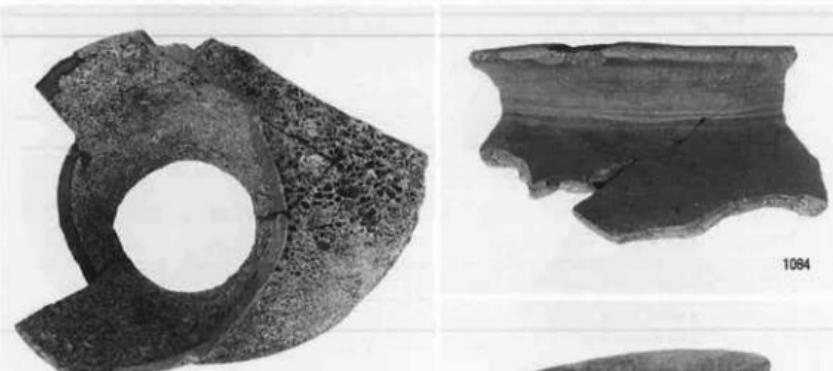


1173

埋没谷(溝3)・包含層内出土 古墳時代以降の土師器：1188・1189、須恵器：1076・1083・1092・1173・1181・1183



1187



1170

1064



1041



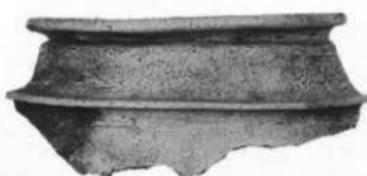
1132

1052

各遺構、包含層内出土 古墳時代以降須恵器：満2内-1041、落ち込み内-1132、包含層内-1170・1187、
土師器・埋没谷（満3）内-1052・1084



1038



1144



1003



1155



1122



1069



1196



1195



1010



1197

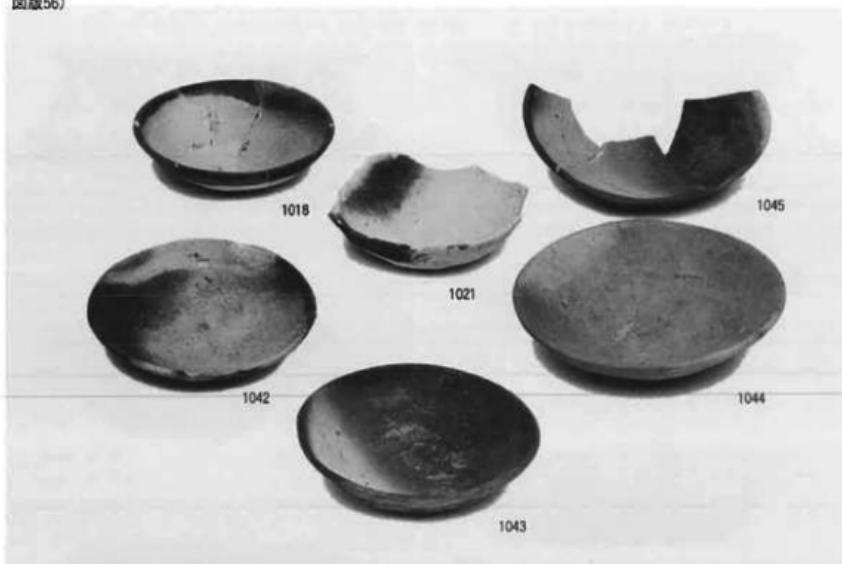


1194

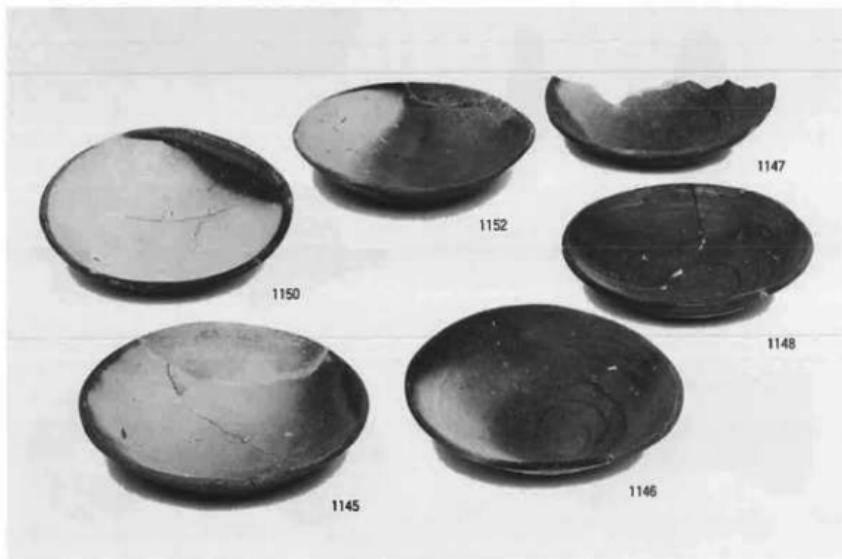


1193

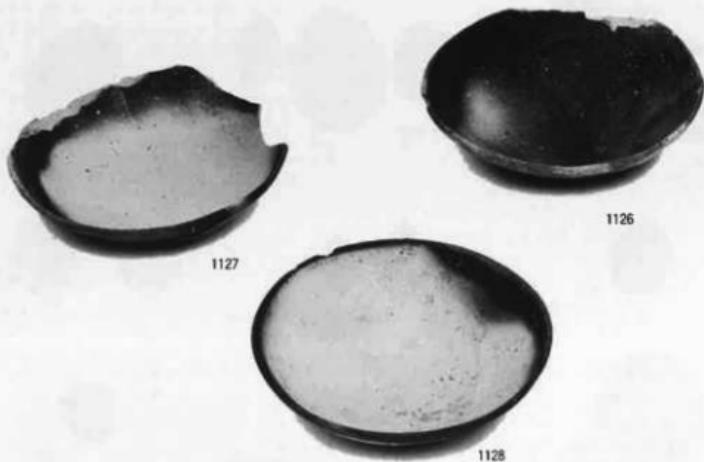
各遺構、包含層内出土 中世遺物 土器類：落ち込み内-1038・1144、満1内-1003・1010、満2内-1122、埋没谷（満3）内-1069、瓦器：土坑2内-1155、磚：埋没谷（満3）内-1197、土鍤：第5層内-1195・1196
銭貨：第5層内-1194、第3層内-1193



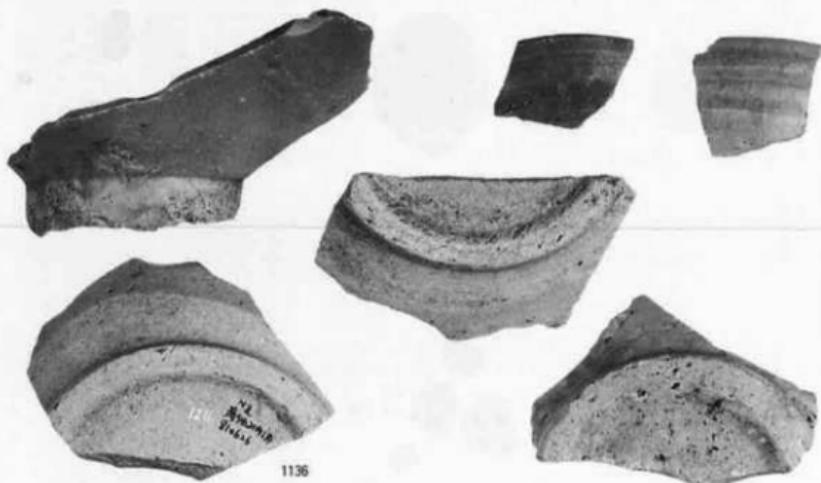
1. 各溝内出土 中世瓦器：溝1内-1018~1021、溝2内-1042~1045



2. 各溝内出土 中世瓦器：溝2内-1145~1148、埋没谷（溝3）内-1150~1152



1. 落ち込み内出土 中世瓦器：1126～1128

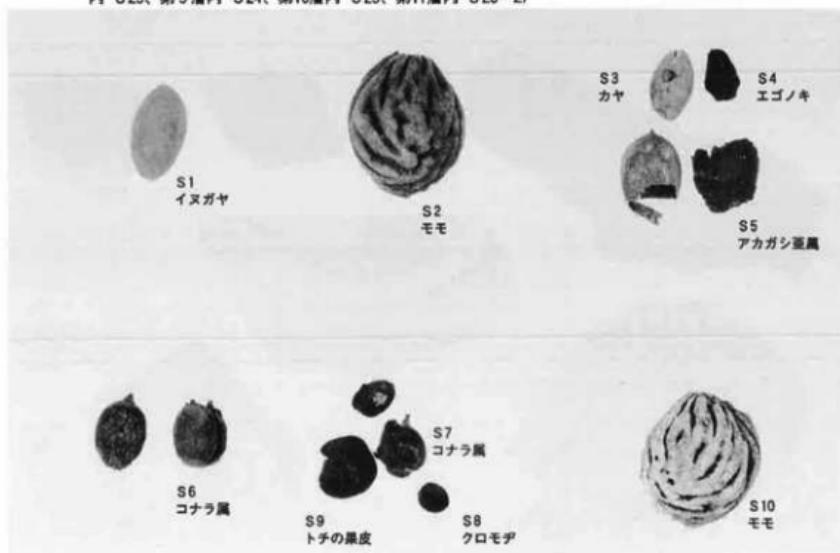


2. 包含層内出土 中世磁器：落ち込み内-1136

図版58)



1. 埋没谷(溝3)内出土種子 第5層内-S11~15、第6(炭層)層内-S21、第7層内-S22、第8層内-S23、第9層内-S24、第10層内-S25、第11層内-S26・27



2. 埋没谷(溝3)内出土種子 上層内-S1、第3層内-S2~6、第4層内-S7~10



S16
オニグルミ



S17
ヒュウタン



S18
モモ



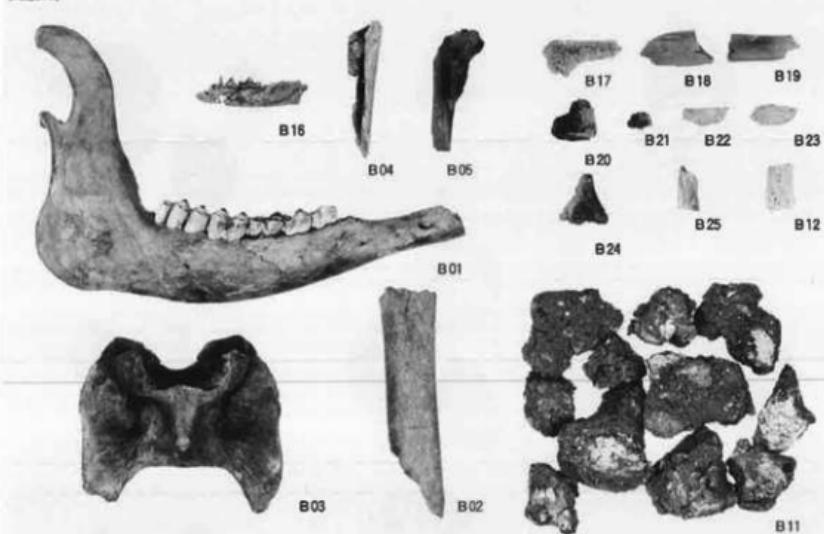
S19
モモ



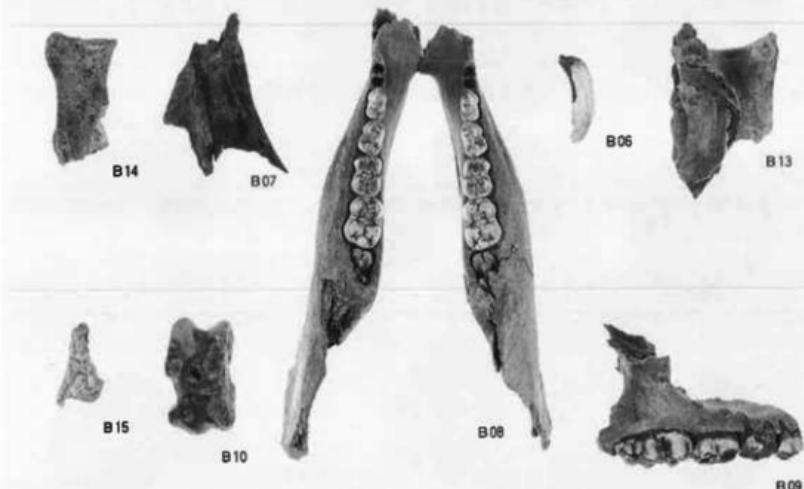
S20
モモ



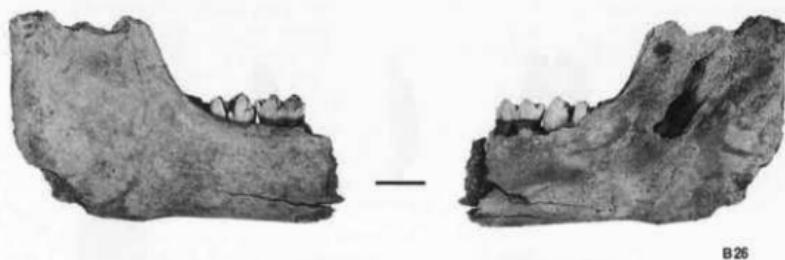
埋没谷(溝3)内出土 第6層内-S16~20



1. 墓没谷(満3)内出土動物遺体シカ:第9層内-B1~4、第8層内-B5、貝:第9層内B11、テン:第6層内-B16、焼痕をもつ不明遺体-B20~23、その他の不明遺体B12・17~19・24・25



2. 墓没谷(満3)内出土動物遺体イノシシ:第9層内-B6、第8層内-B7~9、第7層内-B10、第6層内-B13~15



B26

1. 埋没谷（溝3）内出土動物遺体イノシシ：第7層内-B26



B103



B104



B107



B101



B105



B106



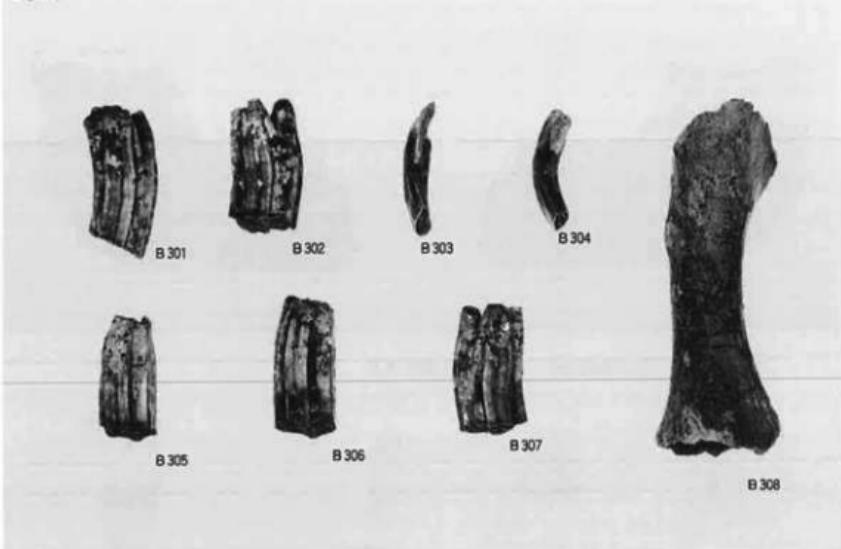
B102



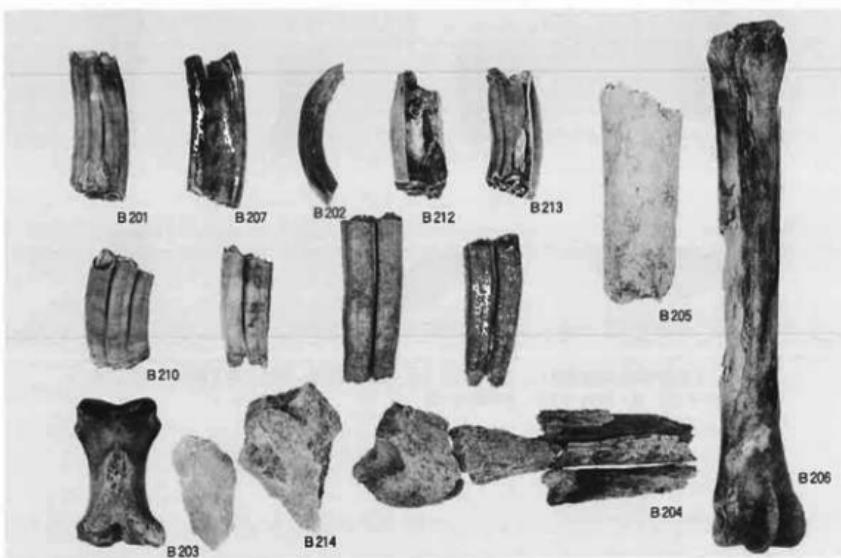
B108

2. 各遺構・包含層内出土動物遺体ウシ：溝2内B-101・102、埋没谷（溝3）第1層内-B103～105、
第3層内-B106、第5層内-B107、排水溝内-B108

図版62)



1. 井戸3内出土動物遺体ウマ：B301～308



2. 各遺構内出土動物遺体ウマ：溝1内-B201～204、溝2内-B205・206、埋没谷（溝3）第1層内-B207～209、第5層内-B210・211、第3層内-B212、壁面内-B213・214

報告書抄録

ふりがな	にしのつじいせきだい5じはっくつちょうさがいようほうこく
書名	西ノ辻遺跡第5次発掘調査概要報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	曾我恭子
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会
所在地	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
西ノ辻遺跡	東大阪市東山町63~65	27227	1981年 8月5日 ~10月28日	270m ²	貸しビ ル建設 工事
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
旧河道 集落	弥生時代 古墳時代 室町時代	埋没谷 井戸 土坑 柱坑 杭列	弥生土器・石 器・土師器・ 須恵器・瓦器	縄文晩期の土偶 弥生後期の埴輪?	

西ノ辻遺跡

—第5次発掘調査概要報告書—

2000年3月31日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会

印刷 ミラテック

西ノ辻遺跡—第5次発掘調査概要報告書— 正誤表（お手数ですが下記のように訂正・追加をお願い致します。）

訂正箇所	誤	正
・本文目次 VI	105	106
・図版目次 図版55) ・163頁 図版55)キャプション1行目	落ち込み内 - 1038 溝2内 - 1122	落ち込み内 - 1122 溝2内1 - 1038
・図版目次 図版56) - 2. ・164頁 図版56) - 2. キャプション	各遺構内出土 中世瓦器：溝2内 - 1145 ～1148、埋没谷(溝3)内 - 1150・1152	落ち込み内出土 中世瓦器：1145 ～1148、1150・1152
・93頁表5 6層その他 2行目	脊髄骨	脊椎骨
・106頁 6行目	みらた。	みられた。
・106頁 第76図内	自然河川	埋没谷1
・126頁 図版18)	255と254の番号	それぞれ254と256に入れ替え
・132頁 図版24) - 1. 図版、キャプションに番号追加		(図の左列上から下へ) 93・462・520
・133頁 図版25) - 1. 図版、キャプションに番号追加	第6層内 - 売	各層内 - 売 (図の左上から下へ) 179 56 107 707 175 806
・134頁 図版26) - 2. 図版、キャプションに番号追加		(図の左上から下へ) 174 556 918 52 541 463